

川柳塔

昭和十四年八月一日発行（毎月一日発行）
 平成十五年八月一日発行（毎月一日発行）
 創刊大正十三年 通卷九一五号

日川協加盟



No. 915

八月号

第9回 川柳塔まつり

＜同人総会＞

と き 10月5日(日) 午前10時～11時
ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F生駒
(近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車・TEL06・6772・1441)
議 事 平成14年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成15年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

＜各賞表彰式・記念句会＞

と き 同 日 午前11時開場・午後1時開会
ところ ホテル・アウィーナ大阪 4F金剛(中・西)
表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞・
各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。
おはなし 「古川柳のおもしろさ」 板 尾 岳 人
兼 題 「揺れる」 (大阪) 江 口 度 選
「癒やす」 (和歌山) 松 原 寿 子 選
「午後」 (鳥取) 白 根 ふ み 選
「絵」 (大阪) 高 田 美代子 選
「豊」 (北海道) 大 橋 政 良 選
「当たる」(事前投句・9月5日締切) 河 内 天 笑 選
◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正午・午後4時半終了予定

会 費 2000円(記念品呈)当日いただきます

＜懇親宴＞

と き 同 日 午後5時～7時半
ところ ホテル・アウィーナ大阪 3F葛城
会 費 5000円
宿 泊 ホテル・アウィーナ大阪 8000円(朝食付)

- 事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは本誌同封のハガキに明記の上、9月5日(金)までに本社事務所宛お願いします。
- 懇親宴・宿泊のご送金(句会費をのぞく)は同封の払込用紙でお願い致します。
- 記念句会・懇親宴には同人・誌友にかかわりなく、一人でも多くの方々の御参加をお待ち申し上げます。

主 催 川 柳 塔 社

堺大漁夜市と夜市川柳

河内 天笑

大阪の住吉神社は海的神様、漁業の神様として、昔から漁師や魚商人が心のよりどころとしてお参りしていました。古くから繁栄を続けて来た自由都市堺には、地元の魚商人はもとより各地から漁船や魚商人が集まり、鎌倉時代には魚商人達が「魚座」という組合をつくっています。

住吉神社は毎年八月一日が大祭の日で、その日、堺の浜では大きな魚市がたちました。この魚市もだんだん規模が大きくなり八月一日だけでは捌き切れず、前夜つまり七月三十一日の宵から魚市を開くようになり、これが堺大漁夜市のはじまりになったと考えられています。

こうして七百年余りの伝統をもつ大漁夜市は正に真夏の風物詩として愛され親しまれて来ました。しかし、昭和十三年、

軍閥主導による帝国主義のもと戦争へ向かっていった体制下で、中止の止むなきに到りました。そして敗戦。戦後の苦しい時代を乗り越えた昭和二十四年、不死鳥の如く堺大漁夜市は復活しました。宵闇の大海に「ドーン」と花咲く打ち上げ花火を合図に、大漁夜市は幕をひらきます。阪堺線、南海本線それに大阪市電などで来る来るわの人の波。夜店の賑わいとカーバイドの匂い。砂ほこりを抜けて大浜海岸に出ると、一帯は煌々と裸電気の行列。

値切る手へ夜市の蛸はからみつく

山 鈴

当時中学生だった私は、人間のエネルギーの凄さを実感出来たお祭りでもあったのです。なお、門限に煩さかった父もこの夜に限って門限なしと許された事も、遠いノスタルジアになっています。

昭和三十年代の後半から堺の海岸は様相を一転させます。臨海工業地帯として遠浅の海は埋め尽くされました。そして昭和四十九年から遂に夜市は出来なくな

ったのです。漁船は消え、漁師は陸にあらりました。

私の中にある郷愁にも似たあの「大漁夜市」を、何かの形で残したいという思いがずっと続いていて、川柳堺に「夜市川柳」として復活させる事が出来ました。昭和五十七年三月の常任理事会で、西尾葉主幹が大萬川柳の復活についてご提案された際、「実はこういう計画があります」と「夜市川柳」の事を説明致しましたところ、葉主幹はこころよくこれを受け入れて下さり、その年の六月末締切分を第一回として「夜市川柳」が発足しました。そして今年は第二十二年度に入ることになりました。皆様方のご支援の賜と感謝しています。

心がわりはあじさいも神様も

エレベーター見つける早さ特技なり
声かけてはしくないほど落ち込んだ
箸割って七味かけたら夢だった
腹立てた顔はすぐさまほぐしとく

座右の句

ぬぎすててうちが一番よいという

(水府)

私の句

寒風に今日も元氣だ枯れすすき

中崎深雪

川柳塔 八月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 堺大漁夜市と夜市川柳

河内天笑……(1)

僕はラッキーマン

高瀬霜石……(2)

川柳塔(同人吟)

河内天笑選……(4)

自選集

奥田みつ子選……(55)

水煙抄

奥田みつ子選……(78)

■特集 戦争と私

太田 昭・森下愛論・中塚礎石・門谷たず子・川端柳子・中後清史

福本英子・田中正坊・石倉美佐子・小西雄々・恒松町紅・岡本久峰

板東倫子・園山多賀子・早川棲世・乙倉武史・井上桂作

麻生路郎物語(20)

東野大八……(88)

愛染帖

波多野五葉庵選……(91)

誹風柳多留二四篇研究 57

政岡日枝子選……(96)

茴香の花

政岡日枝子選……(96)

僕はラッキーマン

高瀬霜石

僕はゼロ歳の時、病氣(小児ガン)で片方失明して以来、何不自由なく(というのには、二つの眼でモノを見たことがないので、その良さがわからない分、不自由は感じないということか)暮らして、現在に至っている。

五十三年前のある日、僕を弘前大学付属病院に連れていったところ、「この子は手遅れです。助かりません」と言われたという。

頭が真っ白になっている母のところへ一人の医者が立ち、「その子を私に預けてみませんか。仙台(東北大学)にいた時、一度同じ病氣の手術に立ち会ったことがあるので、もし私でなければやってみましょうか。但し、命の保証は出来ませんが……」と言ったので、薬にもする思いでその方に全ておまかせしたのだそう。

手術は成功し、(その後、放射線治療するなんていうこともなく、なせ五十年前だからそんなものだった?)今こうしてフツの中年男になったわけである。

僕は小さい時から母に、「あんたはとても運のいい子」なのだと続けられてきた。実際、たいしたトラブルもなく今日まで生きて

「鱗」	上田宣子選	(98)
一路集「耳」	田中みね選	(98)
「このごろ」	西村哲夫選	(99)
初歩教室「気」	三宅保州	(100)
秀句鑑賞「同人吟」	新家完司	(102)
水煙抄	池森子	(104)
日川協香川大会参加句碑めぐりバスツアー	西口いわゑ	(105)
酒井輝先生を偲んで	島ひかる	(106)
七月本社句会		(108)
各賞選考規定		(112)
各地柳壇(佳句地十選/鶴田遠野)		(114)
柳界展望		(129)
八月各地句会案内		(130)
■編集後記	楓葉・義子	(132)

座右の句
私の句

島一つ買うて暮らせば涼しかろ

(薫風)

狭すぎる視野をカラスに笑われる 清川玲子

こられたのは、その「僕は、ラッキーマンだ」という思い込みがよかったのだろう。

小さい頃から、家族は僕が何かをする度に「危ない、危ない」と言って過保護に育てられたせいで、恥ずかしながら運動神経はゼロ。その反面、「たった一つしかない眼を大切にしないさい」という忠告を尻目に、趣味は読書に、映画(いまでも年に百本は観る)に、川柳と、眼を酷使するものばかりだ。

そんなわけで、運動不足のせいで少しウェイトオーバーで、毎日ビールを欠かさないうめ肝臓の数値がちよっと高いのと、歳のせいか脳細胞が若干錆びついてきていることなどを除けば、フツウの人と何ら変わりがない。

ある日、「がんの子供を守る会」の存在を知り、他人事とは思えずすぐ会員になった。そして思った。今まで、他人さまの為になることを何ひとつとしてしたことがない僕が、「ただ、元気に生きている」ということだけで、ひよっとしたら同じ病氣を持つ後輩(?)に、そしてそのご家族に、勇氣を与えることができるのかもしれない。もしそうであれば、僕にとつてもこんなにラッキーなことはないなど。この度一念発起して、その会報誌にこんな「僕の告白談」を投稿してみた。蛇足に、下手な川柳を添えて……。

いちにちを大事に生きるよく笑う 霜石



河内天笑選

河内長野市 村上直樹

ガンに勝つ意欲にはっとする見舞

張り裂ける嘆きに酒という薬

後悔がぶんぶん匂う二日酔

熱唱がぼつかりくれた虚脱感

ミクロンに賭けた匠の太い指

肩書きがない楽しさに有頂天

西宮市 西口 いわゑ

さらさらと水は宴をくり返す

ランドセル歯抜けの顔も愛らしい

友達が笑いとばしてくれました

人間を虜にしてる錦鯉

ひとびとを見物してる象の鼻

生きるとは潮の満ち干の如くなり

柏原市 永浜 加津子

梅雨冷えの古いへやさしい茶粥煮る

缶蹴りや鬼ごっこの児見かけない

足腰は口ほど気儘許さない

差し当りワールドカップまで生きる

素足から生きる実感貰つてる

何不足ないのが理由ウツの人

竹原市 小島 蘭 幸

父のふところ森がある丘がある

グランドピアノも私も古くなって来た

プレゼントへ父は黙って頷いた

風の岬で両手広げていた父だ

遠くばかり見ていた父を知っている

禁酒禁煙もう父でない父でない

鳥取市 美田 旋 風

しばらくは美人に逢えぬ白内障

貫禄がつくと定年近くなる

ポイ捨てのモラル ゴミ袋にたまる

欠点が分かると楽に付き合える

わが庭に毎年同じ花模様

気前よく助け船出す赤字国

高槻市 西谷 治三郎

こわい子と強い女の居るお国
五座消えてトンボリかにと食いだおれ
どなたにも頼らず生きるホームレス
ワンちゃんも子供も旦那もみなベツト
散歩先トイレの事情ふと思う
不景気に儲かる電話よくかかる

東かがわ市 池内 かおり

手始めに犬のロボット飼うことに
盃が男の口を軽くする

しょうがない阪神と言う恋敵
弟のおむつ洗った小川です
好きな事するバアちゃんが光ってる
しあわせな男の笑顔隙だらけ

大阪市 神夏磯 典子

母の星へ誕生日ですありがとうございます
入江にもドラマはふいにやってくる
夫の顔上機嫌ですさくらんぼ
反省の出来る袋を持っている
同じことまた言ってはる同い歳
何もかも遠景になり美しい

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

やり直す気持になった褒め上手
だまし舟嘘もホントも乗ってみる
炎天下 頭の渦をまです覆う

耳搔きを持ってあなたを追いかける

体温を分け合う愛を求めている

太鼓打つ穏やかでない胸のうち

富田林市 藤田 泰子

十人に好かれようとは思ってない
水色が好き青空が好き海が好き
落日や夜明け待っている国がある
干支まわる申年の梅漬けている
捕らわれの身の上話象とする
あと十年住めるだろうかブチ修理

米子市 中井 ゆき

大声で笑う友達待っている
地獄耳感度におつて丁度いい
老女とは思いたくないでも老女
風紋よ砂も絆をもっている
好きだから正体見ないようにする
ありがたいと言いたくなって街に出る

羽曳野市 川口 信子

いのち燃ゆ老いという字を切り離す
春うら茶髪の大工よく眠り
釣人の一人は土筆摘んでおり
にせの壺わが家の床によく似合う
梅染まるわたしの彩は子に染まる
ひとつ散るまたひとつ咲くそしてまた

唐津市 久保正剣

熊本県 岩切康子

花街に育ちおほこの耳年増
添乗員老人会を譲り合う

蒔かぬ種も生えます田圃の草筆り

日曜大工道具に腕がともなわぬ

親の敷くレール横目にギタリスト

唐津市 井上勝視

八月の黙禱に降る蟬しぐれ
不孝した悔いに重たい花手桶

漬け物とお茶にこだわる歳になる

欠点を熟知した老い支え合う

戒名に柳の一字は貰いたい

唐津市 山口高明

前衛の画家は箒を振り回し

バス停で会釈を交わすだけの仲

突然の恐怖独りのサウナ風呂

目出し帽だけが知ってる真犯人

密談の部屋に一匹蚊がうなり

唐津市 宗水笑

囑託になった上司を部下に持ち

気のひける年休届け妻にさせ

呑兵衛の嗅覚犬に劣らざる

初耳の顔で頷く聞き上手

自画像は紫陽花色の七変化

髪カット気もすっきりと披露会

古の心に咲かすクラス会

紫陽花に水撒き生の彩貰う

ゆっくりと偲べば恩人ばかりなり

検診の結果に乾杯共白髪

高知県 小澤幸泉

高校の門が重なるように見え（不登校Aのこと 2句）

高卒の軽い荷物を負うて生き

つなぎ目にふと愛情を気づかされ

舌先で喜怒哀楽を紡ぎ出し

つなく手に自立をさぐる春の街

東かがわ市 瀧井勝

百葉の長よと妻の目分量

子離れの邪魔になつて親の自負

手袋の街小刻みのミシン音

横文字が増えて情緒の枯れた街

褒められて芯から疲れ溶けてゆく

東かがわ市 神保坊太郎

も一人の自分の愚痴を聞き飽きる

この道へ来ると軍靴の音がする

どの人も綺麗な嘘を言う見舞

みじか世や白い黒いはもう言わぬ

太刀打に負けライバルを褒めころし

東かがわ市 川崎 ひかり

弘前市 今 愁女

平然と魚捌いている私
すき間さえあれば根をはる草の性
自分史の第一章にある戦後
母さんが亡くなるなんて信じない
拡大鏡で女の顔は見えない事

愛媛県 中居 善信

菜っ葉汁母はやさしい人だった
もう何の衞いも持たぬ老いの皺
ルビ打っても間違う僕の早とちり
禁煙三日僕の我慢はこの程度
式典へ男社会の顔ばかり

松山市 古手川 光

いい人で何でも喋るのが怖い
脳天をいっぺんしたい大掃除
お札しか無くて賽銭入れそびれ
適切に善処しますと旨いこと
死の商人が何年ぶりかほくそ笑み

松山市 宮尾 みのり

組織からいつしか外れていく個性
丸メガネお笑い系の顔にする
生真面目な無口のぼつりのを得る
能筆の墨は素直に和紙に添い
たそがれへアク抜けてきた影法師

さくらんぼ口に遊ばせ種飛ばす
ガラス器に明り点してさくらんぼ
巢を張って主の蜘蛛はみじろがぬ
神妙に茅の輪くぐって厄祓い
岩木山夏越のはらい神事宮

弘前市 須郷 井蛙

一通の手紙へ何度も辞典ひく
娘が五人母に電話が鳴りやまず
遊んでる蟻を見つけたことがない
表現の自由くずれる有事故
侵略の汚点千年続きそう

弘前市 高瀬 霜石

好奇心僕もときどき怪我をする
原色がスキップしてる夏祭り
派手な人ふたり火花が散っている
納豆が大きい顔をする我が家
恩人の戒名がまあ長すぎる

弘前市 一戸 ツネ

乾杯の音頭に未知の夢がある
貪欲に生きてまだまだ米を研ぐ
数珠をもむ色即是空風の道
風薫る雲のすき間のものがたり
逃亡者死角の郷で米を研ぐ

弘前市 高橋 岳水

媚売らぬ花は花屋に売れ残る
長生きのための粗食と言ひ聞かず
やさしさに触れて余生が弾み出す
奥の手をさけて正攻法に拠る
押すよりも引く頃合いのむずかしさ

黒石市 相馬 一花

沢庵の極意を姑から盗む
追伸に本音を吐いて背伸びする
曖昧な男に娘やれません
薄髪をスキンヘッドにする勇氣
麗人に飽きて不美人草探す

砂川市 大橋 政良

強がりを吐いて内心落ち着かぬ
あくびして立去る猫のふくれ面
もう一つ顔を持つて足うら
ただ走るだけで本音は語らない
つまずいた石と親しくなりました

静岡県 藪田 獏 杏

老いつれば軽く約束出来ません
横恋慕そんな炎の初期消火
かげろうにバスの走りが酔って見え
平成にまたも戦を見てしまふ
おいお前腰を伸ばせよ影法師

横浜市 保田 絹子

宇宙でも活躍三浦折りの知恵
折紙の偶然性にのめり込む
おしゃべりの見舞病人そつちのけ
キャンバスが特等席をひとり占め
一服のベンチを鳩に囲まれる

横浜市 小野 句多留

湯加減を聞いて飛び込む野天風呂
なだらかな登り坂です夫婦道
安易さも一役かった自己破産
報告を終えた幹事の至福時
銀座裏朝を起こしにくるカラス

東京都 岸 野 あやめ

ライブにいつかなります同期生
ステッキに頼って伸ばす腰の骨
善人の財布を風が吹き抜ける
デパ地下の御馳走家でまずく食べ
お風呂場で江つてからの弱気です

東京都 播本 充子

ああ加齢筋肉痛で終らない
父としか思えぬ人のラブコール
使い捨てカメラがくれた良い記念
無料バス枯木に花を咲かせましょ
掃除魔になりそう待望の新居

滋賀県 中 宗 明

ペットでも家族と同じ 愛したの
得意気にペラペラ英語話す子等
スキヤンダルはタレント仲間勲章だ
信じ合い共に白髪の喜寿迎え
建て前と本音メールで事が足り

富山市 舟 渡 杏 花

古いおんなの熱い涙をもて余す
付けボクロふたつおんなの体当り
矢面に立って姐御の名に恥じず
本能寺の空気嗅ぎ取る鼻をもち
ひとり芝居見ていた猫が立ち上る

亀岡市 井 上 森 生

友垣が囲む昔の自在鉤
朝市のイカ アジ ハラミ囲炉裏端
幸せは書斎を荒らす孫がいる
シニアの時計はゆつくりの方がよい
思い切り生きたら証など要らぬ

京都府 稲 葉 冬 葉

女帝夢でないかわい愛子さま
家族が居てもなぜか一人のわびしさよ
不快指数の中で列島病んでいる
内緒にしとこ生命線が伸びている
兄弟の縁薄き世に生き残り

京都市 丹後屋 肇

胸開けて見せたい奔る想い
ストーカーになりたいくらい狂おしい
窮すれば男の胸に灯がともる
天婦羅が手招きをする地下売場
穏やかに癌と向き合う般若経

京都市 高 島 啓 子

肉を焼く手つき常連だと解り
何ごとも最初は楽し習い事
呼んで来る犬より来ない猫が好き
大花火 一瞬見得を切って消え
怠けぐせ極まるころに新学期

京都市 都 倉 求 芽

B 29のピラを拾って読んだ日よ
夏の扉を蝉一斉に突き破る
血迷うて雨に毒づいているカンナ
本当は許してあげると決めている
人と猿 毛二本の差DNA

大阪市 西 出 楓 楽

雛と武者終ると日々が加速する
花作りまず土作り始めねば
どこでも寝るのは芸のうちだろう
病氣したらトクするようなコマーシャル
飲み込んだ言葉いい味出してくる

大阪市 前 たもつ

はたる舞うわがふるさとの生家朽ち
ほつほつと持病顔出す雨つづき
初孫を抱いたうれしさこそばゆさ
日記三日溜めて記憶をテストする
大阪城 外人さんを連れてあげ

大阪市 古今堂 蕉子

会う度に雨後の筍のような孫
駅前に住んで梅雨でも傘いらず
自慢する事なくなれば謙虚なり
検問に悔いても遅し酒の息
祖谷溪谷 天下一品露天風呂

大阪市 川原章久

連ドラに朝の葉の飲み忘れ
甲種合格あれから長い傘寿まで
マネキンの腕が転がる更衣
ハイテンポ リストラ降らす夏の雨
サラ金の優しい声のコマーシャル

大阪市 鶴田遠野

食べ放題胃腸の弱音切り捨てる
若干の愛の余裕があるボツケ
父だつて心の扉開けてるよ
ホーム金庫アルバムだけが入れてある
腐れ縁妻も思っているらしい

大阪市 川端一步

当百もやつと笑顔の法善寺
夏が来る戦争展という歴史
職がないまるで戦後の叫び声
紫陽花は妊娠に頬を染めている
友達ほどよい距離で飲める人

大阪市 町田達子

競い咲く城北園の花菖蒲
どの花もお国自慢の顔で咲き
番蝶ふわふわ人に似ておかし
春の院展 視野を広げたミュージアム
念願叶いハワイアンキルトやつと見る

大阪市 川久保睦子

わたしが美人つてきつと酔うてはる
しあわせな猫で美人の膝にいる
耳貸した噂意外に加速する
檜の木のような男の妻でした
病院の薦める薬多すぎる

大阪市 板東倫子

鋭角で急所を衝いて来る他人
バックボーン曲げぬ辛口評論家
金出せば物分り良い人と言う
逆ろうて昂ぶる孫よそれによし
万景峰号の虚勢空しい四面楚歌

大阪市 津村 志華子

カプチーノ女の自慢きいている
高層でわたし独りの兎小屋
いろいろの過去を黙して青テント
贈られた幸福の木が元氣ない
こだわって米の名前はひとめぼれ

大阪市 鈴木 トヨ子

せせらぎで恋人を呼ぶ螢の灯
よく動く茶髪のママが見直され
煙草止め芯なし人になりそうだ
試食テレビ左ぎつちよで箸下手で
金持ちも私も冥土では同じ

大阪市 津守 柳 伸

糟糠の妻バツテラが好きと言う
鯖街道さすがのすしへ要予約
選抜へ柿の葉すしも力添え
ふる里のよさしみじみとサンマずし
かぶらずし近江市場も夏の陣

大阪市 榎本 日の出

登山靴一回きりで不満そう
鉛筆を持って出かける散歩道
ダイエツトしてると見えぬ食べつ振り
いい夫婦見せつけられた尊敬語
負け犬も生きてく術は身につける

大阪市 中澤 伽羅

遺言書書く段取りが出来てない
座ったら横になりたいたたまの目
初七日が過ぎて芯から涙する
涙拭きふき探してるコンパクト
妻の許可もらって宝くじを買う

大阪市 熊代 菜月

牡丹咲くつばみ数えてうれしかり
思いとは違う動きの筆のさき
体調で二転三転する旅行
禁煙を自己満足がささえてる
父よりも先に地酒が着いて待つ

大阪市 寺井 東雲

散らかった部屋は仕事が良く出来る
アルバムに歳のとらない父が居る
男かてたまにこんがり妬く時も
おでんことと酒の匂いがついてくる
外国に特攻隊があったとは

大阪市 岡本 久峰

凍りつく仏ふんどし剥がされる(シベリア抑留)
馬の屍肉食らって生きたシベリアよ
舌鼓打ってシェパード食った日よ
栄養失調ふくれて痩せてこと切れる
生きるはず無かった余命愛おしむ

大阪市 大川 桃花

和泉市 中川 楓

パソコンの上でタップを踊る指
五分五分の手術に向かう老母に添う
告知した医者裏切つて父卒寿
ピヨと鳴きひよこ売られて行く夜店
写真撮るポーズにもある今むかし

大阪市 伊藤 博仁

一言が乱反射して疎くなる
あつさりと認めたくない癖がある
はんなりと着物とけこむ加茂の橋
娘がくれたカーネーションに裏はない
物忘れここまできたらほんまもん

大阪市 杉澤 汀

かけ声はするが槌音聞こえない
いつかきた道だがとんと様変わり
だれに見てもらうでもない山桔梗
咲いてまですねた姿のねじり花
孟蘭盆会桔梗刈萱女郎花

池田市 栗田 久子

もう少し離れて聞こう蟬時雨
西瓜割り季節を運ぶ風が吹く
お互いの願いをこめてワークシエア
涼風がふと立ち初めて地蔵盆
夾竹桃蔽しい日射しにも負けず

晶子忌に参りとび交う堺弁
平和とは努力草花育てるも
紫陽花にしとしとと降る雨が好き
冷蔵庫ワイングラスを二つ入れ
首都の地下迷いついでのカフェテラス

茨木市 藤井 正雄

ローンには触れず新車を自慢する
栄転の度に遠のく長男坊
障子貼り見てる孫にも吹かす霧
いたずらで困る困ると孫自慢
紙こよりとても上手なばあちゃん子

大阪狭山市 矢野 梓

久し振り逢つて嬉しい声になり
キッチンに豆の香あふれ炊き上がり
愚痴のたね思い出してはむし返し
ぜにかねやないと他人になら言える
物売りの電話いくつも罨がある

河内長野市 井上 喜醉

米寿まで生きるつもりでバスポート
逆らうと強気が燃える星条旗
患者には言えぬ名医のひとりごと
肉体の悪魔退治でドック入り
触れ合いが足りず言葉が行き違い

河内長野市 植村喜代

交野市 山川日出子

遠浅の海で育った堺っ子

なつかしい湊 大浜 散歩道

賑やいだ山の口筋青春期

悪い人増えて淋しくなるばかり

遊び場も子供だけでは遊べない

河内長野市 水谷正子

アナウンサー万景峰と巧く言う

核兵器思い出になる日を祈る

この歳で免許更新内緒です

存在感示すつもりか大あくび

初盆が来ます三つも重い夏

河内長野市 山岡富美子

酌み交わすだけで楽しい好きさひと

パラサイトおまけグッズに凝っている

脱皮する意欲へもがく反抗期

プライドが知らず知らずに作る殻

正直に話して溝が深くなり

交野市 森本弘風

駅舎出る蛙の合唱お出迎え

譲り合い出来た隙間にLサイズ

番傘がしつぱり似合う温泉場

今更に亡き母思う母の日に

娘から自筆の軸の古希祝い

日本保護有事法案皆賛成

空海のいろはうたには深い意味

お隣と換えっこ山と海の幸

イキイキとアトムのマーチ園児たち

ロボットの亀が海底調べてる(空想)

岸和田市 岩佐ダン吉

無色無臭やつぱり頼りない男

反核の稿鉛筆を尖らせる

さわやかな風だ私に職がない

拳固より涙にきつく論される

青かった涙にじんでいた日記

岸和田市 木村正剛

パソコンの世話になるほど惚けてない

微分など覚えなくとも葱買える

定退後無芸大食白昼夢

庭に花極楽浄土つくる妻

もう少し道草食って逝くつもり

岸和田市 原さよ子

家族みな好きです母の煮ころがし

左きき親に貰って子に譲る

皺伸ばすバックに鏡笑ってる

喋るだけ喋りさつぱりしたお顔

値下げ日に活気もどる商店街

堺市宮本かりん

歩くのが目的なのに近回り
痛いところ突かれて笑う以外なし
名案が浮かんで頬がゆるみだし
せせらぎも淀みも越えて水の旅
父の忌が巡り新たな父を知り

堺市神原文

楽しさは梅雨にはつゆの画を描き
口惜しさを治めてくれる上がり花
自画像へ一本すじを通してこ
足が地につく日夢みて竹を踏み
一言がぐさりと刺さりダイエット

堺市和田つづや

人情も埋めて路地のアスファルト
蓼を食う虫に個性を感じてる
ご機嫌な妻の返事はすぐ返る
昨夜からボチの骸を抱いている
またそぞろ鬱になりそうベットロス

堺市齋藤さくら

雨に愚痴晴れても愚痴を言うてます
聞き役の私が涙流してる
突然に訪ねる友は決ってる
この歳になっても母に甘えてる
青空に小さな悩み吸い込まれ

堺市志田千代

後ろにはだあれもないから急ご
お招きにあずかる友の生前葬
三回忌あとは会わないだろう人
一生を踊らぬアホで終りけり
雨の日は二食でもヨウゴザンスネ

堺市村上玄也

外人の前は無口で通しとく
何げない兄の仕草に亡父見る
原作を誇張し過ぎているドラマ
たまちゃんを見守る会と救う会
急いでるのに丁寧なご挨拶

吹田市山本希久子

思いやりだけの夫婦の絆なり
券売機の前で困っている老いよ
シンブルに生きてスリムな四肢である
悩み抱えて雲百態を見えています
花時計咲かせた恋と散った恋

吹田市早川棲世

みな国が悪いのだよと地裁いう
調理場の咳かけたまま料理くる
野球漬けのまま高校を出たけれど
ハウツーセックスばかり文学賞貰し
この国になじみ胃も患わず老い

吹田市 野下之男

高槻市 乙倉武史

空ばかり見上げて美女と雨宿り

桜島西郷^{サウロ}どんで済む国自慢

虎の子もしんは出来ずに筆筒出る

ブッシュには掌で舞う人がいる

済んでから大義名分探してる

吹田市 穴吹尚士

反省とお詫びのテレビもう飽いた

長生きにしびれ切らしている遺産

割り勘で疵を嘗め合うご同役

齒に衣を着せてはあるが眼はきつい

左遷地へ噂が先に赴任する

大東市 児玉蛙

生きていればなるようになる泣きぼくろ

アドリブで楽しく回す夫婦独楽

落ち込んだ背中たたくは影法師

家出した子が面倒を見てくれる

節くれた指を真珠に嫌われる

高石市 浅野房子

パーフェクト何か怪しい気配する

結構なことまだ当てにされている

ウィットとジョークで隠す気の弱さ

歳を忘れ無理をするからたら踏む

店じまい先ず支店から始めるか

老兵が戦記繙く八月忌

禁煙を迫りお酒はお目こぼし

金に目がくらむ汚職が後絶たぬ

印籠を出す頃合いを見計らう

二人だけの秘密は厳守墓場まで

高槻市 江原秀夫

改革の撒き餌に票田汚染する

会議後は石の地蔵が仮面脱ぐ

好きな酒止められ検診が終る

梅雨しとど無聊を癒やす墨をする

天寿とや義母美しい顔で逝く

豊中市 水野黒兔

ライバルの靴音ばかりよく響く

不揃いのリングそれぞれ味がある

靴のひも締めてしゃきつと別の顔

棚田には先祖の汗が落ちている

人生は答えの出ない微積分

豊中市 安藤寿美子

せんでもええことばかりするおばあちゃん

メリハリの利いた台詞は出て来ない

カタカナ語で言わはるさかいわからへん

ボロボロになつても生きてる方がいい

この猫と私とことん敵味方

富田林市 大橋 鐘造

叶うまで祈り続けてる千羽鶴
重い日も軽い日もある僕の靴
心まで映す鏡に怖くなる
優しさも何時か重荷になる月日
想い出の影を背負って一人旅

富田林市 片岡 智恵子

敵のエラーにしてる拍手はわたしの手
ディナーシヨウ何を食べたか無い味覚
身構えて出る真夜中の電話口
腹の虫なだめる酒もよう飲めず
エレベーターの故障で足の老いを知り

富田林市 中井 アキ

すっぴんの私を見せて愛される
横糸はゆるめに恋を編みあげる
横顔を見つめ続ける片恋よ
答えにはならないけれど愛してる
蛇口全開 今日の不運を流し切る

寝屋川市 森 茜

こだわりの山車直角に曲がるなり
多めに恋のレシピへ練る辛子
月見草咲くふる里の川風よ
銀色の雨をつきさる傘百花
ごてごてが苦手気性もファッションも

寝屋川市 江口 度

電車賃はり込む虫見るために
紫陽花もジューン・ブライドもぬれて咲く
満月を見上げ心の傷を縫う
好きなものお食べなさいと見放され
貧しさを見せずローンと歩き出す

寝屋川市 富山 ルイ子

手を強く握り返して意志表示
百を生きるそれは大変なことらしい
身をもつて教えられてる進む老い
ただそばで胸を痛めて見ているだけ
就活へ東京とんぼ返りする

寝屋川市 堀江 光子

とどこおりなく日は暮れて冷やし麦
豪放の人の色紙に夢一字
風評を軽くないすも年の功
秋ひと日また東大寺正倉院
道楽と趣味の違いへ辞書を繰る

寝屋川市 太田 とし子

眠りませ 大きな自然に溶け込んで(母納骨)
初生りの茄子を供えて梅雨に入る
端麗な姿で雨待つ花菖蒲
一坪の庭で泣いたり笑ったり
やがて来る笑って暮そうその日まで

寢屋川市 籠 島 恵 子

真つ二つのキャベツ無実のうすみどり
薄味のままで終つてゆく別れ
くちなしの白さを遠くから見つけ
身を覆うように山ぼうしが開く
夏を前に疲れたように母子草

羽曳野市 三 好 専 平

孫悟空SARS退治はままならず
水田を縄文人が走り抜け
一円を探してレジの下を這い
年金で舞妓の酌は受けられず
叩いたらいやいや開く自動ドア

羽曳野市 徳 山 みつこ

雨しとど汚れ流してくださいな
クーラーはつけず家中開けて夏
体力にあわせ手軽に済ます家事
夏に逢うためにスカッと髪を切る
九条を脳死させてはなりません

羽曳野市 酒 井 一 壺

心まで豊かだろろうかお金持ち
熱さめてバカな自分を思い知る
皮肉にも競う相手に励まされ
逆風に赤いシャツ着て出かけます
丹精に育てた苗は裏切らぬ

羽曳野市 安芸田 泰 子

日除けより老いかくしたい夏帽子
年相応ではうぬほれが満たされぬ
まだ少し生きられそうや畳替え
盆栽に水たつぷりと旅支度
子の姿見られぬ村の蟬時雨

東大阪府 谷 口 義

島を出た男他国の島で生き
座つたら何か食べたくなってくる
古い物なら一通り揃つてる
叱り方悪いと妻に叱られる
夏日傘女の勘はさえている

東大阪府 指 宿 千 枝 子

自慢するでもなし椿咲き終える
志高く舞うタンポポの旅
ティータイム好きな人ならなお楽し
ワンタッチ御飯のたける間に掃除
どこよりも家が一番寛げる

東大阪府 笠 井 欣 子

お茶飲んでいるまにうつがとんで行き
寒もどり炬燵ストーブちゃんちゃんこ
成り行きで決めた父のプレゼント
いやしんば医者からもう赤信号
二人の子嫁がせ家に墓いらぬ

東大阪市 安永 春

角のある言葉まあるく返事する
にやにやとするから見合断わろう
居合わせてまたひと通り小言きく
エリートも錆が回れば粗大ごみ
梅雨入りだへアーカットは大胆に

東大阪市 中岡 妙

歳月がストンと抜ける同級生
過ぎ去って幸せだったなと思う
駆け引きは無しにしようよ雑魚同士
トゲ一つ抜けても心満ち足りず
労わった分だけ軽くなる心

藤井寺市 高田 美代子

一方通行広くもないね御堂筋
繋がれた犬の欠伸を見てしまう
知らんぷりする冷たさも持っている
とんがって暮らすと穴の開くところ
終戦日を忘れたわけでないのだが

枚方市 海老池 洋

志半ばで仰ぐ父の山

こちら雨こちら雨と電話口
自慢話そうかそうかと鼻で聞き
名人の自慢を聞いたことがない
老いばれて選んでしまう弱冷車

枚方市 寺川 弘一

ブレッシャーうまく手なづけ生き上手
団体写真写される時いつも端
きらきらときつと寂しい星なのだ
絶対と言わぬ誠意を信じよう
好きになる理由なんかは無くてよい

枚方市 二宮 山久

散歩するみしらぬ人とする会釈
不景気へちよつといいのがタイガース
定年へ通勤ラッシユふと思う
ああ歳か同じ時間に目がさめる
手弁当持って夫婦のベアシユーズ

枚方市 鈴木 政子

ラジオ言う朝日を浴びればボケません
梅田地下街 二年振りで迷子になり
汗掻いて格闘の百足四寸大
巢に帰る鳥の群に恐怖感
猫撫で声出さず実行の現代っ子

松原市 小池 しげお

蚊に刺されダニに噛まれて育つなり
蹠いたところが馴染みの立飲屋
やかましく賞味期限を言わぬ味噌
慌て者ひとりも居ない救急車
お守りの原価社務所も言いまへん

松原市 國 見 蘭 香

なぜ葉毒もたくさん飲んで
それはそれ合槌打たぬことにする
血圧計目盛を追っている不安
蓮の葉にみごとに乗った露の玉
病院でしゃべって病氣おいてくる

箕面市 出 口 セツ子

誕生日覚えてたことない夫
子がダイヤくれて至福の誕生日
怪我しても独りで耐えている息子
良い親でないから子らが自立する
子離れができずいつでも子を思い

八尾市 宮 西 弥 生

売り込みの電話奥さま留守にする
姉妹くらしのカラーはゆずらない
雨もよし花もまたよし旅燃焼
明日の闇見えない今日を生きる汗
上げ底の器またよし京料理

八尾市 生 嶋 ますみ

紫外線黒い日傘で勝負する
梅雨空にくすまぬようにピンク着て
米寿でも前向きな人声若い
よく聞けば互いに自慢合戦だ
二次会のお湯割すこし喋りすぎ

八尾市 井 尻 民

結婚する寝耳に水の子の電話
踏み込めぬ境界妻の目の奥に
プライドの高き傘寿のうす化粧
丘の上の向日葵僕をまつている
年金の減額通知押しつける

八尾市 山 本 宏 至

梅干がおいしい妻のにぎり飯
6Bもわたくしの我もすぐ消せる
任されて思いのほかの力出し
格好をつけたい時は河内弁
豊かさとは何かがちがう物あまり

八尾市 神 原 まさと

ケアハウス豊かな老後ここにあり
雷鳴に慌てふためく干し布団
仏壇の黒にひまわり良く映える
年金が引越す六十五の妻に
あじさいを倒し雷雨が逃げて行く

八尾市 内 海 幸 生

月下美人の開花を待っているカメラ
オパチャンの顔見直して叱られる
捨て猫の赤ちゃんだから気が揉める
茄子の棘 梅干の種 注意書き
パソコンの苦手は大阪弁らしい

八尾市 高杉千歩

年金の額など答えられますか
絵を描かぬ日は病院を梯子する
腹筋を日課に夏を生きのびる
お留守ですかへハイ冥土とは言わず
配食サービスすっかり高齢者

大阪府 米澤 俣子

好きになる息子の好きなひとだから
親に言われた同じ言葉で子を諭す
変化球で夫の反応確かめる
浮かぬ日は赤い服着て気を入れる
少子化を嗤う枇杷の実子沢山

大阪府 粕山 隆盛

エアコンに先ず六月の風を入れ
最大の誤算に病引き当てる
欲言えばきりなし五体よく動く
しまなみを一気に跨ぐあほらしさ（バスツアー）
幻にしないプランを抱きつづけ

兵庫県 大谷 幸次郎

齒に衣を着せぬ主義なる母がいる
正面の真ん中空けてボスを待つ
真ん中に居て正論が吐きにくい
本命がびったり後に付けている
無心聞く顔がみるみる洩くなる

相生市 中塚 礎石

特攻の命が老いの坂のぼる
一瞬のためらい運は逃げていた
過労死の証拠となった日記帳
ご自慢の武蔵の里を武者修行
一秒のタッチが分けた人生譜

芦屋市 黒田 能子

炊き出しのうどんの味を忘れない
エア・ポケット不意の備えが何もない
この歳で人を見る目の不確かさ
父よりも大きくなった子の背中
ひとしきりシヨパンの曲と雨の午後

尼崎市 長浜 澄子

虹色の夢見た日あり欠け茶碗
意固地だが崩したくないマイルール
ギャラリー出て命の重みなどをふと
秘仏公開 長蛇の列や平和なり
虚しさについて足が向く夫の墓

尼崎市 内田 美也子

とびとびにつけた日記で甦る
背伸びして生きた分だけ身が縮む
乱世の重みに喘ぐ鬼瓦
怖い世へ波紋広げるサーズ菌
一年生孫はみどりの風の中

尼崎市 松下 比ろ志

聞き慣れた音やわらかい古時計
道半ば過ぎて久しい生命線
彼よりは処世下手だがライバルだ
にこにこと一段上から責められる
疲れると時計の音も乾いてる

川西市 西内 朋月

糸切れた若いつもの奴唄
歳のせいにされたくないが丸くなり
よく喋る丸い鼻には油断する
薪くべて客をもてなすログハウス
打水へにつこりされて怒られず

宝塚市 嵯峨根 保子

そら豆の莢のやさしさ母ならん
そら豆を好きだと言えて男らし
銀髪へぎんの雨ふり身をかくす
半分は意地でらつきよの皮を剥く
モンローを好きな男も歳をとり

西宮市 亀岡 哲子

珍らしい犬ねと雑種褒められる
母よりも妻に優しくあれよ子よ
水茄子のむらさき届き初夏となる
兄ちゃんを兄貴と呼んで成人す
植え替えをせずに三年待つてみる

西宮市 山本 義子

桔梗柄の浴衣が似合う母のこと
ヒルガオに想うは遠きひとりき
クズの花 吉野のもえる恋ごころ
カワラナデシコ初恋は胸深くあり
ヤマユリの孤高であるが尊きと

西宮市 門谷 たず子

仏にも鬼にも軽い自動ドア
怒らなくなつた夫の庭簾
風すこし入れてやさしい言葉選る
許さねばわたしじめになるばかり
音一つずらして機嫌よく生きる

姫路市 古川 奮水

色黒で酒臭いけどいい男
公共の広場で喧嘩見たくない
空缶やモラルに欠ける交差点
同情に泣けても心中までしない
フロントが美人で用件忘れかけ

奈良県 渡辺 富子

人恋し天女ふんわり舞い降りる
透ける服女ひらりと夏になる
精一杯背のびしてきたクラス会
サンデー毎日妻が遊べとけしかける
一徹に棚田守つた父の自負

奈良市 米田恭昌

金の要る節目になると胃が痛む

言いたそう言いくそうに子の自慢

古希迎えまだ働かせている資格

追われ追われて煙草税という包囲網

虎連勝その気になつてきたファン

奈良市 天正千梢

傍観者一番二番つけたがり

それぞれに違う物指し持つている

壊れもの両手でしかと持つている

一寸先は光であると思ひ替え

結局は積み重ねには負けている

生駒市 飛永ふりこ

ガンジスと宇宙を包む鼓動なり(秋野不矩展)

生き抜いて聖地に祈り捧げつつ

芙美子像潮の匂いと石畳(尾道にて)

バイキング和食洋食胃が軋み

UVを帽子と傘でシャットアウト

香芝市 大内朝子

つゆらしい雨に羊羹などつまむ

散ることを知らぬあじさい晒される

スカートの下にズボンを履くおしゃれ

自己流に生きてときどき蹴躓く

咲けるうち咲かねば命期限つき

檀原市 居谷真理子

恋のふみ深爪をしたことなども

思い出の中の私は主人公

まばたきがふえて返事が頼りない

人の世は嘆きの青に幸の青

羊水へ海から泳いできた命

檀原市 安土理恵

夢語る目が少年になる六十路

年金で遊び暮らせるはずでした

不器用に続けています非常勤

塩パツパあいつ食う気で噛むセロリ

似合っても似合わなくても夏帽子

和歌山市 桜井千秀

義理堅いつばめに軒を汚される

火傷してからは口出し控え目に

泥かぶるなんて気迫は若いうち

開き直ってみても人生一度きり

金は加害者行き来するにも罪つくり

和歌山市 福本英子

前職が邪魔して仲間入り出来ぬ

ジャズに酔う深夜の友は歳が無い

お洒落してジャズ好きだった亡夫と聞く

昨日より十歩延ばした万歩計

かんかん照りの矢田寺巡り残す悔い

和歌山市 西山 幸

朝が来ていちにちの顔持える
紫陽花の心変わりなたのしもう
ビールの泡の運命論は潔い
偶然の出逢いへ花火炸裂す
いつも私だけを見ている掛時計

和歌山市 木本朱夏

ささくれた心に沁みる夜の歌
一喜一憂 勝負師にはなれぬ
日傘くるくる後姿が亡母に似る
緑風に心の棘を抜きに行く
したたかに縄一筋をなっている

和歌山市 福井桂香

忘れな草摘んでおもいを断ち切ろう
五体満足なのに充たされないところ
霧が出てロンドンらしくなった旅
畏まって候ねこが座っている
紫の花に託している挽歌

和歌山市 古久保和子

缶ビール開けるぐらいいはある余力
悪人も同じサイズの靴を履く
戸籍簿に風来坊と書いてない
デパートの包装紙からお中元
葉脈がくつきり浮いている若さ

和歌山市 田中みね

恐怖とは妻来世も添うという
縁遠い姪案じるも血の絆
元氣ない柳友へ一喝申し上げ
衰えぬこの食欲と夏へ立つ
内部事情べらべら孫の軽い口

和歌山市 榎原公子

じつくりと願い膨らむ雨期に入る
辛抱もここまでプレーカー落ちる
万緑へ街の男は暑苦し
紫の衣の似合う歳なれど
夏祭り紅緒の下駄がぎごちない

和歌山市 武本碧

腕組めば酸欠の街よみがえる
手のひらを開けて掴んだ陽光
ある程度錯覚もあり夫婦独楽
下草と仲良く咲いたこぼれ種
旅人の心を癒やす道の駅

和歌山市 松原寿子

輪切りのレモン少し厚めに夏の恋
過去削るナイフ綺麗に光らせる
傍にいて未来の夢を重ね合う
ビス一本緩めしばらく昼寝する
夏の海あすは舞台を野に移す

和歌山市 細川稚代

和歌山市 松尾和香

七色の金平糖に似たくすり

梅雨晴れ間ふとん干す音たたく音

虫干しへあの日の亡母がよみがえる

一通話疑惑がとけて茶がうまい

発泡酒味方に好きなことを言う

和歌山市 玉置当代

永遠に思い出残る書きなぐり(測田寛一先生逝く)

新緑が萌えて活気が湧いてくる

会者定離 世の儂さよ姉が逝く

悠久の果てまで繋ぐ血の絆

盲腸手術魚の腹を抜くように

和歌山市 青枝鉄治

時計にも同情される待ちぼうけ

無冠だが父の背ながら学ぶもの

チラシから誘いを受けている財布

主流派の波には乗れぬ叩き上げ

セクハラをスキシツプとうまく逃げ

和歌山市 上地登美代

心の底行ったり来たりするざんげ

鬼の首取れば取ったで痛む胸

花柄の日傘合図に初対面

海を見た金魚気絶をしてみましょう

失言を流してくれる無二の友

わからない人生だからよく笑う
命日は夫と飲んでる発泡酒
菖蒲湯に亡夫の笑顔が偲ばれる
フルコース作法に疲れ胃も疲れ
旅の宿 余韻を抱いて眠りつく

海南市 谷口義男

浅漬けの胡瓜で弾む老いの食

笛吹いて見ても振り向く人が無い

同じ失敗繰返すほどボケてない

裏金で正論霞む政治裏

老化だと医者は一言軽く言う

海南市 三宅保州

一分間の焼香あなたとの別れ

まちがいはないのだろうかバーコード

正解はCMのあと申します

リモコンを持っているのは妻である

電信柱に二階の部屋を覗かれる

海南市 堂上泰女

写メールで美女の私と百合送る

母上様愚息と書いて翔んでる子

カサブランカ期待に応え花七つ

初鯉夫のビールちと失敬

歌下手が揃いカラオケ盛り上げる

鳥取市 録 沢 風 花

術後六年CT青い空になる
猫がいて子がいて温い陽が沈む
そら豆も露も頂く初夏の膳
原っぱも空地もなくて味気ない
サザエさん見ると治まる不整脈

鳥取市 徳 田 ひろこ

マイマイもヤゴも暮らせる水たまり
真剣に言っているのに笑われる
即実行してしまう三人官女
トッピングしたそうめんの待ちぼうけ
せいご鱸釣れて一日晴れマーク

鳥取市 田 中 瞳 子

老いの膳彩りを盛る元氣盛る
朝シャンをすると一日チャレンジャー
蜜を吸うチョウチョにジヨロの手を止める
物忘れ開き直って覚えな
手鏡が本音をぼつり老けたねと

鳥取市 中 村 金 祥

相槌を打ってライバル超えられず
毎日のニュース寝つきが悪くなる
スキヤンダル出て有名になつていく
万景峰号ペラペラ喋るはずはない
幾千の罪を背負ってイラク散る

鳥取市 春 木 圭一郎

あるままの私に惚れて生きている
欠点も好きになつたら本物だ
選択は自分自身のためにする
傷つけるひと言だけは言うまいぞ
言い方のひとつでやる気わいてくる

鳥取市 永 原 昌 鼓

プロポーズの言葉冷凍しておこう
ぐち吐いて痛みが消えるなら聴こう
世渡りの秘訣笑顔を持ち歩く
スキヤンダル種は女と金が薛く
古希らしい顔だと鏡主張する

鳥取市 有 沢 せつ子

二歳児の主張道路に座り込む
みずゞの詩音読の子に教えられ
手抜きした食事を子らに喜ばれ
腹八分豆のご飯で守れない
安物の消耗品は捨て易い

鳥取市 福 田 登 美

信じてる薬気になる副作用
忘れる量覚える量の上をいく
引き算の年金杖にして生きる
化粧して時に気取って背を伸ばす
高校の音楽会に若返る

鳥取市 富山 檳榔樹

蟬時雨空が落ちるぞ雨誘う

たんと恥掻き泥を被つて今がある
冷や汗も掻く度ごとに肝すわる
泥んこで跳ねて飛び舞う子を育て
平常心無理なく体引き締まる

鳥取市 夏目 一 粹

ハクビシンもう大丈夫逃げないで
街中が風を孕んで衣がえ

老人に配るティッシュは無いらしい
リストラに辞めてやるぞと叫びたい
空き缶に悔しさ詰めて蹴つとばす

鳥取市 植田 一 京

褒め上手なあなたに笑顔返しとく
建前と違う話は二次会で

幻の愛で女は生きられる
夏帽子ときめきはまだ少しある
どっかりと古里胸に棲んでいる

鳥取市 倉益 一 瑤

告白をしないで虹が消えるから
体臭が転ぶたんびに強くなる

スキヤンダル女三人ティータイム
溺れそうな老母から気合い入れられる
夕焼けに攫われそうな老母の影

鳥取市 岸 本 宏 章

櫛の齒の役割欠けてみて分かる
待つ人がいるから軽い靴になる
信念を曲げぬベンには敵もいる
ライバルに見抜かれていた空元気
遺言を書くには元気ありすぎる

鳥取市 岸 本 孝 子

見舞いには明るい服で元気づけ
ころまで干したいような五月晴
忘れるととても楽になれるのに
それなりに写つて不足りう写真
スマートなときの写真を持ち歩く

倉吉市 野 口 節 子

ソプラノの声が響いて母達者
手紙には優しいことを書いておく
生え抜きが大きな声で闊歩する
私を育ててくれた町自慢
口が滑ったぐらいですまぬベンのミス

倉吉市 松 本 よしえ

蠟燭が一本ふえてパースデー
赤ちゃんの笑顔みんなの宝物
笑われているとも知らず大喇叭
帰宅した喜劇役者はむつつり屋
懸命に生きて雑草嫌われる

倉吉市 森 川 あらた

指切りをしないが約束は守る
靈感が強くて人に避けられる
嫌いではないので喧嘩してしま
う
きれいだよ言わせる努力惜しまない
応援をされると燃えてみたくなる

倉吉市 最 上 和 枝

一呼吸言葉の棘を丸くする
のほほんの母がさげてる地獄耳
なかなかのもんだ油絵修行中
大臣の器用さ舌が二枚ある
攻撃を防ぐ言葉の先回り

米子市 光 井 玲 子

大事にしよう神に命を借りている
しっかりと過去にふたして生きてい
る
一歩引いてやっとここまで辿りつく
率先して父はジंकスを破る
無口だがゆたかな心ありがとう

米子市 政 岡 日 枝 子

軸足が甘く空振りばかりする
空回りしている老いた捻子まわし
受皿が浅く自由に泳げない
まだ親に力があると思わせる
掛け算に切りかえ人生楽しめる

米子市 白 根 ふ み

二三回ぶら下がったままの健康器
気を付けて狭い歩道を歩かねば
本心が言いたくなつた水中花
早起きは蕾が開く音で覚め
これ以上ない三食がおいしくて

米子市 木 村 春 枝

思い出を和紙の表紙が温める
一日を雨に甘えて休息日
無理むりと言われ反骨うずき出す
お互いを覗き合ひしてレジの列
他人様無理しないで言うてくれ

米子市 林 瑞 枝

一期一会の情を交わす駅の椅子
ティファニーの美に圧倒をされ館を出る
求愛の河鹿の歌をきく夜更け
輪ゴムかけ根雪のような手紙たち
巣作りの鴉は人と知恵くらべ

米子市 青 戸 田 鶴

いつの間に老人ばかり風の街
次々と増える葉が気にかかる
横道にそれると花が美しい
無理せずにおだやかな日々送りたい
私にエールをくれる昭和の歌

鳥取県 吉田 孔美子

花壇無視 車庫の計画が進む
テールが沐浴台になった日も
一番湯家族みんなでレポーター
命名の墨乾かない春の家
退いてくらしの音は皆無し

鳥取県 西原 艶子

野薊が凜と咲いてる峠道
稲光走る水無月のふるさと
さりげなく心配りをして師弟
動いても歩いて付く皮下脂肪
三回忌やつと暮しのリズム知る

鳥取県 山本 正光

飯をよく噛んで古い先考える
酒たばこ値上げしなれもう買わぬ
拉致に核 破壊呼ぶかと世界の目
生きたいと考えている脳の皺
台所亡妻の仕草で娘がうごく

鳥取県 前坂 なお美

懸命に生きた証のごつい手だ
動かない証拠テープにとっておく
糠に釘いつも根負けしてしまふ
お節介だとは思ふがほっとけぬ
私の正体実は鬼である

鳥取県 佐伯 やえ

引きざわがおみごとでした ちびた靴
人生のたそがれ故郷にあった椅子
大胆に咲いてきのうは悔いぬバラ
思想など振り向く間なし花簍
色褪せた心の壁を塗りかえる

鳥取県 山下 節子

失敗がヒント ノーベル賞生まれ
ときめきの種火ときどき目を覚ます
言い訳を信じたふりで仲が良い
愛されていると信じていた不覚
人様のスキャンダルです面白い

鳥取県 澤 裕子

花言葉信じてバラが好きになる
負けそうになると頑固になってくる
苦勞した人だ言葉に棘がない
謎かけて本音をさぐるお茶が出る
女ごころ命が果てるまで揺れる

鳥取県 太田 幸枝

母の日に帽子手さげのプレゼント
ぱっくりと逝きたいための野良仕事
足の爪きれいに切って逢いに行く
九十の野辺の送りに鳩が舞う
物干しに家族構成並んでる

鳥取県 鳥羽 玲子

酷使した絵筆なだめるよう洗う
ひとことが少ない性で誤解され
息遣い覗いて寝顔たしかめる
大腸ガン元氣印の人も食う
立て前は物置という家建てる

鳥取県 鳥羽 直市

精いっぱい漕いで余生の旅づく
さわやかな妻の返事に支えられ
喜寿過ぎてなお迷いつつ生きてゆく
幸せだ金婚過ぎたあと余生
この出会いふたり大事にして暮らす

鳥取県 小谷 孝美

心洗うための涙を惜しまない
セールの靴ペラペラでよく稼ぐ
一日をときめくために紅をさす
知事発言 爆弾ためているようだ
ひまわりの忍耐真似てみるつもり

鳥取県 石谷 美恵子

嬉しさはまだ役にたつ糸切り歯
青い空主婦を一日こき使い
写真あれこれ時間を忘れ昼忘れ
巡る季よ忘れることはむずかしい
日記帳今日のペンには鬼がいる

鳥取県 土橋 はるお

いそいそと回覧板がやって来た
カラッポになった頭を洗っとく
大型ダンプに煽られ帽子飛ばされる
君だけと言えば乱れるのは女
女に物を贈った事が棘になる

鳥取県 土橋 睦子

源流を辿れば細い滝に会う
切手買う赤いバイクを待っている
先頭の帽子信じて道迷う
頑固さを陰で支えた妻がいる
男振り悪いがうちの宝もの

鳥取県 岩崎 みさ江

音楽を聴いて歩幅を取り戻す
肩肘を張った背中が淋しそう
病んでみて腰は要とよく解り
沈黙が怖くておしゃべりになった
睨めっこ黙りっこにも負ける

鳥取県 谷口 次男

大臣はザル法作る名人か
だけどなあ年功序列に味もある
政党も政治も嫌いどうなるの
お祈りも銃を取るのも同じ手か
人間よ驕るな我らSARS菌

鳥取県 新家 完 司

徹夜麻雀終えて早朝坐禅会

太陽と月が時間を作っている

青春なんて検便のマッチ箱

鰯が好き鰯の罰なら受けましょう

午後七時 時報に合わせ酒を飲む

岡山県 川 端 柳 子

ひとりで生きる ひとりが好きよ言いきかせ

日めくりに大安という氣をもらう

おねがいは笑いの消えぬうちに出し

うれしい日トコトンざんげしたくなる

勢いで買ったシャネルは眠ってる

倉敷市 井 上 富 子

マドンナの奇声と乗った舟下り

片棒を担いだ肩が軋み出す

につこりと笑顔が受けたプロポーズ

汗臭いシャツに御苦労様と言ひ

文学の小路で逢った美少年

岡山県 山 本 玉 恵

まだ燃える火種を抱いて雨ざんざ

またしても媚薬の箱の蓋に手を

夫婦にもあろうボタンの掛け違い

一瞬に命を燃やす揚げ花火

残り香を含んだ傘と帰路急ぐ

岡山県 国 米 きくゑ

非行少年 心の叫び届かない

相槌は打つが一步も引かぬ肚

野菜料理一番好きな長寿箸

働いて遊んで石も丸くなり

無印になったあなたの丸い肩

岡山県 大石 あすなろ

鈍行でゆっくり過去を走らせる

さりげなく水向けてみる恋心

新しい風に内緒で逢いに行く

流儀など問わぬ番茶で午後三時

策のない時は我慢で乗り越える

竹原市 岩 本 笑 子

心から笑うたは十年一昔

こんな世界があった救急病棟

スキンヘッドびつくり君もお医者さん

夜の深さがひたひた病棟の廊下

新生児命の重さ主張する

竹原市 正 畑 半 寛

まつ黒い子の白い歯が笑い合う

いい汗で飲む一口の水の味

突然に鳴き止む蟬に目が覚める

夕方になると人間らしくなる

満天の星が瞬き合う絆

竹原市 森井 菁居

トラブルを恐れ本音を聞きもらす
僕だつて昔はあつた人見知り
噂ばなしはうつかり信じないように
監獄のごと病棟の夜が更ける
争いの果てみにくさに辿りつく

広島県 藤解 静風

退院の妻へ小猫がまといつく
虎ファンじつと笑いを我慢する
誰からも咎められずに居る喫茶
弱視には段差がづらい真暗がり
言い合いをしても茶碗が二つある

広島県 福島 万年

止まっているようにも見える大時計
白内障癒えて眩しき世間かな
妻の留守ダブルベッドの涼しさよ
ぱっくりのお札参りはむつかしい
養殖の鯛は生活習慣病

宇部市 平田 実男

時価と言う寿司より回る寿司が好き
本番になると酸素が薄くなる
薬にも毒にもなつて頼られる
孫からの手紙肴にワンカップ
長所より短所から出る人間味

美祿市 安平次 弘道

剣玉が出来て逆上りは苦手
凜と咲くバラに未練はなかったか
行脚するたびに奈落が近くなる
書き直すたびに遺産が減つて行き
煩惱があつて主役がとまらぬ

松江市 三島 淞丘

喜は倍に苦は折半にする二人
人という字で枯れ落ちている松葉
万歩計止めて立ち見の草野球
百薬の長で迎えた古希祝う
山門にそつと流れる香の風

松江市 津川 紫晃

胸ボタンひとつはずして若くなる
毒舌を時間をかけて噛みしめる
じいちゃんと寝る約束で買う玩具
わが金を下ろす窓口小さくなり
前略と書いて言いたい事多い

松江市 銭山 昌枝

玄関に表の顔を吊つて置く
姑へ好物供えては詫びる
お隣も後ろ隣も改築中
笹巻きを送つて絆確かめる
夫の留守とことん羽目を外している

出雲市 小白金 房子

心まで染める葉桜 木次町
ちぐはぐな言い訳心見抜かれる
悪商人弱者を狙うおとし穴
蚊一匹うなる深夜の平手打ち
子牛市 毛並も磨き待つあした

出雲市 園山 多賀子

むらさきの雨期が女に長過ぎる
紫陽花かむらさき雫す雨しとど
むらさきを視野に集めて夫は逝く
長寿万歳むらさき色の風薫る
むらさきが孤独を癒す梅雨晴れ間

出雲市 岸 桂子

花に水花は感謝の彩で咲く
善人の面は重いなと思う
植え方を教えてもらい苗を買う
耳打ちをされて味方と思ひ込む
清め塩人の絆は断ちやすい

出雲市 石倉 美佐子

淡淡とああ淡淡と喜寿の坂
うろたえて視線を逸らす星月夜
八月十五日学徒の私蘇る
行く先も見えないほどの雨になる
あつちこつちと寄り道ばかり夏台風

出雲市 竹治 ちかし

幸せは同じ景色に妻と居る
生きている幸が耐えてる熱帯夜
共有の想い出作る二人旅
白神の自然が問うている生命
現世を恋しくさせる恐山

出雲市 吉岡 きみえ

愚痴よそう心臓こととうごいてる
不自由な手にも情熱盛っている
深爪の傷はこっそり治療する
会者定離 花はいつでも潔い
逝ってから庭はいつでもきれいです

出雲市 佐藤 治代

雨の日はポストの口も濡れている
針箱とゆつくり過す雨の午後
テレビ見て泣いているのはお父ちゃん
もりもりの明日にしたい湿布薬
アンケート書いてもらったボールペン

島根県 伊藤 寿美

通販で買う病院に無い薬
触れてこぬ友の気遣い沁みしてくる
ジョギングが一息入れる野の仏
年金スライド自適の水が減るばかり
うっかりと怖い饅頭みんな食べ

唐津市 市丸晴翠

東かがわ市 原 賢

キッチンで果てる夢持つ割烹着
窓開けるピアノ上手になったから
糠床を譲られエプロンの吐息
けりつけに行つて重い荷連れて来る

唐津市 樋口輝夫

通帳に利息三円そつと住み
薬飲むために三度の飯を食べ
竹槍を信じて逃げた父と母
無駄口の中からポロリ出る本音

熊本市 永田俊子

一日善女 鬼を静めて聞く法話
手加減という妙薬を持つ上司
ケイタイとカタカナ日本の色を変え
器用貧乏 多芸多趣味のよろけ独楽

熊本県 高野宵草

合槌の調子孫にもある都合
簡単に料理が出来ているテレビ
熟れ梅の香に焼酎がほしくなる
DMと買わない僕と根くらべ

東かがわ市 清川玲子

人生のゲームやつぱり負けられぬ
赤い糸結ばれそうでまだ他人
休みたい時もあるだろ母つばめ
道草の僕を許してくれた母

お人好しいつも皺寄せばかりくる
片意地な影が転んでばかりいる
過ぎ去った詮索はせぬ日向はこ
生涯を癒してくれたポチが逝く

東かがわ市 伊勢八重子

思い切り話して垣根取り除く
浄水器付けて命の見張番
同病が心許した友となり
過疎に棲み命を延ばす水がある

高知県 赤川菊野

逝つてからしみじみわかる亡夫の愛
若者の心とらえる竜馬像
秀才とも変り者とも他人は言う
大物も雑魚も逝くさき皆おなじ

高知県 北川竹萌

五時に起きテレビ見リズム整える
日々を詠む庭が芸術研究所
餌を持ち六時家出る散歩道
梅雨空を楽しく里へ蒔植えに

松山市 丹下美津子

雨の日も女出掛ける用を溜め
神さまの団扇台風進路変え
何時の間にかトドが寝ているようなママ
三人の子を形見に置いて逝つた姪

松山市 高橋 宏臣

箱詰めになれた古着の愚痴しきり

のら猫のあわれ素早く食べる性

何もしてやれぬ話を聞く無言

大切な手紙真つ直ぐ切手貼る

青森県 小寺 花峯

しがらみを軽く押してる心太

マネキンの水着に流し目を送る

水虫に夜風をあげる下駄の音

未来図に一部編入試みる

弘前市 櫻庭 順風

鍛えても鍛えてもなる高山病

山頂に先着順があるラッシュ

待つほどに衰弱襲いかかり来る

待つことは疲労困憊泣けてくる

弘前市 宮崎 ヒサ子

郭公鳴くいつかもやもや吹き飛んで

山菜が卓の主役に躍り出る

夏物と入れ替えてから曇りがち

不意の客血脈などと言う不穩

弘前市 岡本 花匠

喜を祝い若やぐ父の笑い皺

さりげなくあなたの色に馴染む風

新じゃがの自負風貌が光り出る

志功ねぶた津軽のこころ絵に踊る

弘前市 富士 慕情

花の種蒔いて余生を膨らます

句読点打ってふらりと飲みに出る

予期しないシナリオ昼を奢られる

トイレから慌てて出れば止む電話

十和田市 阿部 進

いい話意外なとこに落し穴

古里の庭の手入れにかりだされ

予告なく貧乏神がやってくる

決めた道迷わず歩む二男坊

佐倉市 岡井 やすお

迷わずに東向いてるイエスマン

土砂降りが済めば炎天水不足

移り住み何処へ行くにも地図に聞き

宿題は終の三日で勝負する

東京都 清原 悦子

満点でないから人が面白い

花よりもダンゴのころが懐かしい

お隣に住んでめったに見ない顔

ブランコでゆっくり自分とり戻す

横浜市 清水 潮華

高校を誘致ざわつく駅ホーム

口数が味方を敵にしてみよう

ビール券小さな感謝へ役立てる

調子よい言葉に乘らぬことにする

横浜市 菊地政勝

震度五に妻の手を取り見つめ合ひ
温度差を認め合つて嫁姑
ひと先ずはなるほどという年の功
食意地のツケが回った血糖値

富山市 島 ひかる

疲労困憊 登った山にある車道
山降りる浮世に一歩ずつ近く
花束を忘れていない誕生日
呼び合っているから動く夫婦独楽

静岡市 安本晃授

美しい隙間をのぞく風の罨
思い出を繋ぐと母の顔になる
故あって目深にかむる夏帽子
底辺で父は世論を斬る野武士

富山市 渥美弧秀

エスカレーター階段となる節電日
故里の銘茶に老妻とティータイム
夜なべしてうどん一杯励み出す
酔った瞳が窓の青葉に洗われる

愛知県 早川盛夫

茶を淹れて夫婦に隠しごとはない
一日を無駄に過したパチンコ屋
風邪ひいた人と同じ部屋にいる
膝小僧長い話は嫌いです

大阪府 澤田和重

欲しいとき男に配らないティッシュ
無一文になっても腹は減ってくる
鼻先にビールの泡をつけて夏
自慢話きかせる酒に招かれる

大阪市 本間満津子

ふり返る山坂よくぞ八十路
よく働いた指に宝石なじまない
たまにはニュース良いこと言うか耳かゆい
百円の店で孫の手買うて来た

大阪市 中村叡子

販売機こんなにお茶が売れるとは
何だ彼だ言つて年金減ってくる
小泉さん他国に行くとき笑顔より
拉致認め今度は核と下道なり

大阪市 津守なぎさ

渋滞をぬうスピードのオートバイ
もつれ合うビキニブルはガラス張り
電動で削る鉛筆よく折れる
無理するなその一言がちから水

大阪市 西川更紗

人恋し赤バス乗って買物に
リハビリの一步一步に拍手あり
遺産なく湿った話もない平和
狭い道互いに譲る思いやり

大阪市 清水 絹子

寡婦同士杖に柱に老姉妹

祥月命日孫の誘いもお断り

年金日たるもたらぬもお陰様

葉桜を見上げ密かにつつじ咲く

大阪市 清水 利武

嬉しさは笑う曾孫を抱く八十路

ミコシギアル女の意地で担ぎ上げ

夢のよな気がしてならぬタイガース

法善寺忘れなはん火の用心

大阪市 奥村 五月

妻肥えて株はだんだんやせ細る

結婚はしても変らぬチン料理

見栄はつて家計に穴を掘りつつけ

古希すぎて春の着替えは遅くなり

大阪市 松尾 柳右子

あの笑顔重い足どり軽くする

庭園に世界が揃う花々よ

曲つてるキュウリうまいと主張する

盛り皿に光添えてるミニトマト

大阪市 小糸 昭子

血圧と株の上下が反比例

ありがたい減塩梅のお茶受けだ

西部劇ドラマのスターも歳を取り

鼻風邪か花粉症かで悩みます

大阪市 小泉 ひさ乃

下町の情け削られビルが建つ

つげの花可憐に女彩で咲く

紫陽花がゆつくり味わう雨の音

輪の中に刺客がひとり紛れ込み

大阪市 安達 はじめ

果てしない夢を求めてすでに老い

晩年は妻とゆつくり歩こうよ

待ったなし時計は逆に回らない

うまいもの急いで食べた味の無さ

大阪市 榎本 舞夢

借りた傘縁結びなり今夫婦

万歩計つけた時だけ良く歩く

落選のダルマ片目で涙する

ダイエツト御馳走見ると食べてます

大阪市 星 野 きらり

葉桜となって毛虫のおらが春

すかんぴん青空見れば覇気戻り

あなたから貰った花が機嫌よく

野良犬が辛い顔してついて来る

大阪市 岩崎 公誠

不純物残した塩の深い味

ぶんぶんと腕ふりまわす妻ボパイ

老骨は首肩腰と弱音吐く

大阪弁とことん値切りまだ買わぬ

大阪市 渡部 さと美

岸和田市 藪野 けい子

ベランダに慣れて青じそネギパセリ
子供等に心配かけぬ親ごころ
いただきもの世帯始まる焼けてより
世の情けしみじみもらい生きなおし

大阪市 中田 あい子

浮気する夫にそうて切れぬ縁
路地の鉢百花りようらん梅雨近く
乱世にビッグニュースのたえ間なく
里帰りして娘畳をそつとなで

池田市 岡本 吉太郎

泡のような人生だったが宇宙は泡
雑音をのがれ海辺の宿に居る
昔の貢めくれば愚かだった日日
研究に明け暮れした日思ひ出す

和泉市 西岡 洛 醉

手さぐりの闇で仏の声を聞く
生活の匂いに主婦の朝が明け
限界はまだまだ七十路坂登る
一喜一憂ファン心理の巨神戦

泉佐野市 山本 蛙 城

セクハラが良識の府にもあったやて
内緒だよ不倫経験ありなんて
シルバースhirt避けるうぬ惚れ持っている
内緒だよジャンボくじつて当ること

またひとつ無駄とわかった衝動買い
あれ以来飲口さっぱり遠のいて
主役を譲っていぶしの芸ひかる
禁煙が手持ち無沙汰でわやになる

岸和田市 井伊 東 吉

夕膳に座を占め出した冷奴
早々と颱風様のお通りだ
SARS禍を神の怒りと受け止める
株分けを早くしろよと蘭の鉢

吹田市 岩屋 美 明

雨降れば雨にブラボークロスビー
激辛のカレーで夏と一騎討ち
光れずに金鶏勲章八月忌
甘くない西瓜お化けの刑に処す

堺市 山本 半 銭

ミシンの音弾んで季節移り行く
青い風自転車磨き逢いに行く
チャンスとは神様からの贈物
馬齢重ね丸くもなれずほうけてる

堺市 矢倉 五 月

バーゲンで買った値段をふれ回り
ご自慢のあご髭孫は逃げ回る
我が友を別人にする舞扇
言い過ぎと言いい足りないが向かい合う

堺市 源田 八千代

有事法 小泉人氣褪せぬ間に

今更のように驚く低金利

年金もスライド制で下げられる

ニュータウンと旧市の境暗い道

堺市 西村 りつえ

鬢切れば仁王もやさしパパの顔

ミスに寡婦負けず翔んでるクラス会

がく紫陽花私も同じ隙だらけ

とほけつつ父はしっかりと意地通し

四条畷市 吉岡 修

余生への胸算用を潰される

写真集目の毒という目の保養

経写す一字三札する気もち

結局はスローライフの妻の勝ち

吹田市 太田 昭

グーチョコキパー我が人生もこんなもの

最低の暮らし今から慣れておく

地球の怒りテトラポットに宥められ

過不足のないつき合いに飽きたらず

吹田市 大谷 篤子

丸い輪の中にいるのに人嫌い

ほめ言葉ひとつで孫は前をむく

錯覚の恋の終りに夏が来る

強がりを言わぬと涙零れそう

大東市 南 原 正 和

辛いとき棚の聖書をじつと見る

夜半過ぎコンビニに寄り構えられ

競わずに唯米を研ぐ妻の日々

天下取る醍醐味のする魚釣り

高槻市 井上 照子

曲がる苗今が支柱のいるところ

厳しさを愛と覚えた父の額

古日記きのうの如く夫がいる

祈禱した箸に重ねるわが願い

高槻市 左右田 泰雄

ケイタイで風のうわさを確かめる

自分にも読めぬ慌てて書いたメモ

着信音だけの留守電何でだろ

衆望を担う温和な人となり

高槻市 傍島 克治

いい恰好せずにハードル下げなさい

無為徒食賞もなければ罰もなし

初免許家族一同乗車拒否

夫々が家伝の知恵で治す風邪

豊中市 樫谷 郁子

四国山脈ひとまたぎしていざ故郷

眼下には太平洋の波うねる

只今と土佐はよいとこ南風

人間も国宝となる幸おもう

豊中市 吉田 あずき

みどり色の風が欲しくて面を脱ぐ

結び目が緩み心が広くなる

一つずつ頷いてゆく母の道

老いの日々油断召さるなこの世相

豊中市 山門 タミ

要領の悪い蔓から間引かれて

窓閉めて音を大きく見るテレビ

鳴き方が違う鳥来た　とうさんだ

金髪が普通になった日本人

豊中市 岸田 知香子

色気なし食気満載グルメ旅

同い年顔見て勝ったしわのかず

快復の景気期待のトラ旋風

柳壇で見たよと柳友の声掛る

富田林市 中崎 深雪

雄叫びあげ戦の世には戻すまじ

手作りのお菓子一味違います

おおらかになれと教える青い空

さくらんぼ花見の宴はついきのう

寝屋川市 坂上 高栄

猫でさえ一線許さぬ自尊心

仕舞い風呂ゆつくり明日の策を練る

方便の嘘なら仏許すだろ

仲人口信じた今日の金婚日

寝屋川市 平松 かすみ

方言でお喋りしたい父母の墓

セールスにことわり方を教えられ

淋しいなネギ一本ですむ家族

心配の種が弾けた車間距離

寝屋川市 酒井 勇太朗

三隣亡　内緒の旅で事故にあう

大量破壊兵器よ早く出てこいよ

内緒メール鬼が覗いていた不覚

内緒ごと心で妻に詫びながら

羽曳野市 吉川 寿美

母の日は姑でもありぬ蘭届く

輝いて過ごせる日々よ趣味多忙

また一つ星が生れる縁つづき

秒針が叔母の命を刻むなり(最愛の叔母の死)

東大阪市 北村 賢子

軽率な診断重い医療ミス

ピント外れの答え悲しい母の老い

生活に追われた頃は若かった

公園に生きるヒントがきつとある

枚方市 森本 節子

木の芽植え朝な夕なに揚羽蝶

思ひ出の皿と訣別粗大ゴミ

香港へいつ帰れるかひ孫達(二時帰国)

赤い旗こわいお船は入港せず

枚方市 安達忠央

ごゆっくりあいさつなのに長居され

肝心な話は黙る処世術

親友が逝きてゆっくり受話器置く

タイガース六月からがスリルあり

枚方市 宮川珠笑

禁酒禁煙と節食強いられる

短命の易に逆らい古稀祝う

かかる世に年金遅れず振り込まれ

介護するよりはと妻の無理を聞く

藤井寺市 中島志洋

気配りのお絞り嬉し玉の汗

風鈴も歌を忘れた熱帯夜

溜息をついて破った宝くじ

七転び懲りず明日へ架ける虹

藤井寺市 太田扶美代

土壇場に立って男はただ無口

悲しみの果てにお酒の世話になり

やってみる事が元気の秘訣です

厄介な坂がふたりの前にある

藤井寺市 楠昭子

友だちが出来たか弾むうちの猫

中古車を買って追われる修理代

気の利かぬ夫婦で暮れる二十四時

珈琲のおいしい店で雨やどり

守口市 井上桂作

お辞儀した相手の名前ふと忘れ

成果主義年功序列過去のこと

フリーター好きでやってる訳でなし

企みがあるのか鳥じつと待ち

八尾市 宮崎シマ子

塩の効いた男の話信じよう

花日記虫の数まで母は書き

一気飲み若者酒の味知らず

あちら様が良すぎ縁談遠慮する

八尾市 長谷川春蘭

筥に米糠添えて母が来る

セルと言う語のすたれ行く更衣

本箱に別れた友に借りた本

明日の運吉と信じて回す独楽

八尾市 吉村一風

油断した心すっかり覗かれる

淋しいこと言うなど友の酒元氣

旅三日わが家の椅子が恋しなる

どこでどう話変った孫自慢

八尾市 村上ミツ子

年金を減額するという通知

友からのうまい新茶に鬱も晴れ

いつまでも大事にしたい娘の笑顔

戸をたたくお客はきつと風だろう(娘のことは)

尼崎市 春城 武庫坊

紫陽花が濡れて器量を引き立てる

公園出口探す首輪をつけぬ犬

妻が転んで僕の足まで鈍くなる

妻と山登れた頃が華だった

尼崎市 春城 年代

弟の古い写真のよしなしごと

胸やけが続いて五月の不安だらけ

いい歳をして死者の行く道まだ知らん

園児の列に初蝶怖いものはなし

尼崎市 田辺 鹿太

喜んでよいのか妻も古希となり

病床へ旅の誘いが山と来る

大袈裟に泣いて遺族を慰める

愉しみにしている君と別れる日

尼崎市 山田 耕治

分譲の幟の下で土筆摘む

死ねばすぐ捨てられるものためている

朝十時まだノーアウトなる気持

なにゆえに無塩食なる罰を受け

尼崎市 軸丸 勝巳

武蔵の里踏んでドラマに興味湧き

名僧のたけぞうお通秘話説法

武蔵の里やはり土産は吉備団子

婆ちゃんの統計学にある名医

尼崎市 林 昭三

日照権あまり問われぬ北の窓

幼子の友情折鶴これあげる

芽が出て何が咲くのか水をやる

四番打者軽い素振りの太い尻

伊丹市 山崎 君子

七夕のよう彼に逢つて同窓会

巣づくりセツセ松はカラスに泣かされる

心ばかりいい言葉だなのし袋

入梅に紫つややかあじさい忌

伊丹市 小熊 江美

夢で逢う亡夫は今も若いまま

宴会になると俄かに人気者

かきつばた露を宿して艶を増す

決めかねて恨みっこ無しのジャンケンポン

川西市 米原 雪子

何気なく受けた友情想う日々

山懐 箕面吟行走り梅雨

新緑に案内の声響かせて

終るまでつい見てしまふ好ゲーム

神戸市 池田 善守

思いとは別の行動する手足

ひとときの逃避忘却湯の宿へ

七十になつても電車一番前

台風がきてベランダもリニユール

神戸市 山口 美穂

残照の移ろい眺め露天風呂(老神温泉 3句)

山菜の香りもうれし山の宿

朝市で人のぬくもり買うてくる

水芭蕉尾瀬は初夏です人の列(尾瀬)

神戸市 木村 貴代子

カタカナ語分らぬ僕は日本人

貧富の差呑みこみ泳げ鯉のほり

登校拒否友は一人もいないとか

ゴーヤの種みんな顔出す梅雨の入り

三田市 北野 哲男

自分史は不都合な人斬り捨てる

らしくない年寄りになる努力中

私なら別れてるワと父母へ

ブラジャーを外して飲んだ大ジョッキ

三田市 久保田 千代

自惚れを返してそっけない鏡

自信喪失 鏡覗いた朝の顔

花束がだぶって母の嬉しい日

達筆が並び気後れする署名

西宮市 秋元 てる

半年は激動年とか八十四

晴れた日は小犬も老母も出たがって

真剣な顔初めての全自動

完璧を捨ててのどかな傘寿過ぎ

西宮市 坪井 孝一

風船で親も子もない甲子園

日本地図単身赴任の街恨む

ラッシュアワー今も割り込み出来るかな

ふたりの地図矢印いつも妻が書く

西宮市 刈田 泰司

丸顔で茶髪は合わぬやめておく

丸い背でまだまだ角の立つ話

友だちの七癖もよし春の酒

涙枯れ恩師を送る五山の火

西宮市 菊池 トミエ

奈良街道辻に立つてる道しるべ

ささやかな暮しの中にある笑顔

若葉萌えくすぶる命甦る

新茶摘むみどりの風も香りくる

西宮市 長谷川 淳

大物は閻魔様にも袖の下

凝りすぎたケーキどこから食べようか

観るだけの家庭菜園作ってる

母はまだ私の脈に生きている

西宮市 牧 渕 富喜子

句集読む少し眠たくなってきた

手をかけた花の中から虫の弾

見て見ない振りの出来ないメガネ置く

また一枚夏衣を買っている情性

西宮市 緒方 美津子

五十肩素通りしたなありがとう
土砂降りも満足そうに濃紫陽花
長梅雨と手を組んでいる乾燥機
山の宿ここでも出会うエビフライ

西宮市 井上 松煙

さりげなく自慢話のできる仲
ほめ言葉考えながら孫を待ち
雨宿りたこ焼きの列長くなり
正座する足に読経の長すぎる

大和郡山市 坊農 柳 弘

天神さん男勝りのギャルみこし
リストラで中元来ない贈らない
夕立をシャワー代りにテント村
甘い水追って蛭は行つたきり

和歌山県 中後 清史

窓のない部屋で九条書き替える
ロボットに人間の腑を奪われる
戦争の行き着く先に核がある
ダムが揺れてる展望の読み違い

和歌山市 吉村 さち子

健康にいいと言う事多すぎる
物のない頃と比べる癖がある
金づるは大事に招く栈敷席
糠床へわたくしだけのオリジナル

和歌山市 山口 三千子

カーナビに誘導されて道の駅
物差しより長い巻き尺持ち替える
馬耳東風これも一つの処世術
不況風吹きとばしそうタイガース

和歌山市 宮本 三喜夫

台風も雨のおみやげ持つてくる
寺参り満願できてありがたい
隠してる話が出来ぬこともある
仲良くねいがみ合うこともうやめな

鳥取県 下田 茂登子

正直な顔で悪口言うおとこ
信じてた嫁の返事に泣かされる
葬儀あり過疎もひと時にぎやか
不仲でも風邪は一緒にひく夫婦

鳥取県 石尾 かつ乃

ランドセル一年生の陽の匂い
気まぐれに旅人になる風になる
雨の日はゆっくり好きな絵筆持つ
やがて梅雨庭のあじさい咲き揃う

鳥取県 蔵本 悦子

右の手に夢左には情けです
明日より精一杯に今日を生き
自分にはやっぱり甘いなと思う
あつちから元気にさせる陽が昇り

鳥取県 奥谷彩子

いい人に出会いたいと思いたまた増える
妻も海も静か牙むくと恐い
喜怒哀楽パンドラの箱につめ込んで
姿ない菌に地球も萎縮する

鳥取県 西川和子

大声を出してモヤモヤ追い払い
関節にグリスを差して見たくなり
思ひ出を作るいそいそ旅仕度
海の風ころころ逃げる夏帽子

鳥取県 林露杖

田植済み敬老会の招き来る
みどりから藍に紫陽花梅雨に入る
ハイチーズ笑顔が泣いているようだ
腎孟炎如きに氣力引き抜かれ

鳥取県 上田俊路

新しいワープロ届く父の日に
家族から長生きせよの思い遣り
朝夕の散歩初老の顔ばかり
記憶力多少欠けても生き残る

鳥取県 埴寛子

ケイタイでささやき交わす群の中
あじさいの大輪支えきれぬまま
だけれども歳のせいにはしたくない
生垣もオヤジも子らも嫁が刈る

鳥取県 平尾菜美

前線に気配りをして雨遭わず
朝ぼらけ拜んで出会ういい日和
親しすぎ挨拶欠ける時もあり
石を割る草に脱帽する命

鳥取県 原みさを

父の戦記に八月の風入れる
石に漱ぐそれも所詮は総入歯
かつがれた奥でびんぼうゆすりする
橋わたる古稀の揺らぎに身をまかせ

鳥取県 乾喜与志

天高くあたま空つば好い日和
喉いっぱい声一杯を張り上げて
七転び八起きの額の笑い顔
すでに秋 日本海の浪うたう

鳥取県 小谷はるみ

健康でないと何にも始まらぬ
ひとつふたつ痛みは誰も抱いている
初恋の痛み噴き出すあざみ咲く
リストラが私の尻尾つかみそう

鳥取県 近藤春恵

古稀すぎて女まだまだ捨てません
ネオン街行けばネクタイゆるみだす
ネオン街横目に我が家へと急ぐ
再検査ガンでなかってありがたい

鳥取県 平井 栄 翁

また来いと背なへ浴びせる温い声
すぐ人を信ずる人は仏様
白鳥が来て池らしくしてくれる
橋が出来島が遊びの場所になる

鳥取県 田村 きみ子

煮くずれのじゃがいも少し可哀相
返しそびれた傘がオヤオヤ三本も
から元気だけは出そうな夕茜
言いわけやめよう すぐに転ぶから

鳥取市 福永 ひかり

アッシーの延長戦にある夫婦
友達で死で死がグツと近くなる
安い気になって手が出るイチキユッパ
気だけではカバーできない転び癖

鳥取市 宮脇 道子

通販で心の隙間埋めている
夏が来て孫の背丈に追い抜かれ
下げないで年金だけが頼りです
ゴミの日を忘れないよう遊んでる

鳥取市 福島 庸二

耳うちのつもりの声が大きすぎ
カラオケのないスナックで安堵する
経験の豊かさ知った洪い味
被写体に撮らせてもらう思い入れ

鳥取市 加藤 茶人

城崎で詩人に出合う湯に打たれ
恩恵のデフレハンバーガーを食う
夢にまで出て来て亡父から小言
まげつけた人が居そうな門構え

鳥取市 山本 益子

極楽の時計を止めて遊びたい
金貯めて永久の旅路は豪華版
時世がら駆込み寺はよく流行る
老婆心時には怖い目と出遭う

鳥取市 杉本 孝男

恥と汗かいて終点湯が溢れ
風つかむチャンスは今だ飛び立とう
鬼あざみそう簡単に握手せぬ
信ずれば神様さつと無理も聴く

鳥取市 前田 一枝

ひざまくらした脛小僧医者通い
ありがたい玄関に灯がついている
草笛を吹けばトンボも宙返り
石仏も夕立ちあびて小ざつぱり

鳥取市 西村 黙光

幸せは無心に孫とシャボン玉
童謡にからかわれてる記憶力
幼稚園に入りなさいと孫笑う
ご機嫌がいいと鼓膜が破れそう

倉吉市 山本玲子

美意識の牡丹はだらしく散った

新築の家と玄米茶の香り

低い背は帽子と靴で高くする

必見のメモは朱書きが目印だ

倉吉市 淡路 ゆり子

自由になれた犬の首輪が落ちている

訣れかな切手斜めに貼ってある

大臣も情けに脆い人の子よ

絵手紙に切手忘れたおじいちゃん

倉吉市 猪川 由美子

喜びは喜び過ぎずしまつとく

頑張り過ぎ一人相撲で血が濁り

プライドをくすぐりながら事頼む

嫉妬封じに弱味チョコチョコ散りばめる

倉吉市 牧野 芳光

目の前を過ぎる象には手を触れぬ

これまでの人生楷書だなどと思う

信頼をされて荷物がおろせない

美化をしすぎた私に罪がある

倉吉市 山中 康子

半生記忘れぬうちにラップする

感動を与えるペンは飾らない

逆流が辛いしゃがめぬ膝だから

冷蔵庫さっぱり空にしてみた

倉吉市 米田 幸子

助け船出す潮時を待っている

誘惑に負けてしまったつまみ食い

三つ指をついて迎えたこともある

裏町に人魚の泳ぐ沼がある

米子市 澤田 千春

窓ぎわの棚に気儘なベレー帽

スランプをぬけて大気さわやかさ

迷ったら一眠りして原点に

失敗が今では生きる力石

米子市 野坂 なみ

エベレストに古稀の日の丸きらめかす

航空祭を彩るブルーインパルス

絆もつれて思いのままに泳げない

終の峠みんな無理して越えてゆく

米子市 本吉 宗光

九条を憲法削除自公民

強装備世界相手ぞ自衛隊

年金で新聞四紙贅沢か

ハイビジョンテレビこの先どう変わる

米子市 永井 三津子

夫看取り少し遊んでから逝くわ

抱き枕夫逝ってから手離せぬ

振り向けばもうこんな歳嘘みたい

老いるほど口の達者な義母になる

米子市 木村 富美子

新緑に誘われ動き出す手足
待ちわびた春だいつばいイオン吸う
電話口以心伝心待った声
耕して耕して今休耕田

米子市 門 脇 晶 子

縄のれん疲れた足を誘いこむ
甘い話を蟻が仲間にアプローチ
国籍もわからず食べた膳の蟹
血糖値知りつつケーキ買っている

島根県 森 茂 美

合併の思案は下で指を折り
握手したあれが最後の温みとは
試着室につこり笑う妻の夢
紫陽花の可憐なつぼみ見ている朝

島根県 多々納 テル子

穏やかなローソクの灯に手を合わす
濃淡の森が広がる雨あがり
赤飯で盛り上げているうれしい日
老い二人茶碗をかえてリフレッシュ

出雲市 岡 あきら

横波に脆い舟だが沈まない
箍ゆるむ泰山木は凜と咲く
丹精の初成りそつとご仏前
星ほども石を並べた友は星

出雲市 伊藤 玲子

喝采を浴びた余韻がまだつづく
姑さんの臍楽しい風を生む
長道中気取らず馴れた靴とゆく
働いた汗が心を風にする

出雲市 城 多喜

お手紙に夢を零して差し上げる
終の椅子座り心地のいいように
神様の気まぐれ好きにおつき合い
大ジョッキ娘男の顔でのむ

出雲市 久谷 まこと

言い返す言葉いくつも持っている
立ち話そつぽ向いてる影法師
田舎道一つ間違え元の道
繕って辻褃合わせいま様に

出雲市 青山 久子

お陽様に力いたたく影法師
夜の窓守宮が話聞きに来る
初帰省大きくなった力瘤
赤ちゃんも力いっぱい泣いている

出雲市 富田 蘭水

ずつしりと二千万円札やはり
消されない煩惱もよし飯がうまい
ラッキョウの佃をみてそつと口ごもり
青虫が蝶々となる写真とる

出雲市 小玉満江

かがり火へ虫は嬉しく寄ってくる
さざ波や地形を変えた大社湾
めんどろな候文を読む夜更け
タンポポの綿毛私の胸にすむ

松江市 佐野木 みえ

妙心寺 大法要の席にいる
道成寺悲恋の話しみじみと
高野杉買って我が家に植えておく
高野山 川柳塔の碑を探した

松江市 安食 友子

いぶかしい影を慕っている夢想
伏し目して女の風情見せましよう
振り上げてみたい拳もおこりよ
これはこれは曾孫抱かせて貰います

松江市 小川 注湖

良い実り良い種選ぶ知恵にあり
職がないので大学院に入る
若夫婦なるほど羨無い子供
孟宗竹それぞれに気を放し立つ

松江市 川本 畔

過去からの匂いが消えぬ葱坊主
カラオケを野放しにする旅の宿
気がつけば私のことだけを祈り
雑草は働き者で風邪ひかぬ

岡山県 小林 妻子

忘れたのと思い出せないのとふたり
聞えてはいない話が逆戻り
雨降りと病氣以外は都合つく
茄子も胡瓜も嘘は言わない母寡黙

岡山県 福原 悦子

今日も無事薬飲むのも日課です
歳月の流れが顔に刻まれる
愛一途 病夫に嘘をつき通す
ふる里の心の奥にある蜜

岡山市 井上 柳五郎

人生のおまけを生きるこの余生
八十路坂まだ知識求める欲残り
皮下注射するたびお尻どちら聞く
あちこちにポイ捨てモラル散乱す

竹原市 時 広 一路

足跡は白と黒しか無い力士
蝶や蜂遊ばせ花は満ち足りる
元気です薬のお陰とは言わぬ
簡単に済ませたい日のホッチキス

竹原市 古谷 節夫

原風景残してくれぬ道路で
平成の歌は両耳とおり抜け
人生の余白は趣味で少し埋め
良心を売って戦争ばかりする

第75回奈良県川柳大会

日 時 9月28日(日)
開場11時・13時開会
会 場 吉野山国際観光旅館「さこや」
TEL 07463-2-5155 (代)
会 費 2500円 (昼食付)
お 話 若林 円教師
宿 題 「月」 阪本 高士選
「ヒロイン」 久田年須美選
「効く」 大内 朝子選
「山 伏」 鶴本むねお選
「川」 大楠 紀子選
「祭」 土田 欣之選
「無」 福田 秋雄選
席題なし 各題2句
出句締切12時30分
欠席投句 9月13日締切 1000円
投句先 〒638-0045
奈良県吉野郡下市町都町
今井一竿宛 TEL 0747-52-4751
懇親宴 3000円 宿泊歓迎
出席申込・問い合わせ
07463-6-6763 古川

一本の傘にこだわる夏は来ぬ
今日こそはカープと思うのも一瞬
勝って泣く熱さに飢えているファン
試験日の近い夜食で眠くなる

食堂のかみさん太めよく似合う
この女の眼もまがいもの付け睫
掌に包む蜜なにかが甦る
どうみても明日死ぬ人に見えなんだ
竹原市 三宅 不朽
広島市 森田 文

核心をつく六歳にどう答え
地図を観る想い空から北海道
摩周湖の霧に傷心癒される
受けとめる大きな袋を母は持つ
竹原市 石原 淑子

第15回兵庫のまつり・ふれあいの祭典

日 時 11月30日(月)10:30~16:30 開会12:00
会 場 宝塚ソリオホール (☎0797-81-8200)
題と選者 (各題1句、5名共選)
「アニメ」小松原爽介・村上水筆・浅瀬美智子
恩塚治子・大熊純三
「花」泉比呂史・平山繁夫・赤井花城
西口いわゑ・長縄嘉代子
「寺」卜部晴美・福島直球・前川千鶴子
渡邊 淳・中塚礎石
応募料 1000円 (郵便小為替) 締切9月5日(金)
応募方法 所定用紙、原稿用紙の右半分に
作品、左半分に郵便番号・住所・氏名・
性別・電話番号、大会出欠記入
応募先 〒665-8665 宝塚市東洋町1-1
宝塚市市民生活部 国際文化課内 川柳
祭宝塚市実行委員会
TEL 0797-77-2009 FAX 0797-77-2085
(ジュニアの部) 原則として県内の中・高生無料、
締切9月5日
題と選者「夢」田中節子・北村紅絵・奥田みつ子
応募方法 1人2句以内、所定用紙、学校を通じて
応募・11月30日の大会要項は後日誌上に掲載

神戸川柳大会事前応募 作品募集

課 題 「遊ぶ」1句
未発表句に限る、重複投句不可
応募要領 便箋一枚に作品1句
住所・氏名(雅号)・電話番号
応募料 1000円 (定額小為替)
締 切 9月10日 (当日消印有効)
投句先 〒655-0038
神戸市垂水区星陵台7-12-14
佐藤寿美子宛
選 者 神戸川柳協会理事 21名 共選
選 考 平拔2点 佳作2点 秀句4点とし
全選者の入選句の総合点上位から
入賞とする(同点の場合は受付順)
賞・表彰 特選1 準特選2 佳作7
11月23日開催の第26回 神戸
川柳大会当日発表、表彰
主 催 神戸川柳協会

自選集

橋 高 薫 風

螢は点し蟬声立てよ敗戦忌
日本酒洋酒いずれなりとも路郎の忌
巫女清し目よりも上で鈴を振る
オールドパーと佐藤錦の十五粒
ドン・キホーテ今年も靖国へ参る

田 口 虹 汀

台風が追い打ちかける不景気に
長生きをする嫌な目にも遭う
眼頭が熱くなるよな事もあり
欠航便もあるから僕は慌てない
仏舍利というから僕は慌てない

竹 内 紫 鋤

トレッドミル中止 葉はどつさり
ヘリコプターで締めくくりたい万歩歴
暗証番号もじる家族の誕生日
遠ざかる機影の中に粒の孫
落書きごと撮り塗り隠す写真版

田 中 正 坊

初体験カメラするする胃の中へ
病変を探検に行く内視鏡
診断が白と出た日の吟醸酒
八十路坂 一段上るバースデー
ひとまずは七年とするカレンダー

玉 置 重 人

立ち食いのうどんに羊せかされる
我武者羅にアクセル踏んでいた昔
大自然ヒト科の罪を知っている
ガード下 寄り道したくなる煙
ハナハトの時代に生きた黒電話

恒 松 町 紅

笑わせることなら出来る披露宴
続かない根気八十路の作業シャツ
跡継がぬ話 畑でふとよぎり
善悪は鏡を見てもわからない
日記書くたまには隅へ体調も

遠 山 可 住

いざという時の隣がうるさくて
役どころ世間はちゃんと見てなはり
やがていびき聞えるまでの掌を握り
貧乏神チャンスが来ると顔を出す
宝くじこっそり買っている謀叛

土橋 螢

慰めのことはと水が欲しくなり
ホッホウ螢 蠅の子がまたうまれ
親鸞と古い時計のめぐり逢い
一善をはじめ八時十五分
行きあたりばったり草にむす屍

西田 柳宏子

今日あたり誰か来そうな見舞客
テレビ室沸く阪神のサヨナラ打
ご機嫌で夕食旨し風呂上がり
退院の目途ついてくる肌の艶
入院のベッドテレビの旅続け

西村 早苗

ただいまと声がまっすぐ冷蔵庫
雑魚に夢画いて子らの覗く川
笹巻の包みをほどく里を恋う
明日という夢をうるおす宵の雨
梅雨冷えの駅ただに冷え発車ベル

仁部 四郎

当局に転進という二枚舌
よかったねヘイタイスメ習わずに
前進とがなりたてたい人もいる
ブッシュ氏の進軍世界うろたえる
戦争の技術ダントツに進化

野村 太茂津

人間探究うたかたの旅ファジー
ワンマンの努力を誰も気付かない
孫成良 八百長効かぬ指角力
落とすなら落とせ私は綱渡る
黒衣着た女やつぱり化粧する

波多野 五楽庵

森に住む亡母の愛した指ぎつね
特急が止まらぬ駅の症候群
薪能 友の裏切り赦さねば
失樂園読んだ一人の立ちくらみ
しがらみの解けては結ぶ浮世かな

藤井 明朗

余生は川柳人生の泣き笑い
真つ直ぐに歩いた一日無事感謝
慎重さを欠いた今にして反省
みどり探訪ひとり気楽な旅を行く
一筋の笑い人情の味の句を追う

藤村 女

夕顔の灰かさといふ老いひとり
ふる里の空気に出合う赤とんぼ
わらべ唄 手帳に残る赤とんぼ
曇る日も照る日もあつて卒寿無事
淋しさが合掌の手にまたむせぶ

芳 地 狸 村

5句

指先の技あざやかな篆刻屋（北京）
京劇の華麗な舞台に酔っている
裏町のくらしに昔の顔がある
街並みに犬の匂いのない不思議
面目を変えたトイレが美しい

宮 口 笛 生

酒に勝つ肝臓持つてうまい酒
トイレ付きバスで安心飲むツアー
魚 魚 鳥羽一泊の旅に居る
腹の中でまだ動いてる活きづくり
海鮮市場安くないのにみんな買い

森 下 愛 論

芝草に孤独タンポポひとつ咲き
春の彩閉じた瞳に香を焚く
汚染する空気に春の花を待ち
様々な事に手を染め忙しがる
恵まれた暮らし包丁よく光る

八 木 千 代

何でもない拍手に首の骨が鳴る
仏壇にはらり零れた花の首
柔らかい首で来しかた振り返る
蕾抱く首は未来にむけている
古木なお首しゃつきりと意識せよ

八十田 洞 庵

セザンヌの美女ははにかみ見せてない
リストラに残るロボット錆びてくる
私小説まっとうらしい嘘綴る
湯上りの素肌女を取り戻す
人間様 進歩は無いね塩輪の目

両 川 洋 々

夢の樹を植えてお別れしましょうか
おんな対おんなどちらもやる気だぞ
裏切りへ心の氷雨降り止まぬ
おいし過ぎる話だきつと毘だらう
エリート末路に仮面捨ててある

阿 萬 萬 的

通ぶつてべらべら喋り掘る墓穴
そのうちに何とかなるだらけの雨
つい弱気三歩さがって妥協する
図書館の窓で孤独な目を休め
二世帯同居互いに気兼ねする暮し

石 川 侃 流 洞

縁は異なもの神のゲームに違いない
鬼門にも増築しがない街に住み
棚からのボタ餅貧乏神は持っていず
安眠妨害蚊一匹だから憎らしい
年金減額 禁酒禁煙いい機会

板尾 岳人

母に会う夢を見ていた影法師
八月だよく降る雨だ愛すべし
雨の降る街で見つけた母の下駄
雨やどり相合傘が濡れて夏
母の下駄買いいに行かねば急がねば

奥田 みつ子

母の日にモナリザという百合の鉢
よく笑う手鏡ひとつ懐に
ただ歩く黙って歩く長い影
快進撃 タイガース見ている遺影
三回忌幸せくれたのはアナタ

河井 庸佑

窮すれば通じ妙案ふと浮かぶ
岐路に立ちまだ思案する右左
過ちを広い心に許される
一歩退く心が欲しい丸木橋
先読んでここは流れに逆らわず

川島 諷云児

げんこつは握っただけにしておこう
貧乏神 余程我が家が好らしい
歳かなと思うことあり物忘れ
片意地を張って磔に身構える
上に上まだその上がある世間

木村 あきら

家業継ぐ嫁が峠を越えてくる
だまされた最低ですと仲がよい
汗をした顔に夕陽が美しい
鐘を撞く老僧の背も丸うなり
揚羽蝶 過去の姿は口にせず

工藤 吟笑

川普請 螢も棲まぬ川にする
運勢は努力次第という手相
千年の齢を保つ古代蓮
眠りから覚めた埴輪にある笑顔
サボテンが信じられない花をつけ

黒川 紫香

鍵束を鳴らして歩く癖がある
長家中どこの家でも隙だらけ
坂道の家下手くそなピアノ鳴る
ゴミ出してしばし鳥とにらめっこ
職退いてからの毎日忙しない

小西 雄々

五代目ののれん厳しい風に揺れる
また火傷しそう魔女から誘われる
五本目の銚子肝臓ゆるされよ
塩味の効いた情けに生きる蟻
臍の緒で結んだ仲の螢飛ぶ

第17回堺市民芸術祭川柳大会

と き 9月14日(日) 13時開場

ところ 堺市立梅文化会館 3F

堺市桃山台2丁2番1号 ☎072-296-0015

(泉北高速鉄道・とが美木多駅 3分)

お 話 「川柳の大家性について」 中田たつお

宿 題 「増える」 奥田みつ子選

(50音順) 「掃除」 小林すみえ選

「生まれる」 墨 作二郎選

「メール」 住田英比古選

「行方」 長江 時子選

「ずばり」 野島満寿巳選

「大きい」 村上 玄也選

席 題 なし 各題2句 締切14時

出句料 1000円(作品集・参加賞呈)

賞 各題秀句に呈賞

主 催 堺市文化団体連絡協議会

後 援 堺市・堺市文化振興財団

連絡先 堺市川柳協会 梶川雄次郎方

TEL 072-222-5298

肝臓も休みもらうと機嫌よい
近所からわたしの噂聞いてくる
裏切りは読んでなかった負け戦
山海の珍珠へ箸も目も迷う
酒たばこ値上げ年金攻めてくる
葉ざくらの下で戦の話など
サクランボほどのしあわせしています
鉄人へ携帯電話鳴って昼
新緑へたつぷり絵具絞り出す
四つ葉クロバーだけ探す金曜日

斉

藤

晶

小

林

由

多香

第7回川柳展望全国大会

第1回現代川柳大賞発表・夏季鍛錬の集い

日 時 8月24日(日) 10時30分開場

場 所 ベルクラシック空港(旧玉姫殿) 5F

大阪府池田市空港1-12-8 TEL06-6857-1200

阪急宝塚線「蛍池」から徒歩10分、送迎バスあり

参加費 2000円

はげましのことは 河内天笑

お話「私が考えている川柳の基本的なこと」 天根夢草

題と選者 席題「 」 籠島恵子

宿題「皿」日野 愿 「遊」篠原伸廣

「中」池見静男 「帰」草地豊子

「自由吟」鈴木公弘・井上由起子・高

瀬霜石・新家完司・金築雨学・佐藤

岳俊・天根夢草

各題2句 出句締切 12時

自由吟は各選者に違う句を提出のこと

*各選者秀吟2句呈賞

*大会終了後懇親パーティーあり

主 催 川柳展望社

事務局〒567-0009 大阪府茨木市山手台4-6-3-101

天根夢草方 TEL072-649-5226 FAX072-649-2334

第9回 井笠川柳会笠岡誌上大会

葵 ひこばえ

課 題 (各題2句・3名共選)

「広い」 小松原爽介

撫尾 清明

木本 朱夏

「泳ぐ」 伊豆丸竹仙

赤井 花城

てじま晩秋

共選

共選

応募料 1000円(定額小為替) 発表誌送付

応募要領 B5大用紙1枚に各題2句(計4句)列記

郵便番号・住所・氏名・電話番号・所属柳社

締 切 15年8月20日(水)

投句先 〒714-0081 笠岡市笠岡507-68

井笠川柳会 宛

TEL0865-63-5858・FAX0865-63-6131

お問い合わせは 戸田さだお迄

賞 品 1位に石碑贈呈(2名)

(本人希望句・1年以内建立)

3才に粗品呈(句碑建立者を除く)

会員募集 新会員募集しています

年会費2000円(年4回あすなろ発行)

水煙抄

奥田みつ子選

日立市 加藤 権悟

嗚呼蛭 知覧の母を忘れない

反戦のさけび大空鳩が舞い

無冠だが父の足跡から学ぶ

総論は賛成火葬場のけむり

先生は歳のせいだとそっけない

六甲のトラがいき生きして困る

愛媛県 花岡 順子

とろいから基本通りの車間距離

体の中に重たい石が溜まり出す

立ち上がる勇気を大地から貰う

同じ女だから母を許せない

消しゴムに焦りを消して貰いたい

負けは負け涼しい風が吹いてくる

野田市 那賀島 雅子

車椅子ちよつとななめに夏帽子

嘘の無い汗のにじんだ掌で握手

失ったものの重さを計る胸

勝ち負けをすぐきめたがる老いのくせ

野の花の小さを蝶はわすれない

聞く耳をいくつも持つて病んでいる

横浜市 川島 良子

ケセラセラ 女は強いものらしい

本物がひとつ光っている清楚

きれいな事ばかりで終るはずがない

膨らんで凹んで夢を追いつづけ

ああ女 美とつく言葉には弱い

責任を背負う自由という重さ

八尾市 松葉 君江

フラメンコ炎えて淑女の殻をぬぐ

如才ないえくぼに尻尾つかまれる

表情に一喜一憂する介護

一言がすぎて気まづくなるお酒

自己弁護心の奥を見抜かれる

岐阜市 平野 あずま

一番茶まずは遺影の母と汲む
古里の川へ癒しを釣りにいく
でで虫に生き方学ぶ青テント
眠れない闇に不孝の悔いが浮く
老骨もアバンチュールを期する旅

鳥取県 福西 茶子

喉ぼとけ刺さったままの骨がある
美しく飾って鬼の棲む館
幸せと亡母へ知らせる切手買う
白い皿煩惱捨ててまで洗う
どちらにも恩があります茶を濁す

岸和田市 雪本 珠子

不安げに猫が添い寝をしてくれる
木洩れ日のシャワーを浴びて生き返る
好奇心持って張り合う老い二人
それぞれ的人生観が物を言い
気持替え不満のガスを抜いていく

奈良市 乾 春雄

ふところにまだ飼っている見栄と意地
ぴかぴかの靴は怖さをまだ知らぬ
やすらぎの椅子は妥協の隅にある
散る花にピントを合わせカメラアイ
日記帳あせた記憶に棲む慕情

今治市 塩路 よしみ

来る来ない花びら散らし無に還る
森林浴 五感を磨きリフレッシユ
塩壺の中にくらしの詩がある
まっすぐに見る女です火傷する
逃げ水を追うおろかさを笑う神

札幌市 三浦 強一

さようなら上手に言えた花吹雪
下手がいい絵手紙の師の誉め上手
黒い太陽難民の子のクレヨン画
洒落ひとつ言えぬ等身大の木偶
病院に行くとい病加えられ

高知市 小川 てるみ

ストレスを溜めて笑顔が作れない
ボケットの夢が萎んで雨期に入る
風の糸切れて所在のない心
自作自演ペンがすらすら走り出す
現実に戻れば主婦の顔になる

愛媛県 黒田 茂代

テーブルに愛のかたちが盛ってある
ほうたるの闇に別れてそれつきり
自分史に滲む小さな染みの数
正眼に構えたカマキリの一途
衣装持ちのほくろ信じず諦めず

高知県 桑名 孝雄

五臓六腑真剣勝負するドック
MRI輪切りにされる老いた脳
養生訓ご尤もです休肝日
愛社心あっても社歌の出ぬ酒席
以下同文組が楽しい酒にする

高知県 百田 幸

笑う日も泣く日もあるさ生きている
やんわりと聞いて心を覗いてる
朝市でちよつと拾った良い噂
本当か嘘かジョークの多い夫
人恋しお酒も恋し雨三日

今治市 野村 清美

嬉し泣きだと知っているそば枕
若さって汗までキラキラ美しい
拗ねている鉢も切れる使い方
花開く宇宙の使者か蝶の舞
爪丸く切ってみんなと手をつなぐ

松江市 松浦 登志子

箱の上開けてごらんと書いてある
曲がること許してくれぬカキツバタ
草原に寝転び大地枕にす
ひとりぼっち秘密の袋増えていく
今年また忘れな草が咲かぬまま

倉吉市 酒井 美美子

誰も解らぬこれから先はどうなるか
孫の守り馬になるのもくたびれる
初みくじ中吉なりやその程度
友の逝く急がなくても良いものを
赤信号心は待てず空を飛ぶ

鳥取県 山岡 久枝

いい汗を流した後の茶のうまさ
紫外線よけて帽子を深くする
誰とでも仲良くしたい我がハート
入院のメモにしょんぼり小さい字が
退院のメモは赤ペンしるしする

和歌山市 内田 結実

裏方の汗の重さを思い知る
いつか来た道で見つけた落しもの
歳に合う服を買ったらそれっきり
本心を見抜ける眼鏡磨いてる
紫陽花に酔うて法話で目を覚ます

和歌山市 土屋 起世子

意のままの遊びも知らぬ母が逝く
川底でころころ石が丸くなる
生き下手のままで余生がまだ続く
夕焼けの真っ赤な色につい本音
傍目には棚田の自然すばらしい

田辺市 大峠 可動

天も地も八月の慟哭よ

感情線夜はほのぼの灯をもちす

六根清浄 時と流れてみな仏

ストレスを溜めるとお化けになるんだよ

カルテの中へなんべん落ちるわが運命

和歌山県 辻内 次根

健康が一番などという余裕

聞き耳を立てて流れを読んでいる

海色のインクで書いて出す便り

何となく解る気で聞くカタカナ語

病院の中ではしない深呼吸

奈良県 江波 正純

道化師のような足あとふり返る

初孫の笑顔が崩すマイペース

ぬか床に紫色の朝を掘る

おじさんもメール打ち出す電車内

ハラハラとしてみるトラがトラらしい

神戸市 山口 光久

灰汁が抜け生れ変つて無垢になる

貧乏と仲良くできた子供たち

芽の出ない種はないぞと子を思い

母なれば痒いところに手が届く

訥訥と語る心の奥深さ

神戸市 両川 無限

名案のひとつに黙秘権がある

傷ついたブライドそつと捨てにゆく

喜怒哀楽 酒でテンポを整える

妻だけはいつも味方と信じたい

文学の小道で僕はけつまずく

大阪市 三浦 千津子

家庭円満妻のタクトが指図する

見解の相違まあるい絵が描けぬ

口紅の色替えもして衣更え

身の丈に合わぬ話へ引く斜線

梅雨しとど笑い足りない事ばかり

大阪市 尾崎 黄紅

暑さ寒さも満州と比較する

自慢の一つ一丁目一番地

丸つけてくれた恩師の閻魔帳

再婚同士幸せの絶頂に

捨てるのは惜しい昔の若さ着る

大阪市 升成 好

かずら橋ゆらして恋を確かめる

気を許す酒がいつもの量を越え

初耳という顔つくる聞き上手

思いつく台詞はいつも妻が先

気まずさを感じた猫が膝を降り

和泉市 横山捷也

河内長野市 大西文次

勝負より凝った碁盤を自慢する
旨いお茶呑んで本音を言いそびれ
借農園過去は聞かない畝作り
継ぐ遺産無いから兄弟仲が良い
若社長やる気起こさすナツバ服

泉佐野市 稲葉 洋

納税者の僕もバンクの債権者
みな知っているのに誰も触れぬ泥
結果すぐ浮かんで決意鈍らせる
晴れる日もあると失意に自己暗示
ジ・エンドのベルか耳鳴り止まぬ日々

泉佐野市 備後 三代子

骨董屋お茶飲むだけの馴染客
肩書の付かぬ名刺を出しそびれ
亡き人が唄いつづけているテレビ
誰彼の慈悲賜りて今日手術
花を愛で実も穫れた梅すぐれもの

柏原市 伴 洋子

妻の勘インターネットチェックする
要チェック嘘を言う目は揺れ動く
身の丈の生活無理はしない主義
能登の風棚田の風も海の彩
窓の灯はオレンジ系の愛の彩

明日は明日今夜は今夜大ジョツキ
人間の骨董品にあまんずる
今に見ておれ俺だつて長寿賞
五代目の暖簾が重い肩の凝り
天下りして来た先も火の車

河内長野市 石堂潤子

剥く手間も添えて豌豆おすそ分け
七十歳私魔女のお年頃
初夏ですね峡の茶店の心太
携帯を買って少うし若返る
ごめんねと一言言えば済むものを

河内長野市 木太久 正一

同窓の老友生を語り合い
久し振り心地よかった旅疲れ
バラ園と青いテントの中之島
公会堂かこむ三脚画家の顔
風船の効果いよいよ虎元氣

岸和田市 亀井 皎月

夜を徹し遠く聞こえる盆踊り
温暖化暑さ年毎増すばかり
我が国も熱帯圏に仲間入り
暑い夏熱いどんが合う不思議
井戸水に郷里の夏を貰いけり

堺市 藤井 一二三

亡き友の思い出紅し桜蕊(故吉岡美房氏の墓参)

葛城を背に友の墓碑しずもれり

幸運の笑顔はひとり仕舞つとく

唇に手を当てて笑わぬ妻になり

踊り果て灯を消す一つまた一つ

吹田市 木村 無禄

終の日を神に任せて生きるだけ

日記帳此処は伏せ字にして置こう

聞こえない振りも出来ます僕の耳

面の皮薄くて政治家には向かぬ

あの世への切符往復買つて置く

吹田市 須磨 活恵

煩惱の疼き写経をくり返す

人間の灰汁にじませて生きている

噛み合わぬ歯車いつしか病んでゆく

無位無冠正直だけを子に残す

肩幅に合うた仕合せ抱きしめる

東大阪市 田中 美弥子

精一杯生きるいのちのありつたけ

越えて越えてやつとほんまの夫婦愛

三十年越えた夫婦が交わす美酒

年月の長さへ合うてきた歩幅

今年また紫陽花濡れてはは偲ぶ

枚方市 二宮 紫鳳

平和です孫の笑顔の絶えぬ日々

孫抱いて大志いだけと鯉のぼり

二人目の出産終えて母強し

ウオーキング体も心もはずませる

あじさいが雨のシャワーを恋しがる

藤井寺市 若松 雅枝

ゆつくりと焦らぬ亀に勝ち名乗り

会食でケチつけながらよく食べる

リハビリと歯医者で父の日が暮れる

夜勤明け迎え傘にも愛を込め

田植え時犒う父と子の笑顔

藤井寺市 伊藤 アヤ子

ハイテクな機器に病も慌て出す

この町で袖すり合うて生きている

寿命だと覚悟してから楽になり

ちらちらと言葉のはしに出る本音

達者ですちよつぱり嘘も書いてある

八尾市 西川 義明

若い日の誓った愛を巻き戻す

母の日にポツリと苦労話など

声高に友を励ます長電話

鍬を置き二ツに割つてにぎり飯

嬉しい日演歌の小節よくまわる

京都市 清水英旺

雲水に喜捨する姥の背がまるい
降圧剤飲めと引導わたされる
縁日のそぞろ歩きはノスタルジー
病室に羽音元氣な千羽鶴
廃校舎 子らの体臭懐かしい

京都市 三宅満子

神頼みと違う今年のタイガース
夫婦とやつかず離れず仲が良い
雨音に一日のグチ重くなる
自分だけは老いぬと意地で生きてます
糠床の出来を亡母に申し上げ

京都府 前上英一

子らはみな磨けば光る石を抱く
スポットは当たらぬ父の肩叩く
お悔みを記す手紙のペン涸れる
前かがみ影から先に病んでいる
会えるまで思い込んでた声美人

静岡市 中西雅

美顔術神から貰う顔がいい
親切が心にふれた傘の中
埴輪の眼涙こぼれてきそうです
明日がある友達だから丸く生き
ノータイの話にとけるいい笑顔

横浜市 芦田鈴美

どくだみの笑顔軍手に思案させ
リズムばかり気にして一歩踏み出せず
改札のブザーに慌て出すテレカ
受話器にもパジャマ姿が垣間見え
大波に乗って出口へ押し出され

東京都 やまぐち 珠美

陰影を旅して彼の機微に着く
旧街道の身幅で生きてきた日本
赤い月へ振り払われた手の記憶
捜せない千の思いのただひとつ
大ぶりなあなたの傘で除けた愛

東京都 井上つよし

カウボーイハットで夏がやって来る
まだ残る心に母のしつけ糸
芋の露浴びて蛙の青が冴え
森行けば青葉若葉のシンフォニー
時移り見捨てた過去に学ぶもの

秋田県 湊 修水

あじさいの雨が絵にする蛇の目傘
花柄の相合傘で若返る
かくすからのぞきたくなる傘の中
めぐり逢い互いに歳は言わぬこと
皆さまの銀行みなさまこまらせる

羽曳野市 森 下一知

ふる里に尻尾引っかけ街に住む

トラブルの口を塞いだ紙包み
やわらかい口が男を軽くする

田周率3ではど良い家族の和

唐津市 坂本 兵八郎

ブライドが妻には聞かず探しもの
名が出ないまま やあやあと立ち話

電話ならどなたですかと言えものに

話しつつ誰だ誰だと駆け回る

尼崎市 河津 正治

モノクロの無声映画に想い馳せ

夜は夜の香りにむせぶ沈丁花

死線越え今日は笑顔の三分粥

野良猫が人の心を読んでいる

伊丹市 延寿庵 野 霧

幽邃雅趣 行つて観て撮る苔の寺

ペンペン草背筋伸ばして風に耐え

地団駄を踏んで顔でもすねる孫

むなしさにポロリと愚痴が盃に落ち

交野市 田岡 九好

五月風今日一日をどう生きる

草文字の行儀崩れて夏が来る

とられてもよいと思つた傘とられ

ジーパンをはいたシニアの顔の皺

島根県 毛利 幸

無私の境なれない我が身悔いている

人生は油に混じる水もある

人生の壁があちこち牙をむく

大都会人の怒濤に流される

神戸市 山田 婦美子

目を伏せばいつも笑顔の亡父と逢う

停止線越えたばかりに苦悩する

新緑にふと魂を奪われる

四十年月日がくれた一つ傘

池田市 多田 契子

ライバルは居なかったのに勝ちがない

デモ好きの仲間散歩にはまつてる

有事法 煙が出てから利いてくる

雨匂う母の命日思慕深く

和歌山県 森 下 順子

クラス会失敗談が出てなごむ

世渡りの要所要所に立つ女神

裏側は見えないふりする思いやり

シンブルライフごちゃごちゃ飾るのは嫌い

篠山市 谷田 多美子

やさしさに会いたくなって花の森

親不孝詫びた墓標に夫も逝く

流れ星故郷の森の上で消え

生かされて朝の幸せヨーグルト

アルゼンチン 松井 美稚子

愛多き女は羽衣替えて飛ぶ

アルゼンチンあばたも深き落し穴

糸屑をとつてあげたい知らぬ男

果樹満開 浮世離れの五十町

ニューオリンズ 阿良喜 聆

朝の家事済ませ一息若葉かな

今日もまた孫のテープに見入る祖母

古里へ時差確かめて電話入れ

明日もある急がず悠々老いの坂

唐津市 岩崎 實

咲いた後肥料たつぷり礼を言い

自由の身書道講座のお楽しみ

画仙紙の白を生かした筆の冴え

いきおいは中途半端が大きらい

北九州市 岡田 幸生

娘の姓が変って届くエアメール

一呼吸置けばと悔いている短気

自分史にモザイクかけているページ

三回忌まだ傘立てに亡母の杖

南国市 小原 圭二

待て地震ツバメの雛の居る間

夜明け方自然の色が七変化

OB会リストラ組も迎え入れ

愛国心押しつけられるのは不快

高知県 貞岡 佐紀子

退院の母受け止めて長期戦

今日の鬱消して紫陽花静かなり

冷めたスープあたため直し生き返る

根を生やし心の中に置く言葉

高知県 近森 功

立つ腹を横にねかせて空を見る

いい話らしい補聴器そつと付け

ジーパンの曲線妻も歳だなあ

花よりだんご花があるからうまい酒

高知県 西森 善蔵

柊も齢経る毎に円くなり

赤字債つけを背負うは子や孫か

新幹線置いてけぼりの四国線

あの人の名は何だっけアイウエオ

松山市 山之内 八重美

絶景の思い出残る滝の音

たそがれて地下足袋を脱ぐ農繁期

坂道も好き七色の花に会う

ブランドの陳列眺め吐息だけ

今治市 渡邊 伊津志

躍動感出すに素速い筆が要り

暖かい観察力が作る艶

メロデューが癒しの笑顔連れてくる

色形影が表わす息づかい

愛媛県 安野 案山子

雑草が花壇の隅で花になる
ご近所の情けを貰う野辺送り
紫陽花の色とりどりに子の暮らし
リストラの傷が和らぐ土いじり

宇部市 高山 清子

手の平に乗る幸せを追って老い
忘れたり忘れられたり老い二人
もう一度食べたい亡母の煮ころがし
糸切れた凧になりたい時もある

府中市 馬場 利子

フランスパンざくりと切って晴らす胸
過去へ巻き戻したくなる古時計
嬉しい日少し濃いめの紅を引く
明日は雨心のゆとりとり戻す

倉敷市 撰 よしこ

我がままも我慢もあって嫁姑
幼稚園無心に遊ぶ泥団子
ならされた我慢に欲のない暮し
泥かぶった仲間に通う血の温み

岡山県 矢谷 富士野

花の下部下も上司もない音痴
入賞のよろこび風呂の湯があふれ
経あげてもどらぬ人を呼んで見る
一病を抱いて余生を楽に生き

松江市 山根 邦代

元氣良い風が背中を押して行く
花の苗植えて心も華やかに
追いつきをされて気の付く事ばかり
悪魔にも天使にもなる孫の守り

松江市 松本 知恵子

紫陽花寺に似合う雨の日待っている
時計草咲いて進まぬ過疎の村
文明が進む機械の音のなか
さっぱりと女が変わる夏化粧

出雲市 荒木 英子

青空にまぶしく映る麦畑
白髪に赤いセーター似合ってる
フルムーン想い出づくり明日を待つ
茜雲一人ひっそり物思い

出雲市 多久和 敬子

だんだんと小さくなった母の傘
アルバムから秘密が一つもれました
スローモーション差してもマイペース
も一人の自分を捜す夢の中

島根県 福岡 博利

消費税上げる予告の鐘の音
縄のれんにさからっている今日の足
一言が多くて夜中に自己嫌悪
陽が沈む腹の底からアクビする

島根県 菅田 かつ子

鳥取市 横田 春名

山百合のここよと薫る山之路

あの頃は従順でした口答え

連れ添うてたわいない事揉めている

六十の恋は電車に乗り遅れ

島根県 武島 ちよえ

移り気は紫陽花だから誉められる

病んでみて人の情けが身にしみる

乗り越えた壁それぞれにある想い

限界を知らされてから自愛する

鳥取市 岡田 信恵

幸せの手ざわりのある大安日

幸せの裏に思わぬ落とし穴

ふり返るゆとりが出来た共白髪

看護師のあやし上手も技能です

鳥取市 大坪 天涯

あちこちで電話の話し声を聞く

傷をもつ人それぞれの悲しみよ

手を重ねあつて満ち足る二人きり

友達になれる男と距離をおく

鳥取市 山口 千代子

輪の中を崩してならぬ言葉選る

老いてなお夢追いながら欲を持つ

たまに逢う美人は美人なりに老い

しあわせのレベル下げると愚痴も出ず

来年も着ること信じ衣更え

でもねえと姑の一言座が和む

自己採点あげた拳を恥じている

髪型も変えて跳べよとそそのかす

鳥取市 森 美智代

らつきようと梅の匂いの台所

挿木した紫陽花ピンク色で咲き

不器用に生きてても今日の花は咲く

相槌を打ち同罪になりますか

鳥取市 近藤 秋星

母の日の亡母には済まぬ事ばかり

亡父よりも亡母よりも我長く生き

生きている生かされている我がいのち

人生はいろいろ古稀はどうに過ぎ

倉吉市 青砥 菊枝

目玉だけ買うはずだった自己嫌悪

電話口いつも旦那が先に出る

食満ちて心の飢えは満たされず

干し布団の匂いストレス癒される

米子市 猪森 スミエ

修身の表紙背筋がシャンと伸び

忘れたら洪茶を飲んで考える

中程で無理と道理がもめている

タマちゃんの泳ぐ川だよお静かに

米子市 小 塩 智加恵

就職難孫の出船が気にかかる
薬効か骨量ふえて医者威張る
五十年皿も茶碗も割って無い
周辺に内科外科歯科老健苑

鳥取県 西 垣 美知子

響き合う仲間いるから今日たのし
笹舟を流して解けるわだかまり
暦にはない記念日が胸に住む
輪の心組める仲間とボランティア

鳥取県 奥 田 保 子

笑うこと笑顔もお布施なんですよ
食卓の花がごちそう旨くする
休刊日朝の仕事が一つ抜け
信号機待つてる時間長いこと

鳥取県 池 澤 大 鯨

リクルート鳥の群れが屯する
演壇に上がると自然大声になる
アントニーは演壇には上らない
逃げるとどこにもないぞ地球には

鳥取県 細 田 裕 花

若葉伸び世代交代迫られる
景観へ棚田耕す心意気
土の香が染み付いている父母の指
香水も知らずに母は土に生き

鳥取県 竹 森 富久江

怪獣のマスク片手に攻められる
しあわせよ湯気と戯れ仕舞風呂
反比例しても遥かな夢を追う
胸にひく境界線が増えてゆき

鳥取県 岩 崎 和 子

卓上のバラ華やかなハーモニ
水の中闘魚ひらひら天女舞
一枚の切手国内気まま旅
貿易の開かれた窓サーズ閉め

鳥取県 平 木 公 子

写真さえ見ずに嫁いだ母の幸
止まぬ雨無いと自分に言い聞かせ
ペラペラの知識でメッキ直ぐはがれ
足し算に見方変えたら長所見え

鳥取県 吉 田 弘 子

心無い腹に居座る言葉尻
一部始終今日の行動見た帽子
洗っても落ちぬこころの深い傷
モンゴルへ国技の礼儀届かない

鳥取県 岡 村 孝 明

お互いにサッカー以来近い国
重い座のムード崩しに勇氣出す
赤い糸時どき絞めて二人旅
座禪組み迷いの帷払いのけ

鳥取県 西原 真一

サービスで残業をすることはない
人権を無視されている労働者
同じヒトなぜ年金に差をつける
家計簿も公的資金欲しかろう

鳥取県 竹信 照彦

総連も肩身が狭い我が祖国
雨は欲し風は嫌だと夏野菜
ゴーヤ苗植えて南風待っている
笹の根を掘って畑が生き返る

和歌山市 今 一歩

新緑が心の窓を開けにくる
旅心冷めてマスクへ無事祈る
ひとつずつ欲を捨てゆく古稀越えて
思ひ出が袖を引っばる古道具

和歌山市 根田 美子

さあ田植え嫁のおいしいちらし寿司
七変化あじさい何を語るのか
仏壇に孫の好物供え待つ
ぐっすりと眠りたい日は北枕

和歌山市 橋爪 佐一

溜め息も悩みも楽しこの世なら
以心伝心美女とコーヒー変る味
一病のお陰で喜寿がみえて来た
ウォーキング心足腰若返り

和歌山県 村中 悦男

信仰にすべてを結び妻生きる
何よりも料理上手な妻はいい
わが妻を母かと思う時がある
若い二人作るきゅうりは腰をまげ

奈良市 矢野 良一

文旦の花の匂いに故郷想う
ポップスも小節がまわる演歌好き
気晴らしに飲んだつもりが二日酔い
にがむしも孫を見る目はえべっさん

神戸市 伊勢田 毅

挨拶が続き刺身の色変わる
のし袋書いて溜息古い二人
民の保護二の次にして有事故
そして朝 虎の話題で動き出す

神戸市 田中 章子

情報が多さ生き方迷わせる
しみ隠す化粧だんだん濃くなる
シネトラウス聞こえてきそう揚雲雀
閉園で動物園をはしごする

尼崎市 古川 正子

鴈治郎親子で踊る艶姿
夕日ヶ浦宿の部屋より夕日みる
田植すみ青いたんぽに風が舞う
雨よ降れ街路樹などの待っている

尼崎市 桑 原 東 園

人生のハードル越えた皺の数
家族こそ宝と故郷を出て悟る
土砂降りが通すもんかと叩く傘
ITはにが手電話と脚まめに

川西市 井 本 清 山

下取りに出したい頭もの忘れ
リストラ後たまに見ている社の株価
遅刻して来る人いつも遅刻する
美人より落ち着く妻の顔がいい

三田市 石 原 歳 子

追伸が長いと叔父が笑ってる
吸い殻を数えて不安募らせる
悩む時プラス志向に変えてみる
思い切りボール蹴ってる子のパワー

兵庫県 安 達 厚

新しい風に会いたく旅に出る
送迎は燕の親子無人駅
手の皺に七十五歳を自覚する
パソコンの話に老いとみじめさと

大阪市 井 丸 昌 紀

丸顔で意欲上司に伝わらず
鈍にして根はあるけど運がない
にこにこ肴にされる人格者
苦そうに聞こし召してる旨い酒

大阪市 池 上 清 治

自慢好き他人を褒めることはなし
高台寺 牛車気分の人力車
京土産覗き離れぬ孫娘
燃えてから点検強化消防署

大阪市 中 村 忠 敬

夏の贅 蛩放して蚊帳の内
雲誘う行方定めぬ旅に出る
夕空が晴れて故郷を思い出す
金婚式空気のような夫婦仲

和泉市 小 坂 凡 英

スポーツ勝負けた試合は斜め読み
熊野古道優雅な路と勘違い
健康も入れて採算借農地
怠け癖己を叱る日が続く

大阪狭山市 羽 田 野 洋 介

杯を重ね思い出甦る
一人暮らし意外にかかる手間と金
夕焼けへあしたの夢を刻み込む
様々に新しい過去古い過去

岸和田市 森 元 ふみよ

何時までも残し伝える原爆忌
あの世から一度は欲しい良い便り
背も足も心も伸ばしリラックス
グルメ旅最後は家の味こいし

堺市 荻野 象山

高槻市 安田 忠子

不覚にも掛けた眼鏡を探してた
連休を避けて遊びに出る老後
余暇うまく使えず老いた野暮な父
諦めて上手に生きた母だった

堺市 奥 時雄

すみません すぐ口をつく習性
考えるふりの居眠り腕を組み
薄目あげ顔色を読む古狸
年毎にレジャーの先が近くなり

堺市 柿花 和夫

座ったら壊れる椅子が捨て切れず
植える場所無くとも通う植木市
戦中派食べ放題に馴染めない
つつこみもぼけも独りで妻の留守

吹田市 木下 敏子

知りたいが知らぬ仏の顔でいる
髪型を変えて明日のプラン立て
ここだけの話苦手なイヤリング
洗濯機回しこころの垢落す

吹田市 二宮 栄子

他人の肩かりて歩んだ青い空
もしもして嫁の体調聞き分ける
今日もまた生きる喜び眉を書く
心配の種を拾って苦労する

知らぬ人往きと帰りに逢う不思議
バーベキュー美味な空気も酒のあて
気が利いて間がぬけていることばかり
会う度にサイズふえてる孫の靴

高槻市 大崎 侑子

自慢する種も無いけど卑下もせず
親馬鹿の話半分割引こう
触れ合いの良さも過ぎるとわずらわし
病む友へ会の賑わい触れぬまま

豊中市 藤井 則彦

孤島ならたつぷり聴けるブラームス
街角で妻と出会うた照れ臭さ
ケータイが繋いでくれる離れ島
気を回し過ぎてつまらぬ墓穴掘る

富田林市 稲川 惠勇

反省はするが言いぐさ気に食わず
反省文要領だけはすぐ覚え
レジャーランドこけて思い出だけ残り
ノミの市真贋なんて気にしない

羽曳野市 吉村 久仁雄

知らぬこと知らぬと言えぬ鄙育ち
さん付けで呼ばれたままの恋でした
来た道のせめてペンペン草は刈る
昔むかし戦争放棄の国があり

羽曳野市 福田悦子

夏の終り告げて消えゆく蟬しぐれ

絵日記に私の夏の日があった

縁側で食べた西瓜が夢に出る

打ち上げる花火が夏を持って行く

藤井寺市 俣野登志子

娘にも春過ぎた頃春が来た

降りる時化粧完璧別人に

不和のもと言葉足りても足りないでも

案外と顔は見てない差し向かい

藤井寺市 西村栄一

バラだとばかり思つて水をやつていた

凡人で波風立てず生きている

よう耐えたおなかの虫に酒を酌ぐ

種袋振れば平和の花の音

藤井寺市 吉田喜代子

無農薬土の匂いも付けてくる

花一輪可愛手が出る垣根越し

花満開見て見て見てと胸を張る

病む父の生きた証の太い指

藤井寺市 鈴木いさお

糠床も出来たなすびよ早よ実れ

味見するだけのつもりが買わされる

どうしても自分が古稀と思えない

尋ねられつい三つほど若く言う

寝屋川市 岡本 勲

湯舟の首視界三百六十度

僕の過去許した妻のうす化粧

ひとことで男踊らすほめ上手

許可願ひ出したら浮気できますか

八尾市 赤木妙子

明日はまた雨だと麦の穂が揺れる

春雨にこころ除湿に切り換える

境界にからたちトゲと白い花

気の迷い映す水汲み顔洗う

八尾市 脇 俊子

茶柱の数だけ運を乗せてみる

心なか雷雨が通る昼下り

床上げは好い日どりとと駈かつく

生命線乱視のぶれで定まらず

八尾市 平川幸枝

歩の遅れ花も表も裏も見て

踏み込まぬ親子の絆スベアキ

じれったい恋の手ほどき孫にする

生きているわたしの今に匂がある

八尾市 笹倉ひろし

人生を極めた仲間の集う苑

老いの目はノスタルジアの虫めがね

シヨベルカー金庫破りになり下がり

土地成金今や負債の泥の中

草津市 久保和友

百歳の時には句集も出せそうで
林太郎の墓訪うだけの途中下車
猪が出る村耕運機が動く
訃報また追いかけてくる夏帽子

新潟県 高野不二

父の日へ酒が無難と決めている
大だけが俺の言う事聞いてくれ
保険に入ったけれどまだ死ぬ
通販と保険ばかりのPR

横浜市 金森徳三

九条ののれんをゆらす星条旗
はぐらかし指摘するけど策はなし
核持っていい国悪い国もあり
霧雨に濡れて歩けば唄になる

横浜市 近藤道子

荒れている心を洗うしとど雨
人が好き感動たんとくれるから
パソコンに頼り人間干し上がる
人の情自然解凍待つとする

横浜市 長島亜希子

庭のない幸せを知る草むしり
十聞いて一つ覚える努力する
幸せのおこほれもう披露宴
カップルの笑顔永遠にと祈る宴

横浜市 平達也

今くすり昔気違い水だった
なか四日今日は散歩の車椅子
喜びは妻が笑った久しぶり
ただ感謝妻の支えで生きている

武蔵野市 亀井円女

バカはいやアホかいなあと言うて欲し
踏まないで一途に生きている草を
手を合わさねばならぬお方の多いこと
急ぎ足止めて見なはれ今日の空

日高市 根岸方子

返り花夢の続きの旅つづく
アンケート収入欄に見栄を張り
ボランティアお節介かと自戒する
期待ほど効果上らぬダイエツト

秋田県 秋野宏

坊さんと親しい医者を敬遠し
ハイと言う暮らし支える椅子がある
足音の揃わぬままに初夏の章
お見舞いと言うよりハツパ掛けに行く

青森県 福士トキ

駄駄こねる三女に作る鯉のぼり
うつの字が書けなくなつてからのうつ
新緑にどこへ飛んだか不整脈
もう少し女でいたい美容院

奈良県 南海 美知夫

法令は朝令暮改でおびやかす
飲酒事故激減規制の怖さ知る
医者へ行く三日前から休肝日

枚方市 莊 司 弘 之

義理人情気にして自分見失う
ゆつくりと生きまさんと牛が言い
おしゃれ傘買って雨の日待つ心

大阪府 畑 中 節 子

流れ行く雲を映して早苗待つ
爽やかな若葉眩しい新茶摘み
雑草の芽を気負い立たせて雨上る

八尾市 田 中 トシエ

朝顔のつぼみ数えて早寝する
救急車どこかで誰か乗せたらし
水鉄砲真昼の庭に虹作る

八尾市 寺 川 はじむ

褒められてまだまだですと口が言う
気分屋がにつこり今日はホームラン
長老の鶴の一声座が締まる

枚方市 大 昇 隆 広

澄んだ目にしたのは語れぬ苦勞なり
定年を待ってる夢は本棚に
Uターン里の青葉に見送られ

倉吉市 木 下 智 子

赤ちゃんのどんな顔にも沸くまわり
血がさわぐけれども足が動かない
足腰に自信をつける万歩計

藤井寺市 増 井 ヨシ枝

花よりも胡瓜トマトの笑う庭
ランドセル友達いっぱい出来て夏
一人居につばめ帰ってカンバイす

倉吉市 前 田 喜美子

共白髪生きた証のシルエット
しがらみの心耕す鋏がない
アルバムの若い写真に孫笑う

和歌山市 喜 田 准 一

順風の道で尖った石を踏む
ど忘れの顔へ半分会釈する
ツーカーのはずが立場で裏表

岡山県 土 居 ひでの

母の森娘の生き様の原点に
春風とアバンチュールをしい紅
跡継へバトンを渡す森育つ

大阪府 高 木 道 子

雨もよう待ってましたと蛙なき
畑を打つひたいに確かな青田風
子つばめはバックコーラス如くなり

宜野湾市 杉谷 一 栄

安来市 原 煩惱児

思ひ出すへちマの香り化粧水
来客があると疲れて二三日
遊ぶにも寝るにも抱いた縫いぐるみ

愛媛県 宮本 末子

孫つれて蜜豆を待つ花あかり
海に向きブーゲンビリア咲き揃う
竜の玉手でころばせば青満ちる

東かがわ市 向山 治延

歳かなあ早口言葉わかりかね
水軍の港も車ハイヒール
父母の墓掃除しながらつい涙

府中市 岩本 雅代

妹と良く似て損も得もある
病む夫を愛しく思う八十路坂
へちマ水作り美肌に夢かける

出雲市 加藤 スズコ

沙魚釣りの親子を映す風の湖
恵まれた暮し五月の空に似る
元氣かとただ一言が和ませる

出雲市 梅 ミツエ

園児たちちまき作りで大はしゃぎ
鯉のほり大きな口でいい笑顔
花が散る緑の風に生きている

岩清水やがて大河にそそぐ夢
悲憤慷慨己は何をしただろう
孫が来て老いの暮しをかき混ぜる

島根県 持田 多輝子

ほほ笑みを絶やさぬ友も早や米寿
残り火の余生の夢は子に託す
五欲みな流してくぐる大鳥居

鳥取市 谷岡 清子

盆用と心わくわく花作り
花菖蒲めでる貴婦人雨の中
カーテンと風がかなでる子守り歌

鳥取市 河田 のり代

本を手に通院楽し老いて行く
信頼を支えに老いが若返る
欲を背に夢を信じて願かける

鳥取市 西尾 敬之介

猿ぐつわ囁ませてみたいお喋りに
矢印に沿って行く道迷い道
こわいのは雷だけと老父言う

鳥取県 橋谷 静江

旬の味私の元氣とりもどす
ああ言えばこう言う四年生の孫
度忘れを治す薬がほしくなる

鳥取県 鈴木 一弘
浮き世風呂なるべくぬるい湯のかげん

朝顔に声かけて出る定退日

八十年走り続けた影法師

鳥取県 毎田 信翁

リハビリを余生の友として生きる

思わざりし米寿を迎う余生かな

観光の大山四季をとり揃え

生駒市 小西 稔

今日もまた反省多し日記帳

反省は心ですがあやまれぬ

おふくろの愛の中味に今気づく

奈良市 田中 賢治

親切を借りて置けない頑固者

畝返す肥やし待ってる土の顔

お手伝い花のエプロンうれしそう

奈良市 中島 公市

譲られる気配の席にホッとす

長患い妻のベットになる工夫

回復の日記も書けず寝たつきり

奈良市 成橋 邦柳

うらやまし預金を増やすタイガース

往く先を先祖の墓に問うてみる

知ってますかランプもんぺにすいとんを

三田市 辻 開子

無口でも心は通う真珠婚

しわの手でお疲れさまとビール注ぐ

悩みごと聞いてほしくて墓参り

西宮市 片山 忠

聞き慣れた演歌のように錆びてゆく

目の前が崖つぶちでも夢を見る

確執を生んでしまった姑の愚痴

姫路市 服部 一典

カラオケで夫婦で歌う老いが増え

フサフサと自慢の写真孫に見せ

真っ直ぐに歩いて見せる親の背を

兵庫県 黒崎 美紗子

病室で慰めているオベの跡

先客に話あわせる雨やどり

お元気で握手を交わす車椅子

大阪市 平井 露芳

食べ物の匂をなくしたハウスもの

ええ夢も朝になったら皆忘れ

髪型を変えベッカム様見参

大阪市 寺井 弘子

会心の作と本人だけ過信

長命と長寿大きな違いあり

勝ち組の阪神ビール旨くする

大阪市 近藤 正

紫陽花に九谷の壺も身を隠す

機をとらえ攻めに転ずる後手の先
さほどまで一・三二国憂う

大阪市 辻本 登季子

悪妻と五十四年の共しらが
姿見で笑顔と姿勢直して

お世辞だとわかつていても心地いい

大阪市 大向 ナツ子

味わいを重ね深めた藍の道

真つ直ぐに生きぬこよりに涙する

ふらふらと紋白蝶になつて行く

和泉市 千葉 武

もう二度と会えぬときめき切捨て

遠回りして好きな娘の窓灯り

雑草は日照りに負けず天を指す

河内長野市 内海 綾乃

おはようの一言で皆膳かこみ

ハローワーク パソコン出来ぬ無理みたい

幻想の一度行きたいホテル狩り

河内長野市 印藤 智子

胃カメラを吞んで上手とほめられる

車椅子の目線で世間見つめ行く

おばさんも立ち話止め喫茶店

岸和田市 土橋 房枝

寂しい日寂しい友がやって来る

万華鏡のぞいて母は童心に

財産は想い出だけの我が人生

岸和田市 坂口 英雄

金借りる話は少し酔ってから

居酒屋で充電したか良く喋る

夏祭ゆかたの柄は花が良い

岸和田市 堤 楢代

有事とはうまい言葉をつけたもの

携帯は人を気にせぬ無礼者

跳べないでそろそろ歩む水たまり

堺市 河盛 龍三

難問だ筆握る手が汗をかく

空を見に北極へ行く寒がりや

昨夜から支度したのに忘れ物

高槻市 執行 稲子

モニメント翼広げて海に立つ

試行錯誤しながら作るレシピ味

ストレスにうとうと一番のくすり

高槻市 浅田 憲夫

顔馴染み笑顔の奥が読み切れぬ

また一つ妻の小言を忘れおり

万歩計に催促されて靴を履く

父と岳父ちち育くみし子をそれぞれに
わるさした猫振り返り振り返り
気にかかる初老の旅のハプニング

富田林市 古田 千華
寝屋川市 中川 恵香

あればいいバラ一輪の誕生日
思いやりをそつと心に葉する
馬券買いしばし狸の皮算用

羽曳野市 濱口 フジ

懸命に皆生きているラッシュアワー
もしかしてこの地下鉄にサーズ菌
道草をくった時ほど機嫌いい

羽曳野市 永田 章司

花嫁の父の手袋汗で濡れ
座る席予約されてる御曹子
気の合った友と酌む酒極上酒

枚方市 小川 良吉

アイドルも騒がれやがて散る定め
サーズ禍でマスク頼りの頼りなさ
はくの愚痴妻のみこんだその度量

箕面市 寺井 柳童

渋滞を避けた裏道動かない
見て見ない振りの出来ない一本気
満点に隠し切れない子の笑顔

夏めきて女のお洒落大胆に
水着にも負けぬ姿の町歩き
観光の茶摘女の手はおそく

八尾市 中島 春江
大阪府 藤井 郁代

古寺に安らぎ求め無の境地
歳重ね夢を捨てずに川柳に
ほほ笑みを付けて一言本音吐き

大阪府 桑田 ゆきの

ちぐはぐに耳たぶ揺れるイヤリング
蛭狩り恋を語りし日の記憶
表札に徴が来ている深い梅雨

大阪府 小栢 こずえ

あく付いた親指うんと褒めてやる
足腰が達者ならこそ出来る技
忘れてた元気な体くれた親

大阪府 野田 栄呼

半分の毛も散髪は一人前
老いてなお枯れず引き出す可能性
鶯のリズムに乗ってさんしょ摘み

横浜 石原 三郎

無料バスなるべく歩く身のために
お互いにまた忘れたと笑い合う
晩酌の飲める間は生きて行く

弓削川柳社創立55周年記念
第55回 西日本川柳大会
(6月号P100を参照)

と き 9月6日(土) 18:00~20:30 川柳まつり
川柳大会 9月7日(日) 9時開場・締切11時
ところ 久米南町文化センター(丁R弓削駅下車10分)
題と選者 「屋台」 泉 比呂史・「情報」 小林由多香
「グルメ」 小澤誌津子・「卵」 梶川雄次郎
「熱い」 岡田 千茶・「伸びる」 長谷川紫光
「特別課題」(当日) 恒弘 衛山(各題2句)
参加費 2000円(昼食・発表誌呈)

川柳文学コロキウム
(白 洋 忌)

と き 8月12日(火) 18時開場 19時締切
ところ 大阪市立総合生涯学習センター第4研修室
(大阪駅前第2ビル5F)
題と選者 (各題3句まで) 800円(投句も同じ)
席題1題(2名共選) ? 選・田中 正坊選
大胆・田頭 良子選 急ぐ・久保田半蔵門選
詩人・赤川ますみ選 過去・堀江 としを選
連絡先 赤川ますみ(電話06-6844-0865)

あじさいの思い通りに咲けぬ色
踏破した山並み遙か足をほめ
家庭訪問落ち着きなさは親ゆずり
偽聖戦に反戦の士をぶった斬り
夫戦死妻は義弟に嫁がされ

横浜市 布山 嘉信
摂津市 望月 遊美

第5回「馬っこ」川柳誌上全国大会

応募期間 受付開始 5月1日
締切 9月30日(消印有効)

課題 「馬」2句(新作に限る)

選者

札幌川柳社(北海道) 齊藤 大雄
おかしやうき川柳社(青森) 北野 岸柳
川柳人社(岩手) 佐藤 岳俊
明日香川柳社(埼玉) てじま 晚秋
川柳研究社(東京) 西来 みわ
NHK学園(神奈川) 大木 俊秀
川柳えんぴつ社(富山) 脇坂 正夢
川柳塔社(大阪) 西出 楓楽
光川柳社(山口) 早川 双鳥
戸畑あやめ川柳会(福岡) 藤井 北灯

投句料 1000円(郵便小為替)

発表 11月3日

賞 市長賞外25位まで
(盾その他・発表誌呈)

投句先 〒028-0516 遠野市穀町6-17
鈴木南水 TEL 0198-62-4843

第一回島根県民文化祭

しまね文芸フェスタ2003年
島根県川柳大会

しまね文芸フェスタ 9月7日(日)開会10:15

会場 大社町「文化プレイスうらら館だんだんホール」

講演 金子兜太氏(俳句) 10:30~12:00

島根県川柳大会 9月7日(日) 13:00~16:30

会場 大社町健康福祉センターいきいき燦ホール

(午前と同敷地) 締切 13:30 開会 14:15

参加費 1000円(欠席投句も同じ)

弁当 600円 80個用意(先着希望者)

欠席投句 切手不可 締切 8月20日(厳守)

投句先 〒693-0052 出雲市松崎下町284

吉岡きみえ方(事務局)

兼題と選者 各2句

「阿国(おくに)」 門脇かずお・「願い」 尼
れいじ・「芝居」 原 章峰・「鈴」 長
谷川博子・「巫女(みこ)」 奥田勝子・「浜」
三澤放舟・「社(やしろ)」 長岡良一

主催 島根県川柳連盟

○今回の担当は、いずれも川柳会です。ご協力お願い致します。

特集

「戦争と私」

順不同

幼き銃後の守り

太田 昭

昭和十六年、大東亜戦争勃発とともに、長兄は赤紙一枚で徴兵され、小学校二年の幼い私は、本当の戦争の恐ろしさも解らないままに出征兵士に日の丸の旗を振った。

重苦しい日々が続き、緊迫した情勢が深まる中で、神棚や仏壇の燭台のほか、仏像までが供出させられ、父は軍需工場に、次兄も炭鉱へと動員されて行った。母は「家に残された男はあなただけです。沖縄で戦っている兄や動員の父と兄に代わり、おまえは家を守らなければなりません」と小学五年の私に厳しく言い聞かせた。この時から私は幼い銃後の

守りとして、戦争に加わった。

友達を集め防空壕を掘り、全ての窓に灯の洩れない黒い布を一杯に張った。防火用水を満たし、竹槍の先を削る作業にも進んで参加した。教師をしていた母の帰りは遅く、家事の全てが私の背に負わされた。

私が、小学六年になった頃から「北部防空情報」は日々戦況の厳しさを増し、空襲警報とともに、私は疎開して来ていた幼い姪を抱えて防空壕に走ることが多くなり、真つ黒な敵機の襲来に怯えた。

そんな昭和二十年夏のある日、我が家に三十人ほどの人が集まり、誰もが初めて聞く玉音放送に、身を屈め全神経を集中していた。「日本、負けたのかね」集まっていた人々は鉛を背負わされたように、思い足を引きずって帰って行った。母と私は暫くの間無言のま

ま立ち上がった。食糧危機と乱れた治安の中で、母と父の着物を抱え、「食べられる物なら何でも結構ですから」と、母と私は振り落とされそうな汽車を乗り継いで農漁村を回った。折角分けて貰った食料も警官に没収されもした。私には終戦の実感がまだ湧いて来なかった。

一年後、沖縄で戦死したはずの兄が、復員して来た時、幼い銃後の守りの私は、やっと終戦を実感した。しかし、その兄達も既に帰らぬ人となってしまったが…。

流されて漂うて

森下 愛 論

昭和十九年七月二十五日、中支派遣輸送船が、博多港から輸送のため出港、「日新丸」約五千吨。東、中、西軍凡そ四千名の将兵。敵潜水艦を避けるため、夜間の航行。が、出港して三日目の深夜、米國潜水艦に魚雷攻撃を受け、敢えなく沈没する。

私は、その時、甲板に戦友たちとゴロ寝していたので、ふっ飛ばされて海上で浮いていた。凡そ百名程はいたかと思う。他の将兵は、全て船室にて就寝していたはずである。

がこの将兵たちは全員が、海の藻屑となつてしまつた。筏は疊一枚程の大きさの、分厚い板で作られている。何分大勢いるので、筏上に上る事が出来ない。若い初年兵たちは、疲れ果ててだんだん流されてしまふ。私たち同期の兵士助け合い、七名が生き残つた。これからがあの、長い長い漂流の始まりだつた。食料飲み水一切なし、五日目夜間豪雨に叩かれる。やつと飲み水を得、思わずバンザイ。八月の太陽はギラギラ暑い。うわ言に水々……。十日目全員倒れたまま、物言ひすべなし。海水は飲む、と瞬時にそのままビツと直通する。皆海水に漬つていたので、骸骨が並んであるようだ。十四日目に、海軍の哨戒艇に救助される。

昭和十九年八月十四日

朝鮮南木浦港に上陸。十日間静養する。陸海軍将兵生還せる者五十九名と聞く。

たつた一発の魚雷で三九六〇名、海の藻屑と消えた。再び、原隊の堺騎兵師団へ帰還。

昭和二十年八月十三日

大阪市内を米国B29爆撃機で空襲されその二日後、天皇陛下の終戦勅語が放送される。私が再召集された昭和十九年から僅か、一年で約二〇〇万人の戦死者だと言ふ。戦争の悲惨さを物語る。

——合掌——

運 命

中 塚 礎 石

昭和二十年四月六日、私が所属していた震洋特別攻撃隊第二〇震洋隊は、輸送船城山丸で佐世保軍港を出航した。五島列島の福江に寄港した後、済州島城山浦で同乗の第四五震洋隊、西浦浦で同じく第一一九震洋隊が上陸した。私たち第二〇震洋隊は九日翰林面に上陸した。

済州島に震洋艇の五型が二六隻、搭乗員五〇人を含む総員一九一人の編成の三個部隊約六〇〇人が無事上陸できた大きな原因は、済州島方面に展開していたアメリカの潜水艦が、沖縄方面へ移動したからである。

戦艦大和が四月五日午後五時、沖縄に向けて呉軍港を出航した。豊後水道、大隅半島東部を通過。東シナ海を西進南下して沖縄沖海戦で沈没したのが、四月七日午後二時二十三分である。

この間、アメリカの潜水艦は戦艦大和を追跡して沖縄沖海戦に参加していたため、済州島周辺から姿を消していたのである。それとも知らず多くの艦船が沈められた海域であつた。

たので、びくびくしながらの四日間であつた。お陰様で城山丸のコースは、うねりは高いが潜水艦の姿は無く翰林面に無事上陸することができた。

翰林面で大洋漁業の社宅で仮住まいをしていた四月十四日、宿舍前でアメリカ潜水艦に襲撃された第三十海防艦、駆逐艦能美は轟沈、輸送船寿山丸は大火災を起こした。私たちは救助活動、遺体の収容、埋葬等を行った。アメリカの潜水艦は沖縄から折り返して、済州島周辺海域の警戒に当たっていたのである。

四月二十九日、高山港へ震洋艇を回漕して高山基地で出撃を待ったのである。平穏な日が続いたが八月十一日夜半、出撃命令が下つた。ところが準備半ばで出撃中止となつた。この世の見納めかと緊張した一晚であつた。

震洋隊の戦死者は二、四三二人である。仲間の追憶に心が痛む。亡き戦友の冥福を祈る。

戦火をくぐり抜けて

門 谷 たず子

釜山からうす暗い冷えびえした汽車に乗つたのは、昭和十九年秋も深まる頃でした。

満洲国錦州省錦西にある燃料工場の部隊病

院へ、徴用された夫に連れられての事です。当時錦西は平穩、食糧にも恵まれ新しい官舎での新婚生活が始まりました。故郷では戦雲急を告げ、思いもよらぬ修羅の巷と化していたのも知らぬまま、終戦を迎えました。二十年八月十六日に聞いた信じられないご詔勅は、口惜しさで涙涙でした。

その後男達は部隊に集結、南下して来たソ連軍と戦うか、叶わぬ時は全員玉碎という事になり、私達家族には手砲が鳴れば同時に飲むようにと、青酸カリが手渡されました。官舎四軒の妻達は一軒に集まり、枕元に水と青酸カリの葉包紙を置いて、静かに横になっていました。人間度胸が座ると何も怖いものはないのだと痛感したものです。

やがて夜も白む頃、夫達の靴音がコツコツと聞えてきました。部隊長の英断で家族だけ引揚げるというので、幾度もリュックを詰め直しましたが実現しません。そのうちに国境を突破したソ連兵、八路軍がなだれ込んで市街戦が始まり、ピューンという弾の音が窓をかすめ、おびえながら握り飯を作り屋根裏へひそんだのも幾度か……。

部隊病院には傷病兵がどんどん収容されたので、夫達は口惜しくても敵味方の別なく治療に専念していました。またある時には八路

軍に連行された夫が、妻を一人にさせられぬと、病人に仕立てた友を担架に乗せ、三里の山道を夜中歩いて帰ってくれたというエピソードも……。

その後ソ連兵や八路兵が、次々官舎のドアを破って土足で侵入、時計などを略奪。食糧は手持ちだけでいつ日本に帰れるやも解らず、高粱粟などで食いつないだものです。

翌二十一年五月二日幸いにも葫蘆島からの引揚船に乗る事ができ、私の戦争は一応ピリオドを打つことになりました。願わくば二度と子や孫達に、愚かな戦争に卷込まれる事の無いようにと祈るばかりです。

運命の別れ道

川 端 柳 子

昭和二十年八月十五日正午、天皇陛下の大発表があるというので、ラジオの前で畏まったのは、結婚してすぐ妊娠、お産のために御殿場の母のもとへ身を寄せていた時である。

終戦の詔勅 胎児とともに聞く 柳子

ラジオはガーガーと雑音が入り、なにがなにやら判らぬままに終了。きっと日本のために全員頑張ろうとのお言葉だと信じていた。

が、それが敗戦だったと知ったのはまもなくだった。とても悔しくて呆然としていた。

翌日ひょっこりと思いがけず夫が現れ「仲間とこれから山へ立てこもる」と言う。当時、夫は陸軍兵器学校の教官だった。これは！私達への暇乞いだとすぐ察知できた。

折返し出て行くという夫を、もうこの人を見ることはないのだろうと、途中まで見送った私は、悲痛な思いで後ろ姿を暇に刻んだ。その内、近くの厚木ではアメリカ兵が上陸して、女性に乱暴しているとかデマが流れるし初産だしで不安におののいていた。

ところがある日、一週間振りに夫が髭面で帰ってきた。その時の嬉しさは忘れられない。

以後、山での事が話題になることもなく夢中のうちに長男誕生、私達は父母になった。

運命の別れ道、あの時、夫が帰らなかつたらこの児は、父の顔を知ることなかっただろうと、しみじみ愛児の顔を見つめて育てた。

戦後の暮らしに懸命で、何時かあの山での事を忘れていたころ、ふと夫がポツリと一度洩らしたことがある。

仲間の一人が割腹自殺したのだと……。皆で遺体を選んで埋葬したという。その苦痛に一人が死ぬことで皆にこんなに迷惑をかけるのか！その大変さを悟り自然に解散したのだ

と言つ。あのころ殉死は珍しくなかったのである。

我が家にも苦難は色々あったが、次男にも恵まれ普通の幸せが続いたということは、戦争で愛を奪われ引き裂かれた人達に對して、警沢は言えまいと現在、私は一人になりしじみ昔の思い出を温めている。

軍靴の音が

迫ってくる

中 後 清 史

徹底した帝國主義教育の下で成長をした昭和三年生れの私の青春期は、文字通り戦争に始まり戦争に終る苛酷な時代でありました。

終戦後から半世紀に亘る社会平和の維持は「日米安保条約」の存在に依るところが大きいのと言われますが、私はむしろ敗戦の落し子である平和憲法の存在にあると思います。

平和憲法を軸とする「戦争放棄」と「非武装宣言」は、曲がりなりにも平和運動への原動力として機能し、右傾化抑制の役目を果たしてきたものと思われまふ。

一昨年のニューヨークにおけるテロ事件を契機に、アフガンからイラクへと攻撃が続き北朝鮮問題と併せて国際情勢は、一段と厳し

さを増してきております。

これらを背景に、わが国における防衛論議が高まりをみせております。

自民党の憲法調査会が作成した改訂草案では、天皇を象徴から元首として位置付け「陸・海・空」三軍の保有を明記して「国際協力活動への戦力使用を含む積極参加」等が盛り込まれており、戦前への復古色が滲み出たものになっております。私は健全にして民主的な皇室のご繁栄は希っておりますが、穿ちの眼を持つ川柳人として洞察するとき、その論議の裏で国威の掲揚を図る輩の影が見え隠れ致します。米国との同盟の強化を図りつつ世界への君臨を企て、ひいてはそれが覇権主義へと傾いてゆくことが危惧されます。

出る杭は、いつかはやがて打たれます。

このような状況下で、柳人はどうあるべきでしょうか？ 私は、鶴彬に倣つてという訳ではありませんが「反戦歌を十七音字に託して社会へ発信し続ける」ことではなからうかと思ひます。

戦争は、如何様に大義名分を被せても容認出来るものではありません。

子や孫を戦場に送らないために、今こそ私達は戦禍の悲惨さを肝に銘じなければと痛感する次第です。

悪 夢

福 本 英 子

昭和二十年七月九日、和歌山空襲の夜でした。連日の警報疲れで家族が防空壕の中でうとうと眠っていた時、ふと何だか様子が変だと気付き、壕の扉を押し上げるとそこそこ火がついている。

急いで中にいる母と妹二人を呼んだ。這い出てきた妹と私の目前へすーと火柱が立つた。「八重ちゃん危い」と叫んで手元のバケツの水二杯を頭からぶっかけると一瞬火が消えた。

その間に母と下の妹が壕から出られた。板二階の火があちこちに見える。後で聞くと焼夷爆弾が落ちたとのことだった。

母は妹を引っ張って住まいの方の二階へかけ上つて行つた。てつきり慌て、逃げ場を間違えたのかと、必死に呼び戻したら、お仏壇からお位牌を持ち出してきた。はつとする間もなく、自転車に非常袋を括りつけて外へ出たが、近所は皆逃げた後で人影もなく、その家から火が見えるだけ。急いで家を離れたとたんに、どさつと火の塊が背後に落ちて

熱風が走った。

もしもの時にはと、逃げる先は決めていたが、出るのが遅すぎて道は燃えている建物など、前へは進めない。止むなく引き返し、和歌山城の堀ヘドボンと二人掛りで自転車を投げ込んだ。私達も石垣をそろそろ降りた。

胸まで水に、ずぶずぶと泥の中へ濡まで浸って肩を寄せあった。そのすぐ後から堀端に立っていた男の人が自転車諸共ぶつ飛ばされて落ちてきた。私達のすぐ横にいた小学生の男の子は直撃弾に当たり即死。坊やのおばあさんが泥の中で「代ってあげたい」と泣き崩れていたのが目に焼きついていて。その時お城が真赤に炎えてすく綺麗だったのも、辛い思い出である。

この地球から戦争の文字を無くしてほしいと心より祈っている。悪夢はもう私達だけ結構だと痛感している。

三種の神器

田 中 正 坊

私は、戦争にまつわる「三種の神器」―旗と手帳と刀を持っている。今から六十一年前の昭和十七年九月、私は半年間の繰上げ卒業

で学校を卒業した。学友のほとんどはだちに現役入営したが、第二補充兵であった私は毎日新聞に入社し、勤務していたところ、召集令で同十九年六月、中部第二十三部隊に入隊した。日の丸の旗はその時、贈られたもので、奥村信太郎社長が、「折武運長久」と墨書し、編集局の先輩・同僚が名前を寄せ書きしている。兵隊はみな、この旗と千人針を持つて戦地に出征していた。

次の手帳は、正しくは「軍隊手牒」で、軍人のバイブルを兼ねたライセンスである。草色の木綿の表紙に和紙が綴じられており、軍人に賜りたる勅諭と戦陣訓の全文、応召及び出征の心得が掲載され、履歴の記入欄があった。進級等が一目で分かるようになっていた。兵隊は金属製の認識票とともに、これを常時、携帯することになっていた。

私の履歴欄最後の行は、「昭和二十年八月一日、東部第一九六部隊に分遣を命ず」とあって、茨城県にあった原隊から千葉県の部隊に移っており、東部軍管区教育隊長名の修学証明書が添付されている。当時、私は兵科幹部候補生として陸軍軍曹の階級を与えられており、同月末に見習士官、次いで少尉に任官することになっていた。

そうならば自前で軍刀を調達しなければなら

らず、当時、能勢に疎開していた母が、伝手を求めて池田市在住の刀鍛冶から軍刀を譲り受けたが、私はそれを一度も身に付けることなく、終戦を迎えた。陣太刀を模した陸軍制式軍刀で、外装は立派だが、刀身はいわゆる新新刀で美術工芸品としての価値はない。これを役立てることがなかったのは、元軍人としてせめてもの慰めだが、何度かの移転で今ではどこへ仕舞いこんだのか分からない。もし見付かればたいして珍しいものではないが、日の丸・軍隊手牒とともに戦争資料として、大阪国際平和センターに寄贈しようと思っている。

蛭

石 倉 芙 佐 子

昭和二十年に入ると太平洋戦争も風雲急を告げアツツ島玉砕。東京、大阪等の空襲は激しさを増し、山陰地方にもB29の襲来があり汽車が襲撃され、出雲にも焼夷弾が落ちて来るようになった。学徒動員で働いている真上を遙か上空に敵機が見えた。

私達はまるで男子と同じ服装で戦闘帽にゲートルを巻ぎ、言葉遣いも軍隊言葉であった。

凜々と号令をかける班長殿の声が今も耳に残っている。

日曜祭日もない朝一番の汽車で馬場工場に通勤、五時番で帰る生活であった。いつであつたか夜に可愛い人形を作りお守りを入れて、出征する従兄に送りもう一つを直江飛行場に居られる神風特攻隊の一人の方に送った。そんな縁で家まで来て下さり、父母や祖父母はまるで息子が出来たように喜んでゐた。六月の末に初めてお逢いした私は物も言えず、ただ「はい」と言つて俯いてゐた。明日の命も知れないその方も、近々出陣らしいから……と母は白地に蚊文緋の浴衣を一晚で縫い上げ、私にも浴衣を着せ「蜜を取ってもらいなさい」と送り出してくれた。

真つ黒い顔の女の子は蜜籠を持つて黙つて高瀬川の畔を歩いた。「美佐ちゃん、ここに居ろよ。僕が向こう岸のを取つてくるから」と彼は蜜を取りに行った。昔の川は葦がたくさん生い茂り、幻のように蜜が光つてゐた。そんな想い出を残して靖国隊は埼玉飛行基地に出勤された。「女子供が見送るものではない」との父の一喝に、母と私はお見送りができず、ただ心で折るばかりであつた。

あれから五十八年の歳月が流れ、私も人の妻となり母となり、本当に一生懸命生きてき

て子供達一人も独立した。あの時の少女も白髪のお女となつた。八月十五日全国戦没者慰霊祭が今年も行われることだらう。

毎年この一晩だけ、私の胸で瞬く蜜を元の高瀬川に放すことにしている。幻の蜜はやがて天の川に流れつき瞬いてくれるだらう。

現実では車椅子が必要な私でも、川柳の世界では恋もし失恋もし、思い出を大切に楽しく生かされ老いてゆきたい。

私の初陣物語

小 西 雄 々

戦車第十三連隊は、中国の漢口に本隊がおり、昭和十六年徴集の現役兵の約百名は翌年十七年二月これに合流した。翌日から激しい訓練が実施され、特に軍隊の基礎である戦闘教練には疲れた。これが終ると午後は、トラックと戦車操縦の猛訓練であつた。エンストと脱輪をすると、その都度いわゆる「ピンタ」と称する制裁を受けた。

さて、大陸の楊柳が青々と芽を出し始めた頃、新しく作戦が計画され、教育中の初年兵も参加する事となつた。鉄舟で揚子江を渡り、作戦地「汚陽」へと向かう。ここは漢口から

西南方へ約四百軒にある部落で、蒋介石直系の精鋭部隊約一千名が、巨大なトーチカに立て籠り、多数の重機関銃、迫撃砲等を持つていた。

昭和十七年五月五日、端午の節句の正午に総攻撃は開始された。野戦重砲二門が先ず発射された。飛行機で弾着を観測、その中を戦車を先頭に歩兵部隊が進む。敵は頑強に抵抗し一大攻防戦が展開された。我々初年兵は教育いまだ半ばのため、徒歩部隊を編成し歩兵部隊と行動を共にした。弾丸雨飛の中に身を曝す時は、筆舌には表現のできない無我夢中であつた。私は軽機関銃を持っていたが、銃身が弾の発射熱で熱くなり、更に真赤になるほど射ちまくつた。

戦闘が約三時間程続いたとき、初年兵は後方に退避せよと連隊長命令が来た。安全地帯を疲労した体で麦畑の中を二列縦隊となり進行しているとき、突然近くの遮蔽されていたトーチカから狙撃され、私のすぐ後にいた三代野邦三郎君が腹部貫通で戦死した。私の所属する二中隊で、最初の犠牲者となつた。

彼は母一人、子一人の家庭で鳥取高農（今の鳥取大学）卒で、惜しい人材だつた。毎年五月の薫風に泳ぐ鯉のぼりを見ると、彼を思い出し、ご冥福を祈っている。

戦闘のことは忘れぬ老い蜜

雄 々

生き延びて

恒松町紅

昭和十八年満二十歳の兵隊検査を受けた。それこそ種一枚の素つ裸で軍医の前に立ち、性病検査だと言つて種を外させられ、親にも見せなかつた男のものを調べられた。

兵隊検査は甲種、第一・二乙種、丙種といった分類で甲種は現役兵で入隊し、第一乙種以下は補充兵であつた。平和な時代には軍隊にも定員があつて、甲種合格でも籤運によつては現役を免れ、口惜しい思いをした人もあつたが、戦時下になると補充兵もどしどし召集されていった。

私は第二乙種の第一補充兵で兵科まで決まつていた。召集を今か今かと待つていたが、どうした訳か終戦になつてしまつた。それでもわずかだつたが軍隊教育は受けた。

家では大根を半分以上もまぜたお粥のような食事だつたが、兵舎では麦飯だつたと思うが、白い御飯を山盛りに食べられたのが嬉しくて、その時の気持は今も忘れない。しかしそれは内地の話で、外地へ出征した人たちは、方面によつて悲惨な食事情だつた事は

周知のとおりである。

そして同い歳で柳友でもあつた従兄弟は、甲種合格で従軍し、終戦後復員して同じ職場にいたが、六十歳のころ内臓疾患でこの世を去つた。第二乙種だつた私は今八十歳を越してなお健在である。一体兵隊検査とは何んだつたらうかと、今頃考えさせられている。

生きのびて乙がたどる八十路坂 町紅
そして昭和二十年春、数ヶ月後に終戦になるとも知らず、家屋疎開で、家財道具を田舎へ預けたりしたので、大切にしていた川柳雑誌などは全部無くしてしまつた。

終戦前後の思い出

岡本久峰

昭和二十年私は掖河の第五軍々医部に勤務していた。栗先生の「馬上遙かにソ連領を望む」とお詠みになつた要衝の地でもある。

軍医部は、部長佐藤俊一少将（阪大）高橋幸雄大尉（同）辻野利雄薬剤大尉（京大）佐守信男中尉（阪大）私を含む衛生下士官数名に婦長、タイピストが各一名配属されていた。当時独ソ戦終了後、シベリアに続々と兵力が増強されて、正に一触即発の危機を孕んでいる。

た。

八月九日非常召集によつて飛び起きたところ遂に来るべきものが来たと思感した。案の定、日ソ不可侵条約を破棄してソ連軍が進入を始めたのである。劣勢極まりないストーリーに憤りを覚えたが後の祭りであつた。

永年ソ連軍と対峙をした第五軍も、虎の子の兵器、精鋭部隊を国土防衛に南方戦線へと転出を余儀なくされ、最後には一台の戦車、一機の飛行機すら底をついていたのである。

十三日庁舎の道路を前進していく若い部隊の余りの凍々しさに、私は酒保の日本酒を手渡して健闘を祈つた。この部隊こそ石頭予備士官学校生で中に屈強な工兵隊も参加していた。彼等は夏草茂る磨刀石に於いて、一昼夜に亘る死闘を演じたのである。この隙に乘じて牡丹市三十万人の邦人は、一人残らず同地の脱出を果たした。岸壁の母なる一人息子端野少尉も、また私の幼友達も工兵伍長として同地に名譽の戦死を遂げている。

停戦一カ月後にこの戦跡を通過した時、大蛇がのたうち回つたような戦車の軌道跡、高梁畑はソ連兵士の墓地と化して、一面に十字架が並んでおり、如何に凄まじい戦が演じられたかを物語つていた。

十七日に終戦の詔勅、十八日にけなしの

武装解除、何故か虚ろさを感じた。烏鬼匆匆、半世紀以上の歳月が流れ去った。

最後に京都に在住の歌人の一首をお借り申し上げる。

／＼掖河なる野戦に生えし夏草の

見守りいしや夫の最後を

学童疎開の

子らと共に

板東倫子

昭和二十年八月十五日。青い青い空の暑い暑い夏晴れの長い一日でした。人間天皇として国民へ語りかけられた玉音放送を、私は高野山麓の山里で呆然と聞いていました。弘法大師ゆかりのその集落には、旅籠やお堂が点在し都会の学童たちが分宿して居りました。

日に日に悪化する戦況下、親もとを離れた子供を集団で疎開させるといふ非常事態に、新米ホヤホヤ教員の私も学童保護の重責を担っていた訳です。

配給品があるといつても自給自足に近く山で薪を拾い、藁を編んで草履を作る生活はまだしも、野草入りの雑炊や近在農家からの差入れが食事のこともありました。

最初のころは線路を伝って家へ帰ろうと相

談した子。夜になれば必ず泣き出す子。熱を出す子。食事が喉を通らぬ子。どんなに辛かったことだろうと思うけれど、当時の私には煩わしくて叱ったこともあり、申し訳なく思っています。

戦争も末期になりあの堺大空襲を紀ノ川を隔てて目撃しました。爆弾が落とされて一面火の海。天まで燃え上がる炎。子供の目には地獄の火とも映ったでしょう。「お母さん」と悲しく切なく、舎員が母を呼び続けました。栄養不足。衣服の虱。原爆投下。そして負

けるはずのない日本の敗戦。終戦の詔勅を涙ながらに聞く大人たちを子供たちは黙って見つめていました。日本はどうなるのだろうか。日本人はどう生きてゆけばよいのだろうか。何ひとつ答えられない私は、とにかく子供たちを無事に親元にお返し出来ることが嬉しかったことを覚えています。

あの長い長い日から早や半世紀余り……。今や日本国はあらゆる分野での一流国となり、世界平和を願う勇氣と努力を惜しみません。

苦難に耐え敗戦を乗り越えて来た方々も、現在は安定した生活を楽しんで居られることでしょう。「敗戦」を体験したあの時の「疎開の小学生」こそ、今日の日本の原動力だと固く信じている私です。

忍耐・忍従・感謝

園山多賀子

大東亜戦争が終わって五十八年……。戦時中は食料難で十分な栄養も摂れなかった。よくぞここまで生き延びて来られたとしみじみ憶う。「衣食住」の衣の方は衣料切符で限られたものしか買えなかった。

配給の大和木綿で主人のハンチングまで作った。手製の六枚接ぎの帽子は好評で、頼まれて大人も子供も紫外線除けとして喜ばれた。モスリンの姑の着物が二着のワンピースに化け、夜遅くまでミシンを踏んだものだ。姑の着物は柄が小さく意外と洋服に適していた。洋裁といつても別に学んだものでもなく、原型の初歩を齧ったくらいで、完全に素人芸である。それでも結構間に合いリファームを頼まれ、薪作りに来て貰った手間代わりとしてお互いに利用し合ったものだ。つまりは現金の要らない生活であった。

昭和二十年の終戦直後に八年ぶりで女兒を授かった。その際の産着は実家の母が、米と交換して間に合わせてくれた思い出がある。とにかく食糧難の時代であった。私の家は

教員というサラリーマンで、田圃は人に任せ
ていたので十分な米は入らない。甘藷、カボ
チャなどは大切な代用食だったが、それも質
より量である。甘藷の「護国」の味は落ちる
が多収穫の物を選んだ。知恵を絞る間米は一
粒も買わなかった。

住の方は先祖からの家だが、雨の漏らない
程度で十分だった。ともかく耐えること。忍
従が身について、勿体ないという感謝の生活
だった。

イラク戦争も短期間で終わって良かったと
思う。戦争はもう繰り返したくない。

ふつとラジオのスイッチを入れる。「みか
んの花咲く丘」の平和なメロディーが流れて
きた。私は暫し陶酔する。

私は戦争の

残滓かも

早川 棲世

太平洋戦争の期間は、ちょうど私の旧制中
学五年間に符合する。顧みればその時期に、
事実上、私の将来、私の人生が決定づけられ
たと思う。従軍など直接的な加害行為に関わ
らなかったことが何より幸いだった。

空襲との縁は深い。一般的に、米軍機の

来襲は終戦間際の時期と思われる、その通りで
あるが、開戦間もなしに、ノースアメリカン
B25というのが、東京、名古屋などとともに、
大阪へも来ている。どこでもよいといった感
じで、爆弾を落していったが、一個は阿倍野
の南、私の恩師宅近くであったし、一個は天
王寺区の私に通っていた中学の校庭であった。

B29による大規模空襲の最初は、昭和二十
年の三月十四日で、南の方に起った火焔は、
忽ち都心を覆いつくした。降り注ぐ無数の焼
夷弾に、木と紙の街は抗する術がない。親と
離れた学校友達が、道修町のわが家へ逃げこ
んで来た。翌日、地獄絵の業火が燃え残る中、
彼を送る御堂筋は見渡す限り焼野原、被災者
の列が黙々と続き、道や防空用の貯水池には
焦げた遺体がいっぱいだった。

その他、勤労動員で旋盤を動かしていた桜
島の広大な軍需工場が、一瞬のうちにふつ飛
んだ話、グラマンなどで市民を機銃掃射する
米兵の顔、空襲直前に京橋駅を逃げ出し、壊
滅した造兵廠の死傷者を運んだ話、堺筋に落
ちたB29の始末、八尾飛行場の掩蓋づくり、
紀伊半島での塹壕掘りなど、体験はあまただ
が省く。うちの家も最後の空襲で焼滅し、私
たちは住居だけでなく、家業も失った。まも
なく失意の父が亡くなり、私は母と幼い四人

の弟妹を抱え、学校どころではなくなつた。
市民を巻きこむ戦争の非情悲惨さは、イラ
クの諸例と結びつく。市民への無差別な空爆
と殺戮は、原爆やシベリア抑留と同様にきび
しく糾されねばならないと、私は毎年八月が
くるたびに思っている。

戦後半世紀サイレンまだ想はず 棲世

国破れて山河あり

乙倉 武史

毎年八月が近づくとは私は体験した海の戦い
の数々の光景を、今も生々しく鮮明に思い出
す。わが乗組駆逐艦「天霧」は緒戦から日米
が国運を賭して戦った、海の最前線南太平洋
ソロモン海域にあつて、日夜を分たぬ寧日な
き戦務に活動中だった。

昭和十八年八月二日深夜、敵前揚陸作戦を
無事完了、僚艦と共に基地へ帰投中だった。
漆黒の闇の中に敵の高速魚雷艇三隻を発見。
直ちに発砲交戦しその中の一隻へ艦首から高
速をもつて乗り切り、忽ち海底深く海の藻屑
と葬り去ったのである。

海戦史上稀といわれた世紀の激突撃沈の奇
跡の現場に遭遇した事は、私にとって特筆す

べきシヨッキングな出来事だった。しかも座乗の艇長が奇しくものちのアメリカ大統領、故ケネディ氏（中尉時代）と後で判明したのも驚きだった。

当時既に制空権は奪われ、苦しい戦闘を強いられていた。ある夜戦で敵艦と交戦中、艦橋下の電信室へ直撃弾が命中。電信科全員既に戦死し正に悲惨、目を覆うこの世の生き地獄を見る思いである。

戦い終って帰投後、亡き戦友の骸を毛布にくるみ、一人ずつ背中へ背負い心の中で息を泣きながらタラップを降りたのを思い出す。幾度か死線をさ迷いながら図らずも九死に一生を得、香港で終戦捕虜となり四ヶ月を過ぎ帰還の日を迎えた。帰る復員船から夢にまで見た祖国日本の姿が見えた時、あたかも我ら窮鳥を温かく迎えてくれる母の如く「国破れて山河あり」の現実を前に言葉もなく、止めどなく溢れる涙をどうする事も出来なかった。お国のためにと身命を擲って戦った、亡き戦友の海底に眠る水漬く屍の英霊の心情を偲び、心から哀悼黙祷の誠を捧げると共に、再び不毛の戦争はしてはならないと、固く心に誓ったものである。

「剣を執るものは剣に滅びる」の諺の通り、老兵の願いは一つ、非戦あるのみと後世に伝えた。

戦争と平和

井上桂作

第一次世界大戦後の大正成り金もつかのまに終わり、世界恐慌が始まる。その後満州事変、上海事変を経て日中戦争に突入する。翌年國家総動員法が発令され、国を挙げて戦時体制に入り、以後「勝利の日まで」を合言葉として、苦しい戦争の連続でした。「欲しがりません勝つまでは」の国策にそって、小・中・高校・大学を通じて一度も「修学旅行」に行つた記憶はない。

忘れもしない、昭和十六年十二月八日の真珠湾攻撃、華々しい戦果の陰に親友の実兄がこの攻撃に加わり戦死する。飛行機もろとも火を吹きながら海中に消えていった実兄の姿を、当時のニュース映画で友と泣きながら固唾をのんで見たのが、戦争に対する最初の疑問でした。

戦争もたけなわとなり、大政翼賛会の発足に伴い、自由主義者は代議士にも立候補できなくなりました。ちょうどお隣に帰ってきた元代議士の蔵書の中に、東大教授美濃部達吉博士の天皇機関説が目にはいり熟読しまし

た。当時中学の朝会では「宮城遥拝最敬礼」を毎日のようにさせられていました。現人神と教えられていた「天皇」とは随分変わった存在に驚かされたのも事実です。

黙っておればよいものを、教室でこの話をしていたのを、担任に聞かれ早速校長室に呼ばれました。「国賊」と言われながら同席していた教頭に十数回も顔を殴られ、一週間も学校を欠席しました。決して忘れることのできない苦しい体験でした。

敗戦後五十八回目を迎えました。が、「全く国難」を忘れ去りその日暮らしを続けてきた日本人も、北朝鮮の「ミサイル」を前にして一番備えなければならぬのは防衛体制であることに気がつきました。

日本国憲法は戦争にたいして「しないさせない」を国是としています。最近では憲法改正再軍備、天皇元首の復活など大新聞でも堂々と社説で採り上げている。仕事の関係で若人と接する機会が多いので「憲法九条改正、徴兵制度復活について」彼らにその意見を尋ねました。ところが「実際に戦争に駆り出されるのは我々若人で、大人は若人の意見をなぜ尊重しないのか」逆に問い返される始末です。彼らの答えを推測すると、可能な限り平和を求めるのが若人の本音のようで安心しました。

麻生路郎物語

(20)

—信濃の旅と松坂俱樂部—

東 野 大 八

昭和十一年九月二十日路郎は信州松本市を訪れ、石曾根民郎らと旧交を温めた。

この年八月に川柳職業人を宣言したばかりの路郎にとっては、はげしい毀譽褒貶の渦中に身をさらした直後だけに、この信州信濃の旅は、ここからの解放感にひたる憩いのひとときであつたようだ。

この信濃への旅は、九月十七日に上京し、川上三太郎宅を根城に東京柳人の有力者たちと懇談、横浜にも立寄り川柳協会の足固めとプロ川柳家として起つ旨の態度を表明する宣言の挨拶も兼ねたものであつた。それだけに心身ともに落つかぬ在京三日間だつたようだ。

昭和十一年九月二十日 路郎師は松本を訪れた。雨であつた。

雨の松本にて

—遠く来て信濃に山のない日なり 路郎

—朝空に雨は無帽の師を迎へ 民郎

この句が生まれた。私（石曾根民郎）筆者註）は、松本で川柳展を開き、路郎師にみて貰ひ、松本の川柳家と座談会を開くことにしていた。大勢集つた。終始にこやかに川柳を語り、雑誌を語つた。浅間温泉に案内した。ゆつくり信濃の秋をたのしんでおられたようだった。

路郎師と浅間温泉一泊

—ねさめては湯の香の窓へ師をさそひ

民郎

（川柳雑誌四六〇号 “足跡” 石曾根民郎）

松本に着かれると、早速に家へ寄つて頂き二人連れで傘をさし、ほんの百米ばかりの松本城を訪れました。雨に濡れながら感慨深かそうでした。城から当然見える山は雲に隠れてみえず、そこであの句ができたわけです。浅間温泉に一しよに一泊、ここで語りあつ

て翌日松本に出て展覧会をみて貰いました。会場は鶴林堂書店三階ホールで、ここは私の町内にある本屋です。この展覧会には、路郎さんにもいろいろ出品して頂きました。石膏でできた句のレリーフみたいなものも出しました。

—だしぬけに鐘が鳴るのも旅の事 路郎
の横顔はそのまま私がゆずつて貰ひ、私の居間に飾つてあります。

路郎師と別れる

—師の汽車よひとしお秋を縫うてゆけ

民郎

（石曾根民郎書簡）

路郎にとつて信濃は、このころのくつろぎをあたかく抱きとめてくれる唯一の旅情の天地であつたらしい。川維奉還を断行した直後にも信濃を訪れている。夫の信濃への深い関心に誘われてか、蔑乃夫人もながい間の憧れの地であつた。そして昭和三十四年九月、夫婦そろつて湯田中の中島紫痴郎の無心庵にゆつくりと滞在。やがてそこから松本へ出て、民郎とともに浅間温泉に遊んでいる。

民郎は『川柳雑誌』No 460の麻生路郎追悼号の“足跡”でつぎのように書いている。

「湯田中の中島紫痴郎さんの無心庵に長く滞在、こよなくも信州の風物に接しられたのであつた。その帰途、お二人で松本に立寄り

れた。早速、浅間温泉におつれし、よもやまの話を花が咲いた。そのとき川柳雑誌の後継ということをしみじみと語られた。重大なことで、とかく私の口幅つたいことを洩らすべきことがらではなかったが、私の育んでくれた「川柳雑誌」の遠い将来についていささか関心を寄せないわけにはいかなかった。

深刻な話のほかでは、信州路へ入った一休みを木曽福島で落ちつき、その宿屋で講習のあった木曽踊を早速、蔑乃奥様は熟得されて一と自慢されたり信州の漬物のうまさなどが二人して口を合わされたことであつた。」

話を再び昭和十二年（路郎五十歳）の時点に還そう。以下、山雨楼メモ抄録。

この年、四月十八日第四回全国川柳人交歓大会が名古屋市中で開かれ、路郎は関西側を代表して挨拶を述べた。関東側は周魚。（大会の内容は未詳）

前年夏から重態をつづけた蔑乃が、秋十月には床上げしたものの、いぜん半病人生活をつづけていたが、この年六月には市電に乗るだけの体力を回復した。

名古屋支部創立句会、支部長吉田水車。

川柳六月号に藤村重鈍が「川柳壇無能論」を書く。青年詩人であり、新進川柳人である同君の偽らざる告白、相当な反響あり。

七月七日本社例会に安川久留美来阪、散会后、竹葉亭で歓談。翌日路郎と共に神戸、舞

子などに遊ぶ。九月キング喫茶店廃業。

十月二十五日事務所開設、西区土佐堀筑前橋電停前、昭和ビル二〇一号室。

十一月松坂屋松坂倶楽部の趣味道場で、毎月二回路郎川柳講座を開くことになった。俳句は青木月斗。

この松坂倶楽部の講座は、その後の「川柳雑誌」をささぐ、川柳塔を担う路郎門下の有力同人数多の加盟を迎える記念すべき催しとなった。「川柳雑誌」No四六〇号麻生路郎追悼号の座談会の中につぎのような記事が載っている。

戸田古方 私が松坂倶楽部へ初めて伺ったのは昭和十三年の夏です。春から中島生々庵さんが一足先きにお弟子入りしておられて、私が引っぱられました。松坂屋の七階で……

川村芳郎 松坂倶楽部があつて、その中に川柳講座があつてその指導が路郎先生であつた。その特徴は席題が出て作句しておる間に各々が作ってきた研究句を先生の前に提出する。そして一人一人先生の机の前に呼ばれ、そしてその句について実に厳しい批評・指導があつた。（当時の一枚を大切に保存されていたのを持参、一同に示す）

こうしていちいち朱筆で添作して下さる。生々庵氏が、今頃まだこんな句を作っているのかと叱られて、平身低頭していられた姿を今でも覚えております。併し、そうした教導

によつてその当時の会員達に優秀な作家が生れた。都倉晋太、中島生々庵、武部香林、宮田不二、小川恒明、新川博也、戸田古方、米本貴志子の諸氏で末席を汚して私です。

戸田古方 私も根よう参りましたが、先生はとも私共の及ばん程の根氣のよさで私達を導いて下さつた。

川村芳郎 月二回で会費が一円。

西尾 栗 その当時の普通の例会は三十銭だったのです。だから今いうたはる一円だったらい作家も輩出するでしょう。

戸田古方 紺の毛せんを敷いてその上に銘々が硯を置き、短冊の紙に席題を書くのです。夏にはおしほりも出ました。

川村芳郎 松坂倶楽部の会員で北野劇場の古川緑波一座の観劇句会をやつた。その時に得た句を次の句会の時に披露され、おおかたの人の句が緑波の劇を見たものでないとかわらんような句が多い。吟行ということは、句材を新しく求めに行くので、その劇の中から新しい境地を発見して作句せねばならんと教えられた事を私は今でも忘れない。

戸田古方 私が川柳を始めた頃はうれしきげに、あつちこつちの句会へ誘われて顔を出したところが先生に見つかつて「まだ早いわしがうんと云うまで行つたらいかん」と叱られました。併し二十何年経つた今日から考えるとそれは誠に正しいお導きであつたと思

います。

西尾 葉 先生は句の上では一歩もゆずらず妥協されなかった。阪大川柳会の長崎柳秀博士は若い頃は

「金魚屋に舞妓袂を教えられ」やら

「心中へ明日のお逢ちを聞きにくる」とか良い句を作られていましたが、老齢になられたためか、時には平凡な句も作られるようになりました。しかしご本人は熱心なあまり自分の句が抜けないとすごくご機嫌が悪い。

「何んでこの句とらはらしませんか」

と路郎先生に訊ねられても、先生は一言の下でした。商売気のある人なら一句ぐらいはという気になるのですが、決して決して……

それが阪大川柳会と云うのは句集を出すにしても句会をするにしても、すべて柳秀先生と路郎先生とお二人で経済面からすべてお世話して頂いてたんですが、そんなことはかもてはれしません。いいものはいいい、悪いものは悪いと少しも妥協されませんでしたね。」

松坂倶楽部の指導スタイルは、どこか江戸の点将様式に似ていると評した人もいたとある。有恒倶楽部の有恒川柳会も同じ十一月にスタートしているが、これも松坂同様の指導様式をとっていたらしい。プロ川柳家として世に立つ路郎の矜持がよく示されているよう『川柳雑誌』No 313 (昭和二十八年 所載の

「眼の散歩」に高鷲重純に誘われ、住吉の日本将棋連盟関西本部へでかけ、高段者の対局を観戦したあと、つぎのように書いている。

「ここで川柳のことにつづる。川柳に於ても、玄人と素人では作句態度が違わなければならぬ。川柳で玄人だと云える人は幾人もいないかも知れないが、玄人のいないところにその道の発展向上を期待することは木によつて魚を求めるよりもなおむつかしいことだと私は思っている。

川柳に長く携っているからと云つて必ずしも玄人だとは云えない。というのは隠居のザル碁に等しい川柳家が、そこらにいないとは言えないからである。といったからといって私は決して玄人を尊しとし素人を卑しいとしているのではない。玄人は玄人としての鏤骨彫身の修業をし、素人は素人としての立場に立つて道を楽しむ態度を明らかにすべきではないかといいたいのである。玄人顔をして一向勉強しないのと、素人が玄人顔をしてノサバルのとは共に鼻持ちならぬというのである。将棋の一駒動かす毎に一考、また一考することは、川柳の作句においては推敲また推敲に当る。ろくに推敲もしないで名句のできる筈はない。」

川柳の玄人を自任する路郎の意欲を示す例につきの一文がある。『川柳雑誌』No 425

(昭和37年)の「作句以前」と題する吉川雉子郎について語つたものだ。抄録しておこう。「明治末葉のことである。」

東京の柳界に喜音家古蝶、平瀬鳶雄、吉川雉子郎という巧い川柳人がいた。この雉子郎が後の大衆作家吉川英治であることは一般には知られていない。(中略)古蝶は古調に通じるし鳶雄は写生を得意としたが、雉子郎は彼が若い頃に名めた苦勞の結晶ともいふべき心理的な作品だった。(中略)私が吉川英治の作品を一つも読んでいないといえは嘘のようだが、彼の作品だけでなく終戦以後、イヤもつと以前から日本の小説は耽読しないことにしている。その理由は簡単だ。自分のことに忙しいからだ。それに小説の地の文や会話など読んでみると、そんなことなら川柳で一呼吸ですむのにと思うとイライラしてきて読んでいく気がしなくなるのだ。(中略)私としては作家に対してもその努力に対しても敬意は表しているのだが、私の場合、右に述べたような感情が動くのをどう庄さえるすべもないのだ。

彼の作品を読まなかった弁明が、自分の心境を語る破目になったが、彼が彼の道を行つたように、私は私の道をまっしぐらに行つていたので、彼の作品をのぞき見るひまがなかったというのが判りがいいだろう。」

愛染帖

波多野五楽庵選

和歌山市 福井 桂香

望月へベンペン草の願いごと
めだか孵化 句読点なる形して
やるせない吐息に光る雨蛭

富田林市 池 森子

愛はいま流され易き貌をして
十指皆開いて雨期を掬わんか
どつぷりと雨期に溺れた紫陽花よ

大阪市 神夏磯典子

のみ込んだジョークに針がついていた
丸つける答に情が見つからぬ

弘前市 高瀬 霜石

水たまり抱えてみんな生きている
竹とんぼ赤ちようちに吹き溜まる

和歌山市 桜井 千秀

無期懲役の椅子で余生がままならぬ
目と耳がこんがらかって無駄を買っ

和歌山市 木本 朱夏

薔薇園に神の宴の始まりぬ
コピーばかりの街で仮面がよく売れる

東京都 やまぐち珠美

神さまが靴踏んじやった脱げちゃった
食った女の髪で胸やけしたい鬼

弘前市 斉藤 嘉

日曜はのんびりしろと薔薇の雨
桐に花 母校の校歌口ずさむ

和歌山市 西山 幸

人の名は忘れたままで梅雨に入る
言い訳の多い日記になってゆく

吹田市 山本希久子

安定剤 所詮ひとりの雨の音
満天の星もないものねだりしています

西宮市 門谷たず子

生き下手で指から逃がす風ばかり
向かい風とに角歩くことにする

大阪市 前 たもつ

問題意識持たずに生きて五十年
滅びゆくヒト科侍つてアブラムシ

米子市 木村富美子

手さぐりでバランス取っている迷路
胸張って進む此の子が続くから

堺市 山本 半銭

山の気を吸って寒山拾得図
筈も私の恋も今が旬

羽曳野市 濱口 フジ

紫蘇の紅 私も昔は負けぬのに
紋白蝶 わたしの親はもう居ない

松原市 小池しげお

落日や驚くほどの事もなく
藤井寺市 太田扶美代

鳥取県 西原 艶子

美しい雲よイラクを見ておいで
雨蕭々おまえの罪を責めている

交野市 田岡 九好

その次のその次だつて僕じゃない
防ぎよう無いのでしつかり手を洗う

四条畷市 吉岡 修

戸籍謄本 元の二人になりにけり
昨日今日明日へとつなく足の裏

和歌山市 玉置 当代

インターンと呼吸が合わぬ聴診器
横書きに馴染まぬ母の楷・行・草

弘前市 高橋 岳水

昨日今日明日へとつなく足の裏
インターと呼吸が合わぬ聴診器

海都市 三宅 保州

フィルターをかけ現実を霞ませる
捨て石となつた奈落の落ちこぼれ

鳥取県 岩崎みさ江

停年離婚そして未だに分らない
名城の驕りを喰う蟻の穴

大阪市 板東 倫子

花葛蒲 孫のうなじが透きとおる
蔓珠沙華咲いて女も秋が来る

京都市 都倉 求芽

蔓珠沙華咲いて女も秋が来る
花葛蒲 孫のうなじが透きとおる

和歌山市 青枝 鉄治

蔓珠沙華咲いて女も秋が来る
花葛蒲 孫のうなじが透きとおる

鳥取市 録沢 風花
散り際の美学を知らぬ紙の花

大和高田市 鍛原 千里
万華鏡どれがほんとの私やら

西宮市 西口いわゑ
さらさらと男友達 女友達

岡山県 山本 玉恵
ころ合いは未完であけた玉手箱

米子市 白根 ふみ
人さまのスポットライトばかりみる

愛媛県 黒田 茂代
的を射た言葉急には出てこない

出雲市 伊藤 玲子
タイムリミットまだ未使用の明日がある

高知市 小川てるみ
まだ欲が頭もたげる葱坊主

弘前市 一戸 ツネ
駅馬車の嘘に迷うて動けない

富田林市 中井 アキ
石蹴って私の立場変えてみる

姫路市 服部 一典
何も出来ぬのに妻に先立たれる

倉吉市 野口 節子
通夜の席 本音隠したのが一人

弘前市 櫻庭 順風
わくわくとスラロームする日のカルテ

唐津市 宗 水笑
晩節を曲げることない葱坊主

堺市 矢倉 五月
深読みは伏せてニコニコ顔でいる

八尾市 村上ミツ子
貸してくれ言うてないのに断られ

富田林市 片岡智恵子
振り返ると過去は薄れてゆくばかり

茨木市 藤井 正雄
子の夢と親の願いにある段差

米子市 林 瑞枝
螢追う話題の尽きぬ姉いもと

唐津市 田口 虹汀
百に手が届いていても弟子は弟子

唐津市 仁部 四郎
式場をこぼれた花輪胸を張り

唐津市 樋口 輝夫
発言はせぬがおしゃべりなら負けぬ

出雲市 園山多賀子
自分史に修正液が欲しくなる

武蔵野市 亀井 円女
燃えてます弾けもしますまだ八十路

弘前市 福士 慕情
松茸の穴場そろそろ子へ譲る

黒石市 相馬 一花
土壇場で可憐な主婦の力痛

弘前市 岡本 花匠
焦げ臭い話にしじみ噴き出した

倉敷市 井上 富子
流行にそつぽを向いてマイペース

和歌山県 辻内 次根
優しいさの雨の記憶に浸る時

橿原市 安土 理恵
あじさい寺去年とちがう傘と行く

和歌山県 武本 碧
幸せの大きき計るマツチ箱

鳥取市 岸本 孝子
草の根を分けて探した嫁なのに

八尾市 吉村 一風
いい人と言われ何だか肩がこる

寝屋川市 森 茜
とろろ汁はたばたと返事する

吹田市 岩屋 美明
コンビニが似合うセンスの夫です

豊中市 櫻谷 郁子
忌はめぐり螢悲しい八月忌

横浜市 長島亜希子
思い入れあつて遺品が片づかぬ

鳥取市 大坪 天涯
足組んで腕組んで寝たふりをする

米子市 中井 ゆき
マジシャンになつて庭中花さかす

八尾市 井尻 民
不本意なジョーカー一枚手の中に

奈良市 乾 春雄
ぴかぴかの靴は怖さをまだ知らぬ

鳥取市 福田 登美
わが歳に似合つた絵の具溶いてみる

大阪府 澤田 和重
傍目には優雅に見える独り者

高知県 桑名 孝雄
生類憐れみペットが甘い貌でいる

東京都 播本 充子
失恋をすると必ず風邪をひく

故里の土は靴まで軽くする
弘前市 中山 雅城

ジীবンの穴が歌っている若さ
枚方市 海老池 洋

選りに選つて乙姫様のお氣にいり
出雲市 石倉美佐子

瓢箪のくびれが不満溜めている
鳥取市 岸本 宏章

古時計もわたしも動く家のため
鳥取県 田村きみ子

憲法へ暑中お見舞申しあげ
羽曳野市 徳山みつこ

酒やけと日やけへ癌がしのび寄る
倉敷市 撰 よし子

もしもという前置きをして聞かされる
池田市 栗田 久子

優しさの言葉で聞く貝の蓋
和歌山市 上地登美代

いやな事ばかり覗いた他人の眼
鳥取市 田村 邦昭

飲みたくはない日も爛をつけたがる
横浜市 金森 徳三

一病を宥めすかしている笑顔
香芝市 大内 朝子

丁寧に関店知らせ老舗消え
大阪市 岩崎 公誠

支持率が少なくなった誕生日
寝屋川市 太田とし子

利があると読んだかすぐに畳みかけ
和歌山市 喜田 准一

一言で漸く解けたわだかまり
大阪市 鈴木トヨ子

ポツクリ死が夢とは夢のない話
札幌市 三浦 強一

どう結果出しても若返りはしない
砂川市 大橋 政良

ふところの深さを読んでいる懺悔
藤井寺市 高田美代子

一呼吸置けば素顔が見えてくる
富田林市 大橋 鐘造

打ち解ける心の隙間空けておく
吹田市 太田 昭

過去形に変わった夢の設計図
和歌山市 山口三千子

転んでも起きる意地なら持っている
和歌山市 松原 寿子

子の別居 今更慚愧なぞしない
鳥取市 吉田孔美子

殻を脱ぎ素直になれる夜の静寂
尼崎市 長浜 澄子

現実はいつも理想へ向きたがる
泉佐野市 稲葉 洋

一段落するたび心まるくなる
和歌山市 吉村さち子

生きている迷惑かけて僕が居る
熊本県 高野 宵草

許そうと思う眼鏡が重くなる
寝屋川市 江口 度

寝て一畳だけでは済まぬ家族もち
鳥取県 竹信 昭彦

老人を孤独にさせるカタカナ語
鳥取市 美田 旋風

本堂の風と座っている模索
和歌山市 古久保和子

戦争を知らぬ男の負け戦
美祿市 安平次弘道

戦争を語る八月の太陽
八尾市 高杉 千歩

戦争の傷跡癒えぬモンペ服
高知県 西森 善蔵

生かされてみな御仏の傘の中
竹原市 正畑 半寛

激怒することも少なくなり老化
唐津市 坂本兵八郎

うかつにも昨日の波に責められる
横浜市 近藤 道子

用のある時に限って留守電話
今治市 渡邊伊津志

農継がぬはずだ判らん本並ぶ
三田市 北野 哲男

誤魔化した結果がもろに跳ね返る
愛媛県 花岡 順子

つつ かあの仲の夫と暮らして
三田市 石原 歳子

逃げ道へ妻と子供のパリケード
倉吉市 淡路ゆり子

都合よいことだけ聞いて安堵する
鳥取県 上田 俊路

先頭がわからないけど先ず並ぶ
和歌山市 福本 英子

誹風柳多留二四篇研究 57

粕谷長生・山田昭夫

伊吹和男・大野秀二

小栗清吾・橋本秀信

清 博美・佐藤要人

439 じやうかこわいと捨うる奈納寺

粕谷 じやうかこわい「情が強い」は、他人の意志や感情に動かされず、自分の考えに固執する。強情である。(広辞苑)

句は、悪仲間が正燈寺へ行くついでに吉原を誘う。少し位「俺はいやだ」と断わつても、たいていは「まあそう言わずに、これも付き合いだから」と、付き合わされる事が多い。ところがあまり頑固に断わると「あいつは付き合ひにくい奴だ」と見捨てられてしまふのである。

松洞寺こ、迄来テといふところ 安元満1
松洞寺むこいへどうも 安三仁2

小栗 聲の句ではないか。生活信条として吉

原へ断固としていかないのではなくて、そうせざるを得ないのである。それを「弱虫め」といわないで「情が強い」といつて捨てておいて、吉原へ行ってしまう光景。

そつこわいものかとむこをかへすなり

なき出スハはなしてやれと角田川 安四義4

清・佐藤 小栗説贊。

安四義2

440 欲の世の中持参に先ンがあり

粕谷 金目当てに嫁を貰うなど、世の中広しと言えども俺ぐらいと思つていたが、あいつにあの嫁がとつぐとは……、あいつも欲に目が眩みやがったか。

伊吹 「先ン」は「先約」。背に腹はかえられないで、持参金付きの醜女を貰おうと思つていたが、その女に先約があつたとは、全く欲の世の中。

小栗 「先」は「他人より先に事をなす」の意。欲が優先する世の中だから、多少の美人よりも持参金付きの娘の方が先に縁付く、の意ではないか。

橋本 伊吹説贊。ところで礎稿の「嫁がとつぐ」は解せない。女或いは娘と思つが。

清 伊吹説贊。「先ン」は先約の意。

佐藤 同。

441 ぞうにと素麵貳百が物ハ喰い

粕谷 百檀那の句である。「百檀那」とは「盆暮や法要のときなどに、寺に百文ぐらいのお布施しか出さない檀那」(『国語大辞典』)の事である。「貧しい故のつつましさもあるが、多くは各ん坊のため云々」とは「辞集」の説明。

百檀那は各ん坊のため、お布施も一度に百文程度しか出さないが、あきれた事に少しでも元を取り替えようと、寺でこ馳走になる雑煮(冬)や素麵(夏)を驚くほど食べる。それを「二百が物を食い」と簡潔に表現した句。

百目那そのくせ地藏程くらい 明八札6
げつふうと門シを出るの八百目那

橋本 賛。元を取るところか倍は取る。

清・佐藤 同。

442 むこいこと後家のへ紙で鼻をかみ

山田 延紙は「縦七寸、横九寸ほどの小形の杉原紙。江戸時代、ぜいたくな鼻紙として用いた」(「広辞苑」)というものだが、これの上質なのが御簾紙。共に閨房の華紙として用いられた。

夫に先立たれ空闊を託つ身には、延紙も文字通りの鼻紙。この句は、後家の遣る瀧ない姿を描いて余りあるが、それは誠に「酷い事」であらう。

胸中や如何に。吐息が聞こえるような名句である。

ゆい言シは第一後家をたてろ也 明五核1
その当座うつて後家の起ス声

若後家ハはり合も無い湯を遣ひ 宝十一義2
宝十二満2

清・佐藤 賛。

443 殿様へあたゝをすえに国家老

山田 「あたた」は「灸の小児語」(「日本国語大辞典」)。

女狐にでも騙されて政務を顧みない殿様に、灸を据えに国家老の出番。

まるで子供みたいな殿様を表現するに「あたた」。

国家老にがい葉りをもりに出る 安4信1
国家老殿と浅黄をしめにくる 九26
うんとすんともいわせぬ国家老

安四札2

清・佐藤 賛。

444 一ツ子出家すれハ鳶しらみぬけ

山田 鳶風は「つびしらみ」の変化した語で、陰部に暮す毛虱のこと。なかなかオツな昆虫だが、これにたかれると大変難儀するとは経験者の談。

色男どこでしよつたかとびしらみ 末初4
これには水銀軟膏が特効薬だが、当時は彼等の住処を除去するより方法が無かったようである。

本句、俚諺「一子出家すれば九族天に生ず」の文句取りで、頭髮ならぬ陰髪を剃り、「一

子」を「出家」させた功德で抜虱出来たという次第。

らせつするやうにかまへるとびしらみ

明二義7

剃りにくい所を鳶ハ出家させ

宝九満

へのこにもかわらけの有ルとひしらみ

二〇38

清 賛。戦後、小生が小学生の頃、皆虱で苦勞した。DDTという白い粉末の薬で駆除した。たかる場所は違ってもこのDDTなら効いたはずなのだが。このDDTも早忘れ去られた。

佐藤 賛。

445 意地つくて女房鯉をなめもせず

山田 江戸ツ子に初鯉、まさに狂気の沙汰。「女房を質に置いて」なんて、女房を何と心得る。そんなもの意地でも、食うは元より「舐めもせず」は当たり前。

その面うてからしをかけと亭主言イ 二九32
寒い時おまへ鯉を着られるか 七三18
初かつは女房に小老年いわれ 一五5

清 賛。初鯉をべらぼうな値段だった。不粹な話で申し訳ないが、冷凍技術がなかった為。佐藤 賛。

尚香のむ

政岡日枝子選

新樹の下で汚れた刻をさらけだす

寝返りを何度打ったか紙人形

やさしさが集まって額紫陽花になる

神様の死角にひとつ負の絆

泣き寝入り割り切れぬ日の二十五時

老いて今まだ何やらを待っている

寝返れば元に戻れぬ位置となる

塩壺に塩を補う姑がいる

抽斗へあの日の自信入れ忘れ

部屋からは見えない穴もあるんだよ

合掌がおのずと深くなる余生

七十の折れ線なかなか戻らない

鬼になろうとなろうと厚化粧する

生きている証からくり解きながら

幸せをひとつ挙げれば友がいる

あつてかん野原は何もかくさない

醜さは見えないで生きたる半跏思惟

見上げようだれもが帰る広い空

連れあいという響きよし梅雨晴間

米子市 白根 ふみ

鳥取市 徳田ひろこ

和歌山市 福井 桂香

富田林市 中井 アキ

藤井寺市 高田美代子

藤井寺市 太田扶美代

池田市 栗田 久子

富田林市 池 森子

和歌山市 西山 幸

米子市 澤田 千春

米子市 野坂 なみ

大和高田市 鍛原 千里

寝屋川市 太田とし子

富田林市 片岡智恵子

東京都 播本 充子

米子市 中井 ゆき

箕面市 出口セツ子

米子市 青戸 田鶴

西宮市 牧渕富喜子

一二度は私もあつた晴舞台

甘い水呑んだ蜜はよく光る

ご機嫌で鏡の裏も拭いてます

熱中をする彩に会い今を画く

思い出し笑いだろうか百済仏

絵三昧 消化不良がつづきます

引き際と想うからこそ距離を置く

春夏秋冬 母の余命をおしはかる

雑草が幸せそうな欠伸する

甘い言葉に飼いならされた猫がいる

倦怠期 少し遠慮がなさすぎる

遅咲きの花が一際馨しい

売れ残り寿司煌煌と回つてる

甘かったけれど後味のいい誤算

いい話告げたい人が家にいる

ロゼワインの色で心が揺れている

かく紫陽花すき間隙間にある慕情

人間でいる幸せよ花の下

思い込みすぎて歯車噛み合わぬ

子も孫も遠く洗濯機のあくび

通信網心の距離を近くする

とにもかくにも終着駅は遠くない

願いむなしく誕生日忘れられ

薄味のままで終るかお友達

和紙のやさしさ雛人形を眠らせる

堺市 矢倉 五月

米子市 木村 春枝

弘前市 一戸 ツネ

米子市 木村富美子

和歌山市 古久保和子

八尾市 高杉 千歩

和歌山市 松原 寿子

吹田市 山本希久子

松江市 川本 畔

米子市 門脇 晶子

和歌山市 福本 英子

香芝市 大内 朝子

大阪市 鈴木トヨ子

橿原市 安土 理恵

羽曳野市 徳山みつこ

八尾市 生嶋ますみ

堺市 西村りつえ

羽曳野市 吉川 寿美

尼崎市 長浜 澄子

鳥取県 石谷美恵子

米子市 林 瑞枝

尼崎市 春城 年代

八尾市 宮崎シマ子

寝屋川市 籠島 恵子

熊本市 永田 俊子

息子より松井の話題多くなる
老人を甘くみるなよ金はある
衣がえ傘寿にもある洒落心
文明が話したい子の舌を抜く
座を蹴った男の背に燃えるもの
締切へ全力疾走するアタマ
ライラック咲き匂いける北の国
振り返る過去が視野から遠ざかる
もどらない時へ自問自答する
迷いから覚めて星座のかがやけり
雑草に不毛の土地は無いらしい
失意の日波のうねりに身をまかす
生きている証リフォームくり返す
笑われた場面がモノクロで残る
もう少しおまけに生きる一二年
情念を洗って流す春の雨
賢いと言われてからは落着かぬ
あり余る時間に真進まない
大法螺を吹いてさみしい影法師
いい風が吹いてわたしも晴れてくる
ストレスを廃棄処分にしてもらう
上弦の月にリハビリ励まされ
蝶々羽化 挨拶なしに翔んでゆく
なんとなく好きだから好き理屈ぬき
胸底にまだ塊がある未練

横浜市 長島亜希子
倉吉市 米田 幸子
八尾市 中島 春江
鳥取県 佐伯 やえ
倉吉市 野口 節子
横浜市 川島 良子
富田林市 古田 千華
鳥取市 録沢 風花
和歌山市 山口三千子
今治市 塩路よしみ
和歌山市 桜井 千秀
神戸市 田中 章子
堺市 桜沢 千世
和歌山市 榎原 公子
松江市 兼本 政子
横浜市 近藤 道子
鳥取県 岩崎みさ江
横浜市 芦田 鈴美
鳥取市 永原 昌鼓
和歌山市 吉村さち子
神戸市 山田婦美子
大阪市 星野さらり
東京都 岸野あやめ
柏原市 永浜加津子
倉敷市 井上 富子

追従笑い少しテンボが狂い出す
口紅を少し濃くする朝の雨
裏声が地声になった天邪鬼
何くわぬ顔で冷汗かいている
友が病みころに雨が降り続く
シャボン玉風の姿のままで舞う
耕運機競い合つて五月晴
いい子こつこなんて長くは続かない
あるはずが出て来ぬイラクの捜し物
祖国への未練は言えぬ親不孝
すりへった女心に塗る薬
この円い地球にそむきいがみ合う
婦人部の集いにルージュ控え目に
合掌するとあなたの顔が見え
子が四人ただだけで褒められる
惚けた振りもしてかあるく身を躲す

ふみさんの句―推測の出来ない汚れた刻を様々に想像させてくれる陰影のある句である。山帽子の白い花の下での草取りと受け止めるか、深読みして意味深長と受け止めるかは自由であろう。ひろさんの句―幾度の寝返りにも首も壊れず、手足を腕がれる事なく息をしている人形。クリアしてきた歳月をふりかえる作者の心情が想像できる。桂香さんの句―梅雨たから紫陽花に眼が行つたのではなく、作者の優しさの的確で軽妙な形容に詠まれたのであろう。この地味な彩の中の何かが癒しの原点ではあるまいかとも思う。アキさんの句―負の絆と言えは重いものがあるが、ちよつとしたウィットだと思えば、何でも大風呂敷に包んでも死角や伏角に隠しておおらかにくらす。いつまでも持たないという強い個性を感じさせる句である。

出雲市 團山多賀子
八尾市 井尻 民
和歌山県 森下 順子
生駒市 飛水ふりこ
鳥取市 岸本 孝子
芦屋市 黒田 能子
海南市 堂上 泰女
愛媛県 黒田 茂代
大阪市 板東 倫子
アルゼンチン 松井美稚子
鳥取県 土橋 睦子
寝屋川市 堀江 光子
鳥取県 西川 和子
三田市 久保田千代
三田市 石原 歳子
大阪市 三浦千津子

鱗

上田 宣子選



リリーフに鱗かがやく外来魚
星のような鱗でいたいど真ん中
欲という糊で付いてる目の鱗
目の緑の鱗一枚持て余す
裏ワザで時どき落とす目の鱗
ハローワークいろんな鱗落ちている
下積みが長く鱗が厚くなる
包丁はあるが鱗は剥がせない
てこずった鱗わたしの爪欠ける
鱗ない魚に慣れてくる怖さ
老眼に鱗がピタリ貼りついた
目の鱗落ちないままに黄昏れる
年金の鱗一枚はがされる
一人居の鱗だんだん固くなる
聴聞やこころの鱗剥がされる
しゃちほこの鱗一枚盗るロマン
銀鱗の跳ねてくるうちに魚拓する
伝説の鱗残して消えた魚
センザンコウの鱗が欲しい四面楚歌
運命のいたすら今日も増す鱗
目の鱗剥がしてみどり濃ゆくする
人情の機微にやさしくなる鱗

黒 兎
きみ子
四 郎
登美代
千里
兵八郎
あずま
理 恵
みつこ
伊津志
正 剣
徳 三
典 子
花 匠
孝 雄
隆 盛
ちかし
勝 視
洛 醉
重 人

長居して鱗一枚置き忘れ
様々な鱗が落ちているロビー
こいのぼり巨大うろこの身をよじる
タイ焼きの餡がウロコを膨らませ
見せないが私も持っている鱗
バックはぐ大事な鱗のように
何枚目の鱗だろうかまた落ちる
逢いに行くときは光っている鱗
まっとうに生きるサンマの火の鱗
そつと触れて欲しい鱗のない私
逆鱗に触れた一語が芽吹きたす
二度とないチャンスに鱗立ててゆく
生ぐさい鱗だ生きていたんだな
組の鱗覚悟は出来ている
鱗一枚あれば鎧であったのか
佳
魚拓見て鱗があると知った鯛
タイ焼きの焦げたウロコのいい匂い
ストレスは厚い鱗の吹き溜り
爆発のはずみに落ちた目の鱗
いちまいの鱗と反省会をする
人
鱗だけ光って死んでいる魚
地
落ちてゆく鱗うすれてゆく自信
天
鱗から人魚姫までふくらまず
軸
ときめきを残す鱗の二三枚
出口セツ子

玉 恵
玲 子
英 旺
遠 野
一 壺
政 勝
洋 介
保 州
柳 弘
志 代
柳 代
鉄 治
はるお
美代子
あ
善 信
忠
主 二
ツ ネ
扶美代
霜 石
慕 情
あずき

耳

田中 みね選



耳揃え返って来ると信したい
助かった 耳を揃えて返します
耳を貸すだけで金はありません
ふさいでも耳は噂を聞きながら
均等法男もつけるイヤリング
知らぬ顔してるが気にはしてる耳
幸せな耳はいいことだけ聞こえ
耳栓をしても心の中の音
聞き役の私の耳は大きいね
耳底に残るリングの歌の頃
全身を耳にして聞くスキヤンダル
内情をそつと耳打ちしてくる
耳鳴りはわたしの味方いとおしむ
仕方ない耳でいろいろたまり過ぎ
かたくなに耳にふたする北の国
聞く耳は持たぬが舌は二枚ある
耳打ちをしにくる息がこぼれ
ストレスが溜まって耳は蟬しぐれ
噂好きの耳に入ったから困る
早耳が風が贈ったいい話題
福耳が徐徐にしほんでくる不況
耳に風連れもて飛んで行く記憶

輝 夫
三 夫
宏 章
倫 子
勝 巳
和 重
強 一
次 根
紫 晃
清 史
義 男
きみ子
天 涯
水 笑
鉄 治
玄 也
三千子
花 順子
さち子
圭 二
登美代

耳聾がもううんざりと言っている
内輪もめ外につつぬけ老夫婦
大いびき一度耳鼻科へ行かれたら
片方の耳が不幸を聞きながら
福耳の男も暮らす青テント
耳許へ孫のナイシヨはでかい声
難聴もやさしい声は聞きとれる
同罪になるかも耳を貸す内緒
聞きかじる耳が取り越し苦労する
図星たな耳がピクピク動いている
通り抜け自由の耳を持つている
老いて子へ素直になれぬ耳である
初耳と乗り出してくる聞き上手
耳もとでささやく秘書の知恵借りる
補聴器の耳とゆつくり老いてゆく

佳

人

地

天

軸

病床の耳は過敏になっている
耳鳴りは神の警鐘かも知れぬ
人の話しっかり聞けと耳二つ
耳もとで不手際そつと諭される

(志)

ヒサ子 時雄 隆盛 哲男 愁女 ミツ子 孝男 朝子 准一 茂代 志洋 雄々 扶美代 碧 瑩 高栄 徳三 尚士 美代子 保州 前たもつ

このころ

西村 哲夫選



筆まめもこのころメール打つてはる
このころはコンビニで足る夕ご飯
福の神このころ死んだふりしてる
ライバルがこのころ化粧濃くなった
このころの子供うっかり叱られず
このころの孫の理屈も筋とおり
このころはボチが夫を散歩させ
この頃は男言葉の若夫婦
所得えてさっぱりこない子の便り
握手してからの名前が浮かばない
このころは夫の方が炊き上手
このころは女が離婚口にする
氣にいった嫁がこのころ距離をおく
限界を知ったこのころよく眠れ
心配はこのころ妻が笑わない
このころは国旗を出せばいぶかれ
お転婆もこのころ化粧長くなり
娘に余生委ねて少し出る弱氣
このころは互いに惚けて波静か
このころの句を忘れた野菜たち
新法へ軍靴の音が響きたす
氣に懸かるこのころ減った父の酒

りつて 智加恵 秋星 フジ 富子 泰女 岳水 伊津志 宏章 典子 主一郎 鉄治 五月 尚士 茂代 隆盛 庸佑

このころの政治家正すえりが
このころの友は無口の万歩計
時代劇このころ正邪はやげがち
夢がなくこのころ空を仰がない
無視をされこの頃では口火切る
戦中を生きてはがゆい昨日今日
このころは笑い合つてる物忘れ
この頃の離婚男がうろたえる
元氣かな電話一本かけてこぬ
一呼吸おかねば頭ついてこぬ
新世紀大きな夢がなつかしい
モンゴルの国歌も欲しい国技館
遠くなり二度聞く癖がつかました
このころは風の読めない風見鶏
風邪抜けてゆつくり初夏の土を踏む

佳

人

地

天

軸

切り捨てた四捨がこの頃光り出す
近況を少しがざつて書く便り
このころは葉のための食となり
このころはだまされ上手生き上手
水菜ぐらゐの酒を試みる
この頃を語る老舗の閑古鳥
このころはメールとメモの夫婦仲
左遷地のお国言葉が理解でき
このころの女優はみんな同じ顔

英風 四郎 俊路 大鯨 たもつ みつこ 扶美代 半覚 一粋 あずき 強一 像山 順子 花順子 ヒサ子 栄子 不二 章子 哲男 雅城 遠野 福士慕情

初歩ノ教室

題一氣

三宅保州

六月号からに続いて麻生路郎祖師の名著「川柳とは何か」から、今月は「多読多作」について主旨を引用させていただきます。

「どうすれば川柳が巧くなるか、作句に対する質問はこれに尽きと思う。項目は幾らでもあるが、一番大切なことは常に川柳から心を放さないことである。これを具体的に云うと多読多作である。」「多読とは手当たり次第に読みさえすればいいと云う意味ではない。名吟と思う句や名吟と教えられたものを常に抜き書きした句帳を作り、繰り返し精読味読するのである。」「ドシドシ作句してみることである。常に作句をしていないと秀れた句はできない。そして作つた句を推こうしなればならない。しかも満足に纏まらない場合は潔く棄てることである。」

今月の題「氣」のように、漢字「字」の場合「氣」を使った熟語、熟字（氣候、元氣など

通常の漢和辞典で約百語も載っている）を詠み込むいわゆる字結びや、氣が合う、氣になるなど氣一字の使い方、氣高い、氣味悪いのように形容詞的な使い方など多種多様ですから、句材、句想も幅広く作れるものです。

【添削句】（原は原句、添は添削句）

原 氣を抜くなサースが日本睨んでる とき

標語としては良いのですが、川柳としては

原 心意気合は楽しい嫁姑 永子

「そうですね」という川柳を超える工夫を。

原 張った氣がブツリと切れた風邪ひいた 益子

添 氣を抜いた途端に風邪をひきました

原 お土産の氣持ちへ笑顔ありがとう 賢治

添 お土産をくれる氣持ちがありがた

原 氣前よくティツシユをくれるサラ金融 道子

添 サラ金もティツシユは氣前よくくれる

原 万景峰号美名の船は氣味わるい 邦柳

添 万景峰号名前は良いが不氣味なり

原 氣前よく婆さま孫へ金を撒く 美恵子

添 孫にだけは氣前良すぎるおばあさん

原 世の動き新聞見るも氣がかりで 郁代

添 氣がかりなニュースばかりの世の動き

原 デイケー互の氣質が生きている 公市

添 デイケー互の氣質庇い合い

原 進化する世も老いの身は氣にしない 孝明

添 進化する時代へ老いも氣忙しい

原 短時間預かる子守り氣が抜けず 智加恵

添 頼まれた子守り少しも氣が抜けず

原 再検査結果待つてる氣の重さ 弘子

佳句の「再検査言われただけでも病氣

好」との僅かの違いを吟味して下さい。

原 氣のせいとすました事が氣にかかる 稔

添 氣のせいにした症状が氣にかかる

原 氣にすなと氣になることを言つて去に 秋星

添 氣になること言つて氣にするなど言われ

原 お悔やみの記事を氣にする年になる 清

添 死亡記事とても氣になる歳になる

原 マスコットガールの若さ吸つて見る はじむ

この場合の見るは補助動詞ですからみると

かな書きます。「氣」の題の句と言えない。

添 マスコットガールの元氣もらいます

原 氣の良さがあたら出世を遅らせる いさお

添 出世などせぬが氣の良い夫です

原 二人の仲氣にかけてたが元のさや 綾乃

川柳としてはそうですか川柳。川柳的には、

添 好きだったお方の仲が氣にかか

原 介護され氣配り身にしみ笑顔薄く ゆきの

何もかも詠み込みすぎてゴタゴタ、

添 氣配りが笑顔になつて介護

原 今度こそやる気はあるが三日坊主 フジ
 添 またやる気の三日坊主を繰り返す
 原 若嫁といくと気疲れする爺さん 照彦
 添 嫁と居ると気疲れをするおじいさん
 原 元氣かのメールひと言あたたかい 満子
 添 元氣かのメールが何よりの励み
 原 氣遣いの要らぬ男で居てあげる 准一
 座五が平凡すぎませんか。一ひねりほしい。
 添 氣遣いの要らぬ男と煽てられ
 原 うちの嫁氣がつき過ぎてちと重い 円女
 添 よく氣のつく嫁に私も氣を遣う
 原 氣がつけば家風を變える若夫婦 節子
 添 氣がつけば家風を變えてくれた嫁
 原 氣の強い彼女にしつぽひげがある 真一
 添 氣の強い女演じて髭がある
 原 クラス会来ないあの子が氣にかかる 良一
 既に同想句が詠み古されているのが残念。
 原 幸せに氣付かぬ暮らしのうまい飯 雅代
 添 幸せに氣付いてますかうまい飯
 原 今の倅せジャム炊きながら氣づく朝 千華
 添 ジャムを炊きつつ幸せに氣付く朝
 原 氣が付けば妻もやつて俺の癖 善蔵
 添 氣が付くと妻も貧乏揺すりして
 【少し工夫すれば佳くなる句】
 氣遣いのひと言あつて救われる 英旺
 挨拶はお元氣ですか元氣です 志津子

リフレイン（繰り返し）は両刃の剣ですね。
 氣を持たせ張り合わせてる店のママ 章司
 許す氣で握り拳が喘いでる 信翁
 原 氣が付かぬ振りして女性専用車 勝久
 面白いが、公序良俗に反した句ですから、
 添 空いてると思えば女性専用車
 小氣味よい台詞残して紳士まる イセ
 一幅のドラマですが、具体性が欲しいもの。
 原 口だけが元氣で皆をけむに巻く よしこ
 添 口だけは元氣な振りをしているが
 原 歎持つと不思議と氣持軽くなる 利子
 添 歎持つた途端に氣持ち軽くなる
 氣負いすぎ同じ墓穴を掘っている
 【同じ】がわかりにくい。又もの意ですか。
 氣の抜けた返事は閉じたまま 侑子
 つらい時背すじ伸ばせば出る元氣 登志子
 氣のいらぬ幼馴染みのお付き合ひ 信子
 氣軽さがとてもうれし嫁と居る アヤ子
 「とてもうれし」を使わない工夫を。
 【佳句】
 宝くじ当たる氣がする人はかり 像山
 氣にかかるあの一言は何だろ 政子
 天氣予報聞いてはりきるハイキング 栄子
 氣が弱く金儲けには縁がない 時雄
 氣心の知らぬ間が花だった 利子
 氣に入った娘にはちよつかい出したがり

再検査言われただけでもう病氣 昌鼓
 好
 霧開氣に吞まれて声がうらがえる 大鯰
 氣の抜けたビールを飲んで二日酔 大鯰
 氣まぐれな風が夫婦を波立たせ 美弥子
 氣ばつてます八十歳が近いから 和友
 こたわりを捨てて氣ままに生きてます 栄呼
 同じことあいつが言うと氣に障る 洋介
 氣を付けて歩いていてもけつまずく こそえ
 義理ばかり氣にして自分見失う 弘之
 活氣ある店で元氣も買つて来る 裕花
 氣前よくご機嫌とりの餅をまく 敬之介
 戸締まりを氣にしたときは掛けてある 忠子
 腕角力本氣にさせる児に育ち つよし
 【今月の推せん句】
 価値観に狂氣が忍びこんでいる 田岡九好
 佳い川柳の一つの条件である意外性が、
 「狂氣」に表れ、価値観への風刺が効いている。
 何氣ない会話空氣になる二人 吉村幸
 【空氣のよう】でなく「空氣になる」が、
 おだやかな中にインパクトがある。
 恥ひとつかいて氣楽な痩せ蛙 木下敏子
 痩せ蛙は擬人法で作者の生き様が窺える。
 【私の句】
 氣を付けるただ一言の父性愛
 弱者というその考えが氣にいらぬ

秀句鑑賞

同人吟 新家 完司

17月号から

川柳の基本形は言うまでもなく、五七五の十七音。そのことを絶対条件として、厳しく守ろうとしている人がいる反面、「破調でも構わない」という立場をとる人もいる。

川柳は「前句付け」から始まった。前句付けは、連歌の練習として行われたのであるが、後に賞品を賭けた「大興行」となった。その方法は、七七の題に対して五七五の付け句を募集し優劣を競うもので、いわば、「賞品を賭けた言葉のゲーム」になった。ゲームは規則を厳格に守らなければ成立しない。もし、点者（選者）が破調句を秀吟とすれば、他の応募者から叱責や苦情が出るのは当然。

だが、現代川柳は、他者との競争ではなく、「己が想い」を表明する文芸。いわば、「他人からとやかく言われる筋合いのものではない」というのは、私の乱暴な見解であり、「破調でも構わない」を支持する所以である。テレビから貰った知恵で根付かない

西出 楓 楽

祖母から母へ、母から娘へ、丁寧な根気よ

く伝えられた生活の知恵は、いつか身体に染み込み、生涯忘れることはないが、「伊東家の食卓」の「ちよつとした知恵」は、スイッチを切ると同時に、忘れてしまう。

ベタジ二のような相手を探してる

藤田 泰子

あの精悍な顔、そしてパワー。「蓼食う虫も好き好き」で、他人の好みを云々するのは野暮だが、味方にすれば、これほど頼り甲斐のある男もいないだろう。タイガースもベタちゃんが休んでいる間に、どんどん貯金しておかなければ……

物忘れ歩いたあとを探してる

中居 善信

歳のせい、とは思いたくないが、探す時間が長くなってきた。今、必要な物は探し出さなければ先へ進めない。かくて、「あれをして、ここへ来て、それから……」と、己が行動の跡を辿らなければならなくなる。しかし、歩いたあとを辿れる間は大丈夫で、何をしていったかさえ分からなくなると、恐い。

かしわ餅もらって新茶買いにゆく

都 倉 求 芽

美しい日本の四季に合わせ、美しい和菓子がある。せつかく頂戴した柏餅。よりおいしく頂くために、薫り高い新茶を求める。食文化はこのようにして守られ続けるのだろう。

友だちと言われたくない人もいる

中澤 伽羅

いい人なら誰でも友達になれる、というものでもない。「いい人だが、生理的に合わない。友達にはなりたくない」という人も稀にいる。ここを聞くことができる少数の友、「生涯の友」は、自ずと限られる。

医者言う通りになった血糖値

加島 由一

生活習慣が悪く不摂生が続くと、生活習慣病になる。医者はプロだから、キチンと注意してくれるが、その注意を守るかどうかは、本人の意志次第。だが、うまい酒、うまい飯を控える目にするのは、なかなか難しい。

地方選終り赤ん坊よく眠る

井伊 東 吉

眠るのが仕事の赤ん坊にとって、選挙カーの蜜声ほど迷惑なものはない。迷惑を掛けたお詫びに、赤ん坊たちのためにも、いい政治をしてもらいたいものだ。

定年につべらぼうの名刺持つ

水野 黒 兎

肩書が付いていた名刺と比べると、名前と住所だけの名刺は、いかにも「つべらぼう」だ。だが、肩書が外れたということは、首枷も外れたということ。これからを楽しもう。

体調が悪くて嘘が弾まない

片岡 智恵子

何をやるにしても体調が悪いと、うまく事が運ばない。特に、嘘をつくことは、その嘘をカバーするために嘘を重ねなければならず、膨大なエネルギーと知恵が要るから、体調が悪い時は嘘をつかない方が無難。

洗脳されるほどわたくしは純でない

富山 ルイ子

裁判中の「オーム」。最近では、「白服の集団」。端から見ると「なぜ？」と不思議だが、そこに入り込んでいる者には、指導者の言葉が真実なのだろう。幸いにも「純でない」人は、まやかしの言葉を簡単には信じない。

童謡をうたって過ごすこともの日

村上 ミツ子

「花」、「鯉のぼり」、「夏は来ぬ」等、童謡や学校唱歌は、美しいメロデーと歌詞で、ここを洗われる。声を出して歌えば、遙かな故郷、懐かしい友の顔がよみがえる。

苦手なひとの横の席だけあいている

西内 朋月

自分が苦手な人は、他の人も同じように思っているのか、誰も近寄らない。しかし、その人の横しか空いてなければ、勇気を出して座ってみるしかない。付き合ひ難そうな外見に似合わず、案外シャイで内気な人かも。

コンビニの客は無口な人ばかり

古久保 和子

市場では威勢のよい掛け声、そして、店員と客との元気のいい会話があるが、コンビニでは事務的にマニュアル通り挨拶する店員と、一言もしやべらない客。思えば寂しい。

病む人がみれば馬鹿気たタイエツト

石谷 美恵子

食事も摂れず点滴でいのちを繋いでいる人から見れば、ただスタイルを気にしてのタイエツトは馬鹿気たことだろう。無理なタイエツトは骨粗鬆症になり、命を縮める。

正直な人であんまり人褒めぬ

牧野 芳光

褒め言葉と悪口を比べると、圧倒的に悪口を聞く方が多い。ということは、みんな正直で、長所を褒めるのが嫌いで、短所を貶すのが好きなのだろう。確かに、むやみに褒め言葉を使う人は、なんとなく胡散臭い。

人情に飢えて浪曲きいている

津川 紫 晃

まだテレビジョンが茶の間に入って来なかった時代。父の古ぼけたラジオから流れていた洪い声。銭湯へ行けば、どこかの親父が唸っていた一節。あの懐かしい浪曲の中には、忘れてはならない「人情」が詰まっていた。

念力をかけても開かぬビンのフタ

池内 かおり

湯に浸け、木槌で叩き、念力をかけても開かぬ頑固な瓶の蓋。瓶の蓋に限らず、老人や力の弱い人には開け難い包装は、思いやりに欠けていると言わざるを得ない。

カタカナ語どっちが歌手か曲名か

江見 清

カタカナの方が格好いいのか、最近の歌手名やグループ名には、アルファベットやカタカナがあふれている。もう少し、美しい日本語を、日本名を大切にして欲しいものだ。

弟に先立たれた老姉妹

春城 年代

女性の平均寿命と男性のそれとは、十年ほどの差がある。たとえ末弟であつても、弟の方が先に旅立つのは珍しいことではない。姉たちは優しかった弟の思い出を語り合い、互いに励まし合つて、辛さを乗り越える。

水煙抄

秀句鑑賞

17月号から

池 森 子

庭は雨、紫陽花の咲き乱れるを眺めながら
水煙抄の鑑賞をさせていただきます。

選句、そして鑑賞が少しでも皆さまの心に
響くものであれば嬉しく思います。

紙コップ握りつぶして怖くなる

石堂潤子

紙コップは使い捨てられるための最前線に
位置する。しかしどうもするとベツとリス
トラの首もその延長線上にあるかも知れない
と発想を抜けていったとき、その光景は殺伐
とする。一瞬でも切り捨てられたものたちが
再び（形はどうであれ）立ち上がったとき、
その反対側の主たちは：怖くなる。

価値のある男だ鈴をつけられる

千葉 武

私も作者と同じく鈴をつけたい人が：人
間的で価値観が同じで、ベクトルも同じだか
ら……。さあ鈴を五個くらい買うことにしよう。

春の譜が転げまわったサラタ盛る

土屋 起世子

春の譜とは決してハウス育ちではなく、ス
ロイイングストーリー（有機農法、四季感のあ
る生活）のことを意図していると思う。旬の
大地で太陽と風と遊んだ野菜はとても自然で
美味。スローライフの原点がここにある。

作り笑い張り付け今日も生きのびる

伴 洋子

作り笑いを張りつけ：がとてもユーモラス
で、シャープ。ときにはジョークを飛ばしな
がらその裏では懸命に生きている命の叫びを
聞いているような……。周りを心配させないよ
うに頑張るあなたがいる。

討死もこんなにみこと落ち椿

福岡 博利

庭の椿が三分咲きの頃からなぜか毎日気にか
かる。耳を澄ませているとドサツと落ちる
椿。未練を断ち切るように落下するあなたは
誰との約束でそんなに急いで落ちるのか。

正直に生きてルールのいろはには

松本 知恵子

一木一草この地に生あるものには陰に陽に
とルールがある。それを受け入れて生きるこ
とは簡単ではないらしい……。犬の散歩から夫
婦の暮らしまで：基本のルールがある。

余生蜿蜒やがて介護の荷を増やす

大峠 可動

少子高齢化の波高し、どうもすれば二子相
伝も風前の灯火となり兼ねない時勢の到来、
余生をのんびりとは行かない雲行きである。
何だかんだと増税の割には安心が買えない。
結局は老老介護の荷が増える？ 否、増え
ないことを願うばかり……。

時期待ちの安楽椅子は落ちつかず

松井 美稚子

大切にされ過ぎると、体も心も時として居
心地が悪い。ましてや期限付きの余命が、義
理義務か、そんな安楽椅子なんて……。

でも現実はそのなかに甘くないかも……。

海の色だんだん濃くなる故郷

坂本 兵八郎

亡父亡母がいたふるさと大きな海であり
心の揺りかごであった。そして歳月を重ねて
魂はふるさとへの距離を縮める。恋しさの度
合いで海の色は濃くて深くなるのです。

八十年走りつづけた影法師

鈴木 一弘

八十年もの間の影法師は自分か、妻か、母
か、それにしても影の支柱として主と伴走し
て来た歳月の何と尊いことか。その一点に於
いてこの作品に立ち止まってしまった。

バスツア

全日本川柳香川大会参加

西尾栞・橘高薫風

句碑めぐり

— 六月十四・十五日

西 口 いわゑ



栞前名誉主幹の句碑

6月14日(土)、大会参加のメンバー41名、神姫バス一台をチャーターして午前10時大阪を出発、幹事さんは、坊農柳弘さん、北野哲男さん。バスは阪神高速道路を淡路島へと走る。車中では岳人理事長の挨拶に続き、薫風名誉主幹のおはなし。白鳥町の句碑の句を決められた由来など、ユーモアたっぷりのお話

に拍手と笑いに包まれ、飲みもの等も配られ一層和やかな車中になりました。

ガイドさんの名調子に耳を傾けながら、明石海峡大橋(世界で一番長い吊り橋)を渡り淡路島へ到着。「みさき荘」にて昼食後、再びバスで一路四国の白鳥町中央公園へと向かいます。約一時間で到着、木村あきら氏始めおっぱこ吟社の皆さんに賑々しく迎えられ、薫風先生の句碑に再会です。

「島ひとつ買うて暮らせば涼しかる」の句碑は薫風先生の風貌にふさわしくすつくと聳え輝いています。当日は生憎の雨にて見晴らしの悪かったのは残念でしたが、緑したたる句碑の前で先生を中心に代わるがわる撮影が行なわれました。公園内には木村あきら氏の「自画像に少し笑顔を書き足そう」工藤隼笑氏「余命など考えなしに種を播く」お二方の立派な句碑もすぐ近くに建立されており案内して頂きました。

バスは再びおっぱこ吟社の車の先導で白鳥温泉の西尾栞前名誉主幹「温泉や座り羅漢に寝る羅漢」の句碑見学へ。栞先生の長女の中南杏子さん、次女で同人の古今堂蕉子さんも参加して居られ、私達以上に万感胸に迫る思いがあった事と思います。句碑の前で撮影を



薫風名誉主幹の句碑の前で

終えた後、すぐ側の休憩所でおっぱこ吟社の方々に茶菓の接待を受けはっとし全員にお土産までいただきました。

再びバスは今晚宿泊の「新権川観光ホテル」へと向かいます。4時30分頃到着、薫風先生以下6名は日川協主催の前夜祭へ出席されました。参加しなかった34名は当ホテルにて懇親宴が行われました。和気あいあいのうちに時間となり、それぞれの部屋で明日の大会の句を見直し、いい夢を見ながら眠りました。



酒井輝先生を偲んで

島 　　ひかる

二〇〇三年五月二十九日夜、柳友の増田紗弓さんから酒井輝先生の訃報を知らされ、急いで二十七日の北日本新聞を取り出し、改めて見ました。

「酒井輝（さかいてる）元富山市広田小学校長。二十六日、午前三時十七分、肺炎のため東京都国分寺市の国分寺病院で死去、八十五歳。自宅は国分寺市本多二の六の五メゾン・ドール萩二〇二、通夜は二十九日午後六時、葬儀は三十日、午前十一時から喪主は妻ミサ子さん」と記され愕然としました。

昨年十一月「喪中につき年頭のご挨拶をご遠慮申し上げます」と住所変更の葉書が届き、慌てた私。輝先生への電話でお声をお聞きましたのが最後となりました。

奥様を亡くされ、心配された息子さんの要望で息子さんの近くのマンションに移られた事を、話していらっしゃいましたのに……

そして暮には「川柳人協会史」・「蒼い群

像」を送って下さり、今も川柳史のとても良い勉強をさせて戴いて居ります。

昨年夏には「八月号を見て、今年の川柳塔まつりの兼題選者の大役に当られる事を知り、心からお祝い致します」と、お心温かいお手紙に勇気付けられ、背を押して下さる思いがしました。

数年前の夏「富山県で川柳塔の会を立ち上げましょう」と輝先生の思いが便箋数枚に書き綴られて届きました。その時私は眼底出血でレーザー光線治療をしている最中で、とてもそれ所ではない状態でした。どんなにか残念だった事と申し訳なく思っています。

輝先生は少年時代を神田に住まれ、近くの寄席で落語の落ちの部分、言葉の巧みに活かすのに魅せられ、新聞・雑誌の川柳を読み投句されるようになりました。そして届けられた一冊「川柳雑誌」で麻生路郎先生作品に出合い、川柳観が変わり「人間陶冶」のた

めの川柳を自覚されたのは昭和十二年でした。輝先生の青年時代の作品に

こころみに春の広さを這うて見よ
きつかけに下を出られる恐ろしさ

銀座にも番地があつた裏通り

等があり路郎師に心服、昭和二十三年に生まれた長男を「路朗」と命名されたはずです。

戦後長い間「川柳雑誌」への空白の年月を経て、野村太茂津先生に路郎先生に師事されたベテランの柳友として川柳塔社に迎えられ、橋高薫風先生の御援助で、今日まで川柳による人間啓発に努められ、感性豊かな句を沢山残しておられます。

三月号が川柳塔へ最後の投句となりました。

光り物つけずに妻が美しい

ポストまで歩ける幸に気付かない

里の子になって泥田の温み知る

おやすみのそれから長い母の夜

横文字を唄い会話のできぬ歌手

平成十一年九月号No八六八に「エッセーと川柳」に記されています。

僧侶曰く！「故人を偲ぶことは仏の供養に

なり、自分のためにもなる」

是非、再読のほどを……

最後に謹んで心より御冥福をお祈り申し上げます。

合 掌

本社 七月句会

七月七日(月) 午後五時半
ア ウ イ ー ナ 大 阪

梅雨前線はどつかりと居すわり、傘の手にせぬ空模様が続く中、路郎忌本社句会には、番傘川柳本社他、多数の参加をいただき、133名の盛会となった。

はじめに先日亡くなった同人の酒井輝・西沖彰雄・松本ただし三氏の冥福を祈り、黙禱を捧げる。

お話は、河内天笑主幹の路郎忌に因むものであった。路郎師の亡くなった翌年から川柳を始め、お会いしたことはないが、その句に心酔し、作品を読んでいると、時の経つのを忘れてしまうという。

宝のように持っている路郎師自筆の掛軸を披露し、プリントにした作品を鑑賞しながら人柄をしのび、川柳の真髄に触れた30分であつた。

月間賞は川端一歩さん(大阪市)に輝く。

(司会)玄也 (記名)月子・恵子
(受付)養子・扶美代 (清記)尚士

席題「空」

森中恵美子選

路郎忌の空を願いが駆けめぐる
朝焼けの空いいことがありそうだ
復職の空へ呼吸を整える
空高く夢も広がる母子手帳
物干し場の上にわたくしだけの空
血なまぐさいことが多いと空は泣く
夕西カラスに帰る山がない
梅雨空にハーブの小瓶持ち歩く
彦星が胸ふくらます笹かざり
阪神の優勝の日はきつと晴れ
信仰に生きる火花も故郷の空
コンチキチン京には京の空がある
おいしい空僕は言いたいことがある
梅雨空に座りつづけるモノトーン
おーい人間空はこんなに広いんだ
前髪をすっきりあげて空あおく
古都の情けで紫陽花寺の空は雨
射手座生れわたしの空の指定席
星流る彼方の人を膨らます
プロポーズされた日の空澄んでいた
怖いとは洒落にもならぬ空の旅
空と海交わる辺にある答
大空をながめ研究心募る
ガン告知それが鉛色の空
究極は人を許さぬ空の青
うさんくさいニュース雷を落す
偏西風飢餓の国にも同じ空

照 雅文 一風 寿美 義子 恭昌 能子 アキ 英子 いさむ 章久 ダン吉 (田)節子 いわゑ 篤子 元紀 義子 完次 弘風 (田)節子 楓楽 千代 たつお 真理子 幹齊 求芽

嬉しくてまた悲しくて空仰ぐ
抜けるような青空妻と腕を組む
新しい東の空が好きな窓
見上げてこらん空のどこにも嘘がない
ケータイを捨てて気付いた空の青

空を見る男によう喋るおんな
大空の真ん中へんに父の椅子
お隣の空はいつでも晴れている
空を見ないと決め生きやすくなった
七夕や銀の雫をてのひらに

美しい空だ笠智衆がいる
地 天 大空をつつく一面エピソード
青空になるまで辞書を繰っている
男の手を放すと空が広がる

兼題「エプロン」 高田美代子選
エプロンの似合う男で芯がない
エプロンが歩いてくる給食時間
どしゃ降りのエプロン目下別居中
青い目のママエプロンが良く似合う
十人の子育てたエプロンの自負
エプロンが脱げず自立のない女
エプロンが似合う男の塩胡椒
エプロンきりり妻の有事でございます

伽羅 完次 求芽 弘一 朱夏 義太 鹿太 大輪 良祐 美代子 真理子 扶美代 大輪 諷云児 冬葉 幹齊 なきさ 寿美 千代 朱夏 保子

エプロンをする私の城になる
 エプロンの似合う男に油断する
 エプロンが重くて肩が凝っている
 エプロンも弾む男のクッキング
 エプロンをはずして主婦はやめました
 お揃いのエプロンを買う民主主義
 姑がエプロン持つてやってくる
 エプロンが並ぶ田舎のお葬式
 真白なエプロンで来るボランティヤ
 エプロンと幸せごっこしています
 エプロンで拭いた涙はたとある
 エプロンに付けて母さん寝てしま
 おくさんのエプロン今日もおやすみ
 エプロンが知ってる母の苦勞性
 エプロンたみ神さま今日も無事で
 エプロンは妻の座守る鎧かも
 エプロンを買うにもおんな試着室
 お地藏さんのエプロンも夏の色
 現役の母エプロンはユニホーム
 エプロンと浮いて沈んで五十年
 エプロンの白にときめくものがある
 エプロンを外して客の輪に入る
 エプロン女給林美美子を読み返す
 婿どのがエプロンしてるまあいいか

修 楓 泰 月 重 新 利 朋 澄 月 誠 月 子 能 弘 一 つ 保 求 芽 大 輪 房 子 修 志 修 齊 雅 文 千 里

真つ白いエプロンがもう似合わない (志) 千代
 エプロンの癖でたまゆら夢を見る 元 紀
 エプロンも独りのいりて茄子きゅうり 天 地 恵美子
 くれた子をもうエプロンに包めない 軸 扶美代
 エプロンのフリルおしゃまなおママゴト
 兼題「捨てる」 宮西 弥生選
 婆ちゃんの辞書に捨てる文字はない
 ボイ捨ててを禁止男も空カンも
 古い記憶捨てねば脳があふれそう
 捨てるのに歳月の要るゴミがある
 あれこれと捨てることから始めます
 温もりをもらうがらくた捨てません
 捨て難い男が傍に居てくれる
 書き捨てた方に本音がある手紙
 捨て身とは自己だけ守ることです
 飯ひとつ捨てられぬ手のひらの飢餓
 出番などなかったシナリオを捨てる
 私を捨てても捨てる者がない
 白の自負捨てて私の色選ぶ
 私を捨てると見えるものがある
 チャリティーのパザールにばし出す
 まだ古桶と女の夢は捨てきれず
 捨てられた箱が奏でるオルゴール
 夢はもう疾づくに捨てたシヤボン玉
 東 吉 惠美子 能 子 元 紀 月 子 伽 羅 正 雄 公 誠 朱 夏 典 子 篤 子 正 坊 伽 羅 菜 月 雅 文 た ず 子

鑑定に出そうか捨ててしまおうか
 風見鶏捨てた仮面が惜しくなり
 一枚のハガキに愛を捨てられる
 ロボットが進化人間捨てられる
 ブライドを捨てるぐらいいは造作ない
 捨てて石が忘れたころに光り出し
 捨てていたパンの耳にもある命
 過去捨てた穴はでつかい方がいい
 ヘンクを扶んだ本を捨てられた
 子育て中女を捨てていませんか
 無造作に捨てた昨日が悔まれる
 表札に捨てた男が生きている
 人間の哀しさ五欲捨て切れぬ
 ジェラシーが真赤な薔薇を切り捨てる
 捨ててから無性においしい赤い靴
 七夕に願いと捨てるもの一つ
 反骨を捨てて小さくなった父
 慢心もブライドも捨てて亀は勝つ
 首すじの辺りに捨てた歳がある
 人 日本語をどんどん捨てる天の川
 地 折れた鼻捨てる天狗になりました
 天 捨てて台詞吐いた男の黒い息
 軸 苦勞した分だけ捨てて明日生きる
 泰 子 求 芽 元 紀 楓 修 玄 也 章 久 良 知 賢 子 能 子 鹿 太 朱 夏 潤 子 月 子 多 恵 子 鹿 太 葉 美 代 子 惠美子 幹 齊 昭

兼題「いよいよ」 板尾 岳人選

優勝だ いよいよセール始まりだ 章子
 呱呱の声喜怒哀楽の幕が開く 直樹
 いよいよとなれば石にも立つ矢かな 高栄
 マジック点灯道頓堀が待っている 良知
 いよいよを逆手に取って生きてやる 鹿太
 いよいよと言う時いつも妻を呼ぶ 利昭
 いよいよになればと妻が逞しい ダン吉
 いよいよの時には妻の手を握る 弘風
 いよいよには妻の後へかくれます 一志
 父さんもしいよいよボケが来たらしい 舞夢
 いよいよになれば魂売るつもり 楓楽
 視線浴びいよいよ花は美しい 希久子
 いよいよの時はとほけるつもりです 義
 いよいよの時の台詞は神棚に (矢)五月
 いよいよとなれば駆け落ちすると決め 愛論
 いよいよの場面で男いなくなり 哲夫
 いよいよとなれば来いよと言つたはず 昌紀
 いよいよの時には首をすげかえる 朝子
 いよいよとなつたら何も彼も捨てる ひさ乃
 いよいよとなれば私も荷をかつぐ 伽羅
 いよいよの時はへそくり出したげる 伽羅
 いよいよの時母さんがそつと出し ダン吉
 いよいよの返事に困りバラ送る みつ子
 いよいよの定番壺から出すお金 朱夏
 夫定年離婚届を書くチャンス 弘一
 葬式の話を父母がやり出した シマ子
 いよいよとなれば私の金を出す 義

職探しいよいよ迫るきび団子 富美子
 二枚舌いよいよ種がされてきた 完次
 いよいよとなれば実家へ泣きに行く 重人
 いよいよと言うまでは居た影法師 恵子
 いよいよと思うカルテの文字である 英比古

佳
 ひと声でいよいよ猿と犬になり 月子
 いよいよとなれば男を踏台に 朱夏
 今日からはいよいよ私独身だ 月子
 いよいよの傘が一本干してある 幹斉
 どうしようまだ信号は赤である 大輪

人
 機は熟し千羽目の鶴折りあげる 澄子
 肉親をお呼びなさいというカルテ たつお
 天
 いよいよと覚悟小さな咳をする 恵子
 軸
 男傘いよいよ濡れてくる頃だ 恵子

兼題「洗う」 磯野いさむ選

朝夕の木魚で洗う欲のしみ 高栄
 手を洗う雛おやつが待っている 諷云児
 ベツカムと握手をすれば洗えない 章子
 日本を丸洗いする梅雨になる シマ子
 すこし疾しい昨日ほり込む洗濯機 たず子
 朝シャンの娘の行先に嘘がある 正雄
 研ぐ義母に無洗米とは言い出せず 遠野
 洗いざらい喋つて不眠症治る 典子

お互いに洗脳出来ず離婚した はじめ
 茜雲夫婦無口で洗う鉄 正雄
 四季報を洗い直している株仙 良知
 村中で川の掃除除害待つ 日出子
 阿と畔の仁王に心洗われる 新一
 ユニホーム毎日あるた子も五十 欣子
 洗いまして候そつとシャツの紅 英比古
 ヘップバーンに洗われたことが 重人
 草子洗う小町へ暮れる薪能 一志
 有名になり厭な過去洗われる 利昭
 買うべきか買わざるべきか無洗米 (矢)五月
 こころ洗われた奥の院の風 天笑
 八月のブルは羊の子を洗う 美代子
 過ちを涙で洗い許される ひさ乃
 替えズボン洗つてバレた秘蔵金 公誠
 石庭の渦に心を洗われる 慶一
 前歴を洗いざらいに話題作 たつお
 心は錦洗い晒しを着て無冠 一志
 一日を洗うシヨパンを聞いている 完次
 日本語を洗い直して笹に吊る 恵美子
 目を洗う心を洗う本にあう 正坊
 心の傷涙で洗う仲直り (田)節子
 車洗うと必ず雨が近くなる 東雲
 梅雨の土砂降り織田作の碑を洗う 美代子
 シヤガールの青に心のひだ洗う 朱夏
 佳
 暮洗う一べん化けて出なさいよ 寿美子
 ゴシゴシと洗えば罪が消えますか 鹿太
 雨も良し磨崖仏もお目洗う 修

みすゞ展しはしこころも目も洗う
きれいに手洗って運命線を見る (矢)五月

人

戦争中俺も洗脳されていた
はじめ

地

なんとなく善人になる胃洗浄
弘一

天

遍路笠日々に心を洗われる
柳伸

軸

庭づくりまた農薬の手を洗う

兼題「いのち」

橋高 薫風選

巡る忌やいのち伝える一行詩
親の親はるかの親が居てわたし
胎動へ万物愛しくなってくる
肺活量五千を吹いているいのち
命がけの恋ですりんご丸かじり
み教えに背いていのち懸けの恋

(矢)五月

富美子

セツ子

雅文

朱夏

瑠美子

久峰

比ろ志

茜

玄也

育弘

恭昌

一風

真理子

ダン吉

良知

螢

東雲

泰子

なぎさ

菜月

たもつ

つづや

シマ子

義

愛論

諷云児

番傘川柳本社句会 (水府忌)

日時 8月6日(水) 18時・18時50分締切

会場 三井アーバンホテル(JR・地下鉄弁天町すぐ)

宿題 ホテル 上野 多恵子 選

驚く 竹森 雀舎 選

鈍行 杉森 節子 選

脱ぐ 河内 天笑 選

握る 磯野 いさむ 選

各題2句・席題あり・会費千円

夫近くいのち私へお引越し

為政者よ今わだつみの声を聞け

究極の命のようにホテルとぶ

シャガールの画集にいのち遊ばせる

人生は未完のままで終るのか

佳

自販機にいのち預けております

朝顔市のいのちを思いながら買う

円空のノミに生れてくるいのち

いのちある喜怒哀楽も稿になり

二刀流はいのちを陰と陽に見た

人

ダンゴ虫いのちの限り丸くなる

本棚に囲んでもろているいのち

地

火も水もだんだん怖くなるいのち

天

鶉は鮎のいのちを吐いて悲しみます

軸

きらり

あやめ

葉

泰子

春蘭

完次

典子

鐘造

篤子

元紀

千里

千

干

斉

川

端

一

一賞選考規定（要約）

- ① 路郎賞 川柳塔欄の入選句から5句
川柳塔賞 水煙抄欄の入選句から5句
昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、8月10日必着で本社宛郵送する。
- ② 第一次選は名誉主幹・主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長・選考委員で行い、各賞20編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。
- ③ 第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席（五点）、第二席（四点）、第三席（三点）、第四席（二点）、第五席（一点）の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。
- ④ 第二次選者
本社関係 名誉主幹・主幹・理事長
地方関係 【一】ブロック（一）選考数
【北海道・東北 関東 北陸（2）】
【京都・奈良（1）】大阪（6）兵庫（3）
【和歌山（2）】鳥取（4）島根（3）
【岡山・広島・山口（2）】四国・九州（2）
計25名
地方関係の選者は、適宜交代制をとり、均衡をはかることにする。
- ⑤ 川柳塔欄・水煙抄欄に六ヶ月以上出句した人に応募資格を認める。

川柳塔社各賞選考規定

- ① 川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年十月に表彰する。
 - ② 自選集の作者は、すべての賞の対象としない。
 - ③ 各賞とも、原則として同一人に同一賞を授賞しない。
 - ④ 路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には授賞しない。
 - ⑤ 路郎賞・川柳塔賞の選者は、その任期中は路郎賞の対象としない。また、愛染帖・茴香の花欄の選者も、路郎賞の対象としない。
 - ⑥ 路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、別途に定める。
 - ⑦ 愛染帖賞・茴香の花賞は、それぞれ選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。
 - ⑧ 一路賞・各地柳壇賞は、それぞれの選者が候補作品を主幹に提出し、授賞句を決定する。
- （備考）
この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成十二年度から実施するものとする。

平成十五年度二賞選考委員

第一次選者(十名)

橘高 薫風・河内 天笑・板尾 岳人・奥田みつ子
仁部 四郎・波多野五楽庵・小島 蘭幸・西出 楓楽
前 たもつ・木本 朱夏

第二次選者(二十八名)

本社関係 橘高 薫風・河内 天笑・板尾 岳人
地方関係(二十五名) (一)内は人数 ブロック内五十音順

〔北海道・東北 関東 北陸ブロック(2)〕

斉藤 劔・島 ひかる

〔京都・奈良ブロック(1)〕 大内 朝子

〔大阪ブロック(6)〕

加島 由一・塩満 敏・高杉 千歩

谷口 義・津守 柳伸・宮崎シマ子

〔兵庫ブロック(3)〕

田辺 鹿太・西口いわゑ・春城武庫坊

〔和歌山ブロック(2)〕 榎原 公子・福本 英子

〔鳥取ブロック(4)〕

植田 一京・鷺見 正子・西原 艶子・森山 盛桜

〔島根ブロック(3)〕

竹治かし・松本 文子・吉岡きみえ

〔岡山・広島・山口ブロック(2)〕

井上富子・藤解 静風

〔四国・九州(2)〕 赤川 菊野・中居 善信

昨年九月から今年八月の間に

誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を
選択して応募してください。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳
塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、
間違いないようにお願いします。

平成十五年度各賞選者

愛染帖賞 波多野五楽庵

茴香の花賞 政岡 日枝子

一路賞 富士 慕情 古久保和子

各地柳壇賞 山本 義子 吉村 一風

ろくでなし

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

川柳エスホ

山本 三郎報

柔らかな言葉の裏にある小骨
年金が私の腰を支えてる
柔軟な頭で川柳作らねば
やわらかい言葉に包み背中押し
やわらかい赤ちゃん抱いて固くなる
やわらかな日差しを受けた花の下
やわらかな言葉で人を切る才女
やわらかな日差しが過去をつつみこむ
痛みきて始めて知ったありがたさ
スカートにまつわる風がやわらかい
生きること苦だと悟れば悩み解け
全体の柔らかくなるつばが効く
傷心の春やわらかな風で癒え
退屈な女の電話やわらかい
やわらかい介護の嫁の手が温い
禁煙を説く先生も止められず
懸命に生きて余生を輝かす
難民を思いつ捨てて衣替え
ローカル線はいいな列車の窓が開く

政雄 昭一郎 三郎報
みさと ゆき子 はつよ 任有 一炊 星花 文子 団地
れい子 とよ子 三峰 高栄 仁清
ルイ子 とし子 さとし

片思いせめて隣に座りたい
リストラの夫の屋台を妻が押す

ローズ川柳会

山崎

君子報

幸せを掴む指先萎えさせぬ
幼稚園の可愛い頃を夢で逢う
友の友そのまた友が居て楽し
ボケットに何かが触れる形見分け
種分けて互いに花を咲かす友
黄金の鯉はさすがの王者振り
良き友に会わせ給えと子を折る
月下美人届けし友の遠く住み
鯉のぼり出世しますと買ったはず
老いし身をなぐさめ合いて友の去る
戦争の傷痕も知る鯉のぼり
友達が笑いとばしてくれました
過しよい街た溝にも鯉泳ぐ
許されて許して友のあたたかさ
みなみ風鯉もうかれる初節句

高槻川柳サークル卯の花

川島雲児報

一幸 三郎 君子報
てゐる キク子 みつ子 藍
哲子 トミエ 貴代子 まさお
孝一 雅子 澄子 いわゑ
武庫坊 年代 君子
スミ子 泰雄 メ女 照子 宵草 稲子 高栄 活恵

愛しさが募る電話の遠い声
遠回りしたい浄土がすぐそこに
良縁と信じ遠くへ嫁がせる
万歩計暑い寒いと愚痴を言う
万歩計の香りに弱い万歩計
万歩計いつまで僕に付き纏う
なまけ癖叱ってくれる万歩計
万歩計の穴場へ回る万歩計
じつくりとタンス預金を考える
向かい風じつくり男練り直す
弱点は見つけたじつくりと攻める
宵闇にひとめははかる蛇の目傘
嘘ひとつ消して宵路が深くなる
反省の甘さへ宵のお月様
親離れする背を送る宵の月
影法師お前も何か言いたかろ
辻褄を合わせる嘘が出て来ない
有事実売られた喧嘩なら買おう
魂にいい絵を描いて今日終る
師の影を踏まぬ時代の師を思う
かさぶたが乾き切らない恋の傷
喪が明けて女ばつぽつ翔ぶ構え

岸和田川柳会

長谷川呂万報

母が煮た田舎料理がなつかしい
嫁ぐ娘へ煮物のイロハ教え込む
薄味に貴方好みの鍋を煮る
話し合い煮詰ったらしお茶を出す
家族みな好きです母の煮ころがし

無縁 秀夫 憲夫 宏章 半蔵門 孝一 五月 重人 石舟 諷云児 求芽 満寿蔵 晴美 萬的 澄子 典子 あやめ 武史 初恵 治三郎 尚士 庸佑
房枝 ゆり子 一脩 弘子 さよ子

涙拭う親に感謝の嫁ぐ朝

拭うても落ちぬ心の古い傷
相合傘片袖拭うやさしい手

お守りは値下げしないが売れている
粘り勝ち半値八掛けやと買う

バブル後の塩漬株がまた値下げ
値下げした水を入れて迎え酒

値下げまでしては売らぬという老舗
旗だけが値下げセールとはしゃいでる

店にまい値下げの札が泣いている
ブランドの値下げに妻の泣き笑い

手を伸ばすところにもいつも辞書とペン
腰伸ばし伸ばしながらの潮干狩

伸ばしても伸ばしてもまた曲る腰
ラジオ体操背筋伸ばして一二三

拘置所で票伸ばして出るなんだから
伸ばすほどあらが出てくる顔写真

袴はさ礼に始まる豆剣士
袴着の五歳に親の夢を盛る

爺ちゃんの出来る折紙袴だけ
目さすのは綱と袴のインタビュ

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

千羽目の鶴を呼んでる福ダルマ
夢の中亡母に呼ばれて目がさめた

花回廊美事なバラは人を呼ぶ
呼出しの声に力士の血が燃える

忌が迫る亡母を呼びます時鳥
人だかりさがす呼び物特売日

英雄

笑司

呂万

照女

けい子

蛙城

みつ江

甚一

狸村

守

珠子

寿海

盛之

仁緑

譲一

洋

呼ぶ声に活力もらい食すすむ
呼び声につい誘われて土産買う

爽やかな夕暮れが呼ぶピアホール
大山は呼んでる若させきたてる

大山は呼んでる若させきたてる

大山は呼んでる若させきたてる

大山は呼んでる若させきたてる

大山は呼んでる若させきたてる

大山は呼んでる若させきたてる

大山は呼んでる若させきたてる

大山は呼んでる若させきたてる

大山は呼んでる若させきたてる

大山は呼んでる若させきたてる

大山は呼んでる若させきたてる

大山は呼んでる若させきたてる

大山は呼んでる若させきたてる

大山は呼んでる若させきたてる

大山は呼んでる若させきたてる

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

良くてきた妻で夫が光らない
大虎が天下を論ずコップ酒

生きたため時には苦い水を飲む
横道で辞書に載らない事を知る

足るを知る清貧父母と変りなし
優しさが人の心をやわらげる

人生の突っ支い棒は母だった
此処だけの話がだんだん輪を拡げ

頑固さが取れて肩間の皺が消え
善と悪心に同居して困る

病人が笑うとキツト立ち直る
亡くなった母の大きな身に滲みる

花はさみ枝整えて若返り
お巡りさん辻に立つたら大洗滌

辻褄を合わせてつける日記帳
福の神出るにであれぬこの不況

なお巡るしたたる汗の夏遍路
この熱は君が土産にくれた風邪

高知川柳社

川竹

少年にいつでも戻すオルゴール
玩具箱子供の夢がつまってる

開けるなと言うから開けた玉手箱

弘子

静江

正光

雄々

いさむ

吟笑

かおり

ひかり

勝

治延

あきら

放任

賢

八重子

輝夫

よしみ

箱の蓋あけたら嘘が見えてくる
よそ行きの顔で二級酒箱の中

金髪になるなら開ける玉手箱
耐えぬいた箱は昔を語らない

山彦の聞こえる町も信号機
信号に従う老いを自覚する

旅先の川に流して終る恋
わだかまり解かしてくる酒をつぐ

九十年貧苦不幸思わずに
ネクタイを解いて素顔が見えてくる

美しい誤解をとけば恋になる
諦めがついて迷いが解けてくる

雪解けがきつとあるから頑張れる
帯解いて女本音を喋りだし

紐解けば母の匂いと旬の味

佳句地十選

(7月号から)

鶴田

遠野

最高の笑顔で言おうグッドバイ
いい酒でいい盃でいい眠り

流されて四国遍路の列にいる
望郷の念が挫折をくい止める

少しづつ別れを近くするあくび
肥満体苦勞人とは思われず

一石を投げて器量を試される
ボケットにときどき妻のリトマス紙

泣きながら値踏みしている形見分け
ときめいた頃には触れず家裁出る

かよ

功

快風

愛宏

佐紀子

孝雄

和江

悦子

竹萌

典雄

美々

てるみ

京子

松風

榮珍

扶美代

東大阪市川柳同好会 森下 愛論報

迷つてはならぬ花鏡が光る
 占いのあとに残っている迷い
 人生の壁に迷うて泣き笑う
 迷うて人と二三度地下で逢い
 叱る人なくて厳しさのない夕陽
 履歴書が厳しい世相知っている
 職安の厳しい窓に捌かれる
 厳格で情けに弱い親父の背
 ああ夫婦どちらも損と思つて
 出しゃばつて結局損な役を買
 この損が後で生きていると思う
 政治家のやがてがまてぬ民の
 激流も淀みも越えてやがて海
 歳月がやがて優しい日にくる
 悔いのあるページが今も疼き出す
 真剣に確かな今を生きている
 周遊券今をとことん楽しもう
 今耐える鬼も仏も笑うまで

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

竹槍で戦に挑んだ日もあった
 はるかなる天寿を夢に今日も生き
 寿の筆筈が届く過疎の街
 古い二人戦いながら日も暮れる
 衣がえ茶びつの樟脳目にしみる
 戦争にだけはこの子はいかせない
 一日の戦はじまる独楽の芯

雅文 和子 章久 シマ子 弥生 太郎 緑 賢子 湖風 萬度 良子 美弥子 三重子 育弘 たもつ 信治 愛論

城北川柳会

川久保睦子報

片ちびの靴が戦を物語る
 戦ごっこ置きざりにして孫が去に
 夢ひとつ残して清き別れかな
 ファックスに告別式場初受信
 杖ついて自動車止める交差点
 蝶の舞う菜の花畑の黄毛氈
 難民を思いつ捨て着る衣替え
 明と暗双頭の虫身に潜む
 他人の物みな良く見える色眼鏡
 双方の告げ口を聞く不整脈
 猫柳芽が出て春が息を吹く
 通り抜けの花と対話が弾んでる
 中年の気持でいるに無料バス
 おねだりは父さん少し酔った夜
 一票が届かぬせめて自守自戒
 平和やな花愛でる人食べる人
 くり返す歴史に戦争だけはいや
 春のエチュード紋白蝶のペアダンス
 幼な名と訛りが温いクラス会
 大臣の到着を待つ国訛り
 通訳がいります祖母の国訛り
 猫どしの生まれ猫舌で困る
 幸せのひとつ三度のうまいめし
 太鼓腹あ美味しくて幸せで
 世界中飛び回る花帽子
 誇張して多弁になつて花帽子
 ふるさとにボクのララバイ眠つて

博利 清泉 白汀 政子 東雲 一枝 とし子 綏子 志華子 あやめ 昭子 達子 順三 はじめ 千歩 正 あい子 柳弘 セツ子 史風 茂 求芽 重人 典子 倫子 千里 修

打吹川柳会

大森 孝恵報

今年こそ息切れのないタイガース
 人形の私語がはじまる夜の底
 ふるりの訛り堂々の入社式
 マジシャンの指がビツグな芸を生む
 猫の目に映るボロボロの人間
 あの人を許せば広い視野がある
 親が子に叩かれてる家庭不和
 輪になつて叩く太鼓の笠踊り
 ロボットに叩き出されて職がない
 腕試し武威あちこち門たたく
 若いときたかたかれた傷肥になる
 医療ミス面目ないと土下座する
 うそがばれ僕の面目まるつぶれ
 腐つても鯛面目を捨てきれず
 美味いと言われ面目立つ料理
 他人様の面目だから気にしない
 面目躍如喜色満面星野仙
 面目ないがゆつくり飲もうた酒を
 面目を果して消えたシャボン玉
 腹時計そろそろ昼と促され
 朝食坊そろそろ起きて飯を食う
 長居客帯そろそろ頬被り
 そろそろ嫁に聞く耳持たぬ孫娘
 のはんのつけがそろそろ来たようだ
 黒雲が次々と湧く胸の中
 観音市どこから湧いた人の波
 次郎長も富士湧水で茶を淹れた

公一 春蘭 トヨ子 ひさ乃 睦子 高栄 勝見 晴光 順枝 龍枝 しろう 楨元 久芽代 博丈 和司 完司 季芳 善江 幸子 京子 清 玲子 友楽 美美子 克枝 公恵 冷坊

噴水ですぶぬれになりはしゃいでる 貴恵
何でだろう何でだろうか雲が湧く
お日様にわかれてもらう熱い風呂
面目ない誤配の荷物あけちゃった
面目に甲斐性たして譲りたい
本堂の蠅たたこうか止めようか
勇気が湧いた断崖に行つて見る
雁首を揃え初声待つている
叩かれて叩かれて藁縄になる

尼崎いくしま川柳会 春城武庫坊報

降る雨にあじさいの花いきいきと 幸子
玄関に犬入れてやるほどに降り
遠い日の事は忘れぬ物忘れ
叱られて遠回りして帰る道
遠い日よ相槌を打つ人もなく
傘立も右と左で倦怠期
残されたホームの傘にさす西日
一本の傘に寄り添うにわか雨
蛇の目打つ雨音昭和なつかしむ
ろうそくの光の中に母ゆらく
青い海くらげの泳ぐ丹後浜
孫一人居て下の子が塩辛い
初孫は三つ児ちゃんだと友は笑み
未熟児の手首を挙げる命かな
藍染めにしたハンカチで汗をふく
座ぶとんを置けば私の安息所
はからの一人ずつ消え梅雨となる
むかし娼家いまはひっそり桜桃忌
光穂

サークル檸檬 西出 楓楽報

にせものだから一生懸命に光る
水掛け論 妻はやさしい堰つくる
心まで痩せてしまったダイエット
また逢える積りの握手だったのに
近づけば水平線は遠ざかった
水枯れの井戸に賑わいあったとは
水際で大きな的に逃げられる
新茶うまし値段は聞かぬことにする
水百態動かぬ水は腐り出す
宮水の味を知らずに地場ぐらし
蜘蛛の巣の張った頭で思考ゼロ
生きたとは潮の満ち干の如くなり
釘をさす位置をときどき間違える
手に触れるだけでやすらぐ岩清水
川柳塔なら 坊農 柳弘報
引く紅に心の時雨絡み合う
共に来た苦楽の道は内緒です
芭蕉忌の句碑に時雨れるひとり旅
勝ち戦しか遺族は泣いている
牛歩でも目指すものあり未だ楽し
価値観の違い気楽な落ちこぼれ
難かざる雅楽今にも聞こえそう
この頃は妻のしかしが多すぎる
お金にはならぬが畑を打つ気楽
楽園の掟に触れてみたい夜
植込へそろそろ楽に行きたがり
希久子
光久
遠野
千代
正坊
哲夫
たもつ
義子
みつ子
保子
房子
いわゑ
楓楽
あずき
カズ子
博一
登美子
蘭香
彰雄
春蘭
富子
真理子
理恵
愛論

極楽に行くには癖があり過ぎる
女坂いくつ越えたら楽になる
遅すぎた娘にうれしい恋時雨
人間だもん楽な方へと足が向く
母の忌にビエロ悲しく笑わせる
断ち切れぬ思慕へしづめる花鉢
野仏の肩に容赦のない時雨
いろいろと資格とれたが職がない
笑わして笑いの餌待つビエロ
若いなあしかしあんたは歳いくつ
やさしく介護しかし時には鬼となる
送葬の柩を避けて行く時雨
草笛は春のビエロを踊らせる
世をすねたしぐれ斜めになつて降る
関西弁で話せば楽になる宿舎
舞台裏子供の写真見るビエロ
笑顔にはかしながらのかくし味
ジェラシーの火花おさえている時雨
楽な道選んで視野を狭くする

竹原川柳会 時広 一路報

竹の節学び過ぎることなどない
塾通い道徳心も学ばねば
図鑑手に歩いて学ぶ山野草
先生は孫算数を学んでる
晩学の喜び友を見つけたり
大学でみっちり学んだ酒たばこ
人間の数だけ学ぶことがある
入学と入園孫の笑顔撮る
孝風
弘風
良一
絹子
道子
洋子
太一
茂雄
卓
一風
國治
秋雄
とし子
睦朗
佳子
敏子
恵美子
弥生
蘭幸
房子
慶子
笹舟
万年
菁居
半覚
汎美

年金よ三十五年ありがとう

くねくねと曲がつた道もおもしろい

今日からは大人コヒーはブラック

女子トイレ只今満車道の駅

酸性雨 車社会へもの申す

自動車をやめろかごにして孫育つ

地球から戦車の消える日を祈る

マンションの高さと競う消防車

自転車の視野だけ私にあるヒント

ハンドルの仮面を一つ持っている

竹まつり竹の変身見てかえる

山陽像もにっこり笑う竹まつり

竹原のお酒がうまい竹まつり

ヨチヨチが亀を追ってる竹まつり

かくや姫うふ本ものきつという

お祭りはいい顔をカラにする

普段着で楽しみました竹まつり

竹原の竹で良かったなあまつり

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太郎

大汗をかいてたつたの三百歩

恙なく今日も元気な洗濯機

押入れに勿体ないが山となる

脳みそも洗濯したい物忘れ

控え目に洗ったんです愛こめて

父の日も赤提灯のコップ酒

咲いて散る花は一期の風の中

農作業父の背中に汗の塩

故郷の友から着いた草だんご

夏喜

史子

千枝

敬子

幸子

笑子

節子

貞子

輝恵

不朽

正宏

孝枝

栄恵

白狐

静風

力

一路

鹿太郎

鹿太

その

幸子

江美

全彦

比ろ志

義芳

まもる

カズ子

仮住い息を殺して朝支度

幻想の世界に誘うホテルの灯

軒汚す燕許そう母にあらう

娘からメールで届くあらう

日が落ちて脳と手足のストレッチ

洗濯機回りはじめて脱がされる

夫と娘に捨てろ捨てろと責められる

悲鳴と怒声アブラムシにもある命

階段を見上げて脚に問いかける

洗濯機家族の絆絡み合い

妻不在今日はいのちの洗濯日

堅物がバラの思いに汗を添え

捨てきれぬ思い出詰まるオルゴール

洗濯機主婦はわたしと音を立て

西宮北口川柳会

黒田

能子報

この窓も善人が住む飾り花

利かん気を闘志に変えた柔道着

口利き料いつも秘書が言いのがれ

口利きが上手再選確実だ

アデランスが利いて再婚できました

母の涙が利いて暴走立ち直る

常連にワサビの利いた寿しにぎる

よく利いた無口な母のひと雫

込み入った話はゴメン食べてから

感謝込め妻に誕生プレゼント

追伸へ密かに込める恋心

今日の無事思いを込めて米をとぐ

塗り込めた嘘がそろそろ剥けてきた

よし子

玉枝

美代子

信子

秋子

耕治

亀子

イサミ

マサ

孝一

満寿蔵

正治

澄子

求芽

たず子

比ろ志

光子

晴美

美代子

奮水

孝一

章子

嘉彦

無緑

トミエ

房子

キッチンをのぞく小さな悪魔たち

思春期の孫の心がのぞけない

真っ白い歯ののぞいてる元氣な子

のぞき見の罪を作った日記帳

古本屋のぞいて帰る妻の留守

読めないが覗いてみたくなるカルテ

三味の音にのぞいてみたい祝い節

建前と本音の違う会議室

信じてる大きな口が果に並ぶ

髭くらいタマちゃんだつて生やしてる

前向きに歩ける距離にあるポスト

逃げきれぬ尻尾の先にまで自信

一瞬に妬心がのぞく花鉢

回覧を届け犬にも声をかけ

寝たきりになつても主人宝です

新緑に青虫の子も育ちゆく

ええとこで覗く新聞めくられる

ほたる川柳同好会

水野

木は森に隠せばバレることもない

それではと重い話を聞かされる

お説教それがいづつもついて来る

母さんへそれが減つて少年期

泰然と痛みをかくすプロの意地

負け戦それでも汗の満足度

それでねと愚痴の飛び出す雨の午後

白い歯に辛口しみる新走り

歯に着せた衣ばちばちはころびる

かくしことの一つや二つ夫婦にも

鹿太

江美

歳子

陽子

哲男

春蘭

絹

キク子

貴代子

石舟

富喜子

求芽

澄子

曙蝶

光久

良恵

いたる

黒兎報

緑骨

敵子

昭子

保子

雪子

ヤギエ

桂子

黒兎

蜚風

蜚柳

隠しつづ知つても欲しい片思い
 歯が合わぬ姑となれて共白髪
 それで今運勢下降の極みなり
 初孫の歯が増えるたび見せられる
 無事ならばそれでいいんだ震度六
 イラク戦それで出てこぬ核兵器
 真実を言えず無口になっている
 それでいい遠景の中君在れば
 物忘れ隠すつもりはなかったの
 それでいいそれもいいねは氣乗り薄

川柳塔唐津

久保 正剣報

ときめきと出会いおしやれをする散歩
 切りとれぬ白バラすぐに散っていく
 お互いに騙し騙され五十年
 作意より選者が深く読んでくれ
 末っ子が占領してる父の膝
 コンセントお日様に入れ梅雨晴れ間
 辞表出す怒りなだめる不況風
 現役で母に別れたもんだから
 すぐ夏にすぐ冬になるファッション
 鱗みな落ちて帰るネオン酒

京都塔の会

都倉 求芽報

旅慣れた老婆と入る露天風呂
 早春の空にくっきり八坂の塔
 思い出があれこれ若葉に蘇る
 楽しそうに見えてるらしい寡婦独り
 五十回ことばくように五月晴れ

正三郎 長一 契子 柳清 柳童 セツ子 久子 よしろ 信男 勝 兵八郎 實 輝夫 勝視 高明 晴翠 水笑 虹汀 四郎 正剣 和友 春蘭 達子 あやめ 正坊

かいつぶりまばたきの間に水の中
 カイツブリ親子で挨拶してくれた
 よしきりの声水郷は別世界
 弁当に一切れあった近江牛
 水郷をめぐる詩人になりきらず
 手こぎ舟 急いで生きていることもない
 老いひとりとても大事な診察券
 チケットのパソコン予約子が頼り
 夢もらう知らぬ土地への乗車券
 補助券のあと一枚に見はなされ
 挽回を期した馬券に裏切られ
 呱呱の声人間世界への切符
 五月晴れ目白が宿る山法師
 娘の家にひととき宿る町の緑
 魂の宿るまで彫る面を彫る
 やさしさと光の宿る眼が笑う
 上品な言葉の裏に火を宿す
 新しい生命が宿る帯の汗
 マジシャンの手へ見物の目が刺さる
 見物の人出見物する祭
 大道の至芸を囲む人だかり
 白鷺城有史の史跡見て歩く
 たんぼはの種が浮気な旅をする
 見物の輪の中にいた鬼だった
 弱い方に肩入れをする外野席

川柳塔おとしり
 原 みさを報
 深爪をくよくよしでも仕方ない
 くよくよを置いてきました旅の宿

美穂 春 萬的 啓子 満寿蔵 典子 満子 宏子 芳子 楽好 いわゑ 幸代 輝美 みつ子 葉子 欣之 求芽 庸佑 巨詩 泰雄 奮水 メ女 百合子 楓楽

母さんがくよくよすると子も沈む
 酸欠の頭野原で遊ばせる
 くよくよと弱い心が胸をしめ
 かごめかごめ輪の真ん中において孤独
 真ん中に母にも輪の真ん中にご鼻
 入口も出口も見えぬど真ん中
 真ん中に愛を巻き込む母の寿司
 万緑の真ん真ん中にして祝い酒
 米寿の母真ん中にして祝い酒
 百歳を真ん中に住む家族の輪
 真ん中に梅干ひとつ日本晴れ
 真ん中がしつかりしてて舵を取る
 歯に衣を着せて世間を広くする
 わたくしを噛む音がする糸切り歯
 少だけ残った歯でも磨かねば
 床の間に歯を置いて旅に寝る
 歯に衣を着せぬ本音にすくわれる
 白い歯でにつこり笑う彼が好き
 いい男歯の浮くようなことを言う
 跡取りがしつかりめしを食べている
 大丈夫といわれてやめと眠くなり
 大丈夫信じていたい末期癌
 大丈夫と妻が言ったら大丈夫

川柳塔鹿野みか月

土橋

顔洗う今日一日も無事なよう
 よこれてる心を洗うのにも酒
 すっきりと心洗って出直そう
 尻餅ついたズボンを洗うお爺さん

宏章 艷子 小生 彩子 紀子 由多香 舍人 幸次郎 黙光 風花 大鯨 庸二 雅通 登美 雄々 清子 富貴子 道子 孝子 邦昭 和子 みさを 螢報 八重子 英夫 みさ子 はるお

走らねば風の心はわからない
わからない明日へ命を洗う旅
ケセラセラ先のことなど解らない

川柳大坂

高木

信酔報

いわお

花嵐吉野散らして八重咲かす
どの彩で吹くのだらうか明日の風

車椅子押す人も老い春の影
切れかけた夫婦あんない喜寿傘寿

手形の期日あんない伸ばす酒がある
もう出ないチューブも一度押してみる

三割の負担と聞いて一万歩
ふんざりがついて明日の顔になる

タマちゃんに癒し求める平和国
温暖な春に希なる妻の乱

難民にして援助して人愚か
あんない頼む舵はまかしたお母ちゃん

春の女神が希望の鈴を鳴らしはる
また明日に賭けて気弱な僕がいる

坂道を腰押す指のあたたかさ
神様に明日のシナリオまかせます

希に見る夢の中身は痴呆症
明日から禁煙します十年目

子供部屋のぞけば明日の歌がある
代理母生まれた子供親三人

食欲が命を左右する太目
ささやかな希望を結ぶ赤い糸

春の雨じつくり希望膨らます
押し花に愛と思ひ出し込めて

智三
裕美
克子

酔虎

春蘭

章久

元紀

利昭

隆司

笑風

兵庫

宏

本蔭棒

一風

朝子

ダン吉

ひろゑ

鉄心

呖笑

青道

重人

功

司

洛醉

美花

かよこ

明日を待つ座禅のしびれ吉となれ
ふり返る人生いまだ茨道
にぎりめし食べて思ひはイラクの子

押し一手つかんだ女房に押えられ
落ち椿明日のいのちを土に問う

無になれば何か湧きそな人の道

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

生活のふり幅小さくなくて老い
首縦に振れば私の負けになる

平等に愛振り分けて羨なし
振り切ったつもり風をまだ思う

手を振ってこの上もなく愛される
頭振るカラカラ乾いた音がする

鈴振って哀飲こもこも通路笠
明日の風信じて待とう十三夜

明日こそ言わねばならぬ有り難う
試着室決めて女に明日がある

川柳ささやま

遠山

可住報

恵美

純子

多美子

美智子

八重子

富美

寿子

つや子

君代

柳昌

照月

一步

川童

柳弘

信醉

あずき

欣史子

加津子

能子

香住

シマ子

喜美子

弘直

アキ

慶子

夕方にカラスが帰る森がある
孫掃り門灯だけが冴えわたり
生ゴミの出来る間は生きてます

美味かった母をモデルにお漬物
息切らしたどり着いたよ仁王門

森の木陰遊びがあつたかくれんぼ
ウーキング森の酸素が歩を伸ばす

年金がなければ本当の粗大ごみ
門のある家の隣だすぐわかる

美しい森美しい人が住む

むらくも川柳会

毛利

緑風昼寝を覚ます茶の香り
泣き疲れますやすやす寝る孫にキス

宿浴衣変なところへ行きたがり
ぶらぶらと寄ったバチンコ大当り

待ち人は来らずむなし風が吹く
ありがとうすんなり言える歳になり

素直さと心に微笑とどめおく
孫からの十時の電話待つ日課

一線を退く覚悟友話ね
長生きの元気の泉食訪ね

お父さんのたまには参観見に来てね
結婚をドラマのように演出し

人生の年輪重ぬ奥深く
喜怒哀楽人生に別離あり

和やかな観音様に諭される
生野菜自然の恵みありがとう

康子

朝子

かほる

富子

美紗子

美緒子

開男

哲男

芳郎

可住

幸報

定子

信夫

清吉

彰

幸

八重子

恵美子

ます美

昭子

ふさえ

寿

美恵子

美喜子

安男

明朗

秀子

ツル子

定退者気楽な日々を趣味に生き
はめられて孫もここにこ恵美須顔

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

エルニーニョ鯨を陸へ打ち上げる
旅帰る陸でお茶漬まつている
陸と島貴方と私結ぶ橋
着陸の途端にお腹すいてくる
ライバルに追い付く汗がまだ足りぬ
孫達も日を追うことに親に似る
定年後まだノルマ追う夢を見る
追うものがある内人は光ってる
追い風にここはいつ気に押してみる
追いかける夢ははかないシャボン玉
足跡を追いかかれたサーズ客
追うよりも追われてみたいライバルに
追伸に生きろ生きろと書いておく
地球儀を回して世界の国想う
輝いた頃を忘れてゆく地球
地球より重たい命がおびえてる
地球儀を回し少年夢を見る
青かった地球もだんだん白くなる
すばらしい地球だ好きな人がいる
宇宙へも放り出す地球発のゴミ
免許証の顔は悪人めいて見え
フィルムに皺の数まで読まれてる
いい場面待ってたようなフィルム切れ
フィルムはこれが私か若かった
フィルムの終りは大が写ってる

節江 まさ子
いさお 敦子
フジ ダン吉
一知 昭平
耕策 一壺
庸佑 悦子
かつみ 泰子
美代子 昇
遠野 志洋
敏 重人
みつこ 専平
久仁子 久仁雄
昭子 喜久子

フィルムが撮った僕より呆けていた
フィルムに焼きついていては爆発の日
フィルムに撮れてはいない別の顔
それなりに写りお見合い没になり
フィルムを通すと傷だらけの地球

川柳やがわ

平松かずみ報

年金を支える子等は皆宝
IT戦略子供供しつかり鍛えられ
天職の保母へわたしの子供好き
デザインに惚れた車は飾り物
デザインから手掛けた娘嫁になる
太陽の塔のデザイン名をのこす
デザインが良くて主役は包装紙
大阪へ活気と呼んでるポスター
墓石にも一句デザインしておこう
デザインは神に任せた子どもです
気に入らぬデザインなれどおれの顔
枯山水僕には唯の石と砂
神様のデザインでしいう世界地図
色彩も映して欲しい影法師
濃淡の墨絵色彩より凄
彩りを添える生き方模索する
野党的色彩一人で居て強気
七色の吐息が魔法吹く
エビローグ自分探しの彩を選ぶ
保護色を脱いであなたの色になる
人間へみどり返せという砂漠
酸欠の街であえて緑

たけし 章司
さとし りつえ
扶美代 祥昭
三峰 朝子
秀雄 利昭
三郎 一風
とし子 たもつ
九好 仁清
任有 高栄
恵子 ルイ子
修 柳弘
栄二 洋
庸佑

演壇の講師キツチリ青い羽根
アスファルト割れ目に草のうす緑
絵手紙のきゆうりポキッと音がする
緑なす黒髪のまま遺影あり
甲子園ツタの緑も背を押す
栄光の過去は追うまい再生紙
白雪姫が魔女になったクラッセ
ブランドにむらがる主婦の平和ボケ

かわはら川柳会

上田 俊路報

あきらめたはずなのにまだ胸にいる
あきらめず幸せ一つつかむまで
もうこぬとあきらめていたよい知らせ
早すぎる天国の夫あきらめぬ
あきらめた心がうずくグルメ旅
あきらめず登れと山の風誘う
古老知恵いざという時あてにされ
古傷も月日の流れ忘れさせ
古靴にリズムやつぱり乗って来る
自らを旅人と呼ぶ古稀すぎて
岩美川柳会 石谷美恵子報
ロックドア開錠忍法虎の巻
虎の子を削る不況の風が吹く
前門に虎後門に妻がいる
スミースに行かぬと虎になる男
名匠の頑固が技を汚さない
不整脈頑固に僕を苦しめる
余吏子 静子
道子 かつ恵
悦子 雅子
泰良 登生
寿子 俊路
蟹郎 たぬ
忠良 照子
静生 季芳

寺参りしても頑固はなおらない

頑固とは思っていないおんな偏

禪をいまだしている頑固爺

サムライの肩に頑固が張つてある

どん底で頑固に生きることにした

ライバルの棘を励みに生かされる

北の国棘棘しさをなくせぬか

棘だけになってしまった僕の薔薇

棘のある美女と親交度を深め

菌に衣、心に棘をよく眠る

図書館へ心の棘を抜きに行く

にこにこ棘のあること言える人

君だけと言えは乱れるのは女

カレー三日続けて妻の乱終わる

乱れてる部屋がやつぱり落ちつける

筋金入りの頑固をほとけからもらう

後半に夢盛ってみるストーリー

文芸の香り振りまく乱れ髪

のはほんと長生きしてる訳じゃない

のはほんと顔を出すからいびられる

のはほんとと見えて眉には眉の役

バラの棘愛の洗礼かもしれぬ

のはほんと育つたようだがきかぬ

のはほんととまだ川上の桃を待つ

岬川柳会

八十田洞庵報

心中の雑音詰めるゴミ袋

ホステスにまでも飲みすぎ注意され

なみなみと注がれる酒にある野心

螢

きみ子

重忠

よしえ

修

睦子

圭一郎

完司

孝男

和歌子

雅女

菖子

はるお

芳光

稔

一瑠

一京

一夫

公乃

一粋

節子

節子

裕子

節子

美恵子

みよこ

貞夫

船舶は万来しての拉致の国

いろいろとあつて紫陽花今日の色

選挙戦仲間増えたり違えたり

雑音並みに母の注意を聞き育つ

糖尿の薬ビールで飲んでる

雑音の中で眠る見たくましい

雑音の中から母を聞き分ける

オーバーなお世辞の後に無理を飲む

湯上りのビール幸せひとり占め

雑音も聞こえぬ振りの割烹着

雑音など聞く声持たぬ蟻の列

川柳ふうもん吟社

杉本 孝男報

泥舟に人妻と乗るスキャンダル

おつけのころ炯もできてるお待ちあれ

おつけのころ妻がビールを出すだろう

うちの娘を愛したのなら婿に來い

スキャンダル芋づる式に顔が出る

言い訳を信じた振りで仲がよい

信心が足りぬもつとお布施を積みなはれ

美しい日本語なのに何故略す

愛したのつて口より先に眼が喋る

絶望の果ては金だけ愛したの

信念を貫く父の力こぶ

鬼の首取ったなあいつよくはしゃぐ

愛したの来世も君と契りたい

別れても可愛い心捨て切れぬ

これも愛あれも愛かと年齢重ね

君が欲しいおつけの頃と言わないで

昌夫

和美

茂平

淑子

とみ

桜子

よし子

孝子

里子

令子

洞庵

洋々

大鯨

秀男

保子

節子

蟹郎

朋恵

夢路

一京

一瑠

昌鼓

雅女

茂登子

志緒

修

スキャンダル詰めておきたい玉手箱

楽しみだおつけの頃に俺を越す

愛したの神へこっそり永遠誓う

よれよれになつても捨てぬ愛したの

土に生き土を信じて種を蒔く

追いかける記者スキャンダル好きらしい

スキャンダル出て有名になつていく

背信と知りつつ愛に溺れだす

ベツトでも家族と同じ愛したの

趣味豊か夫はカラオケ愛したの

自分史に記せぬ愛の余白あり

性善説信じて無人販売所

どうであれ明日を信じて研ぐお米

逢えること信じ花時計も回る

川柳塔きやらぼく

福代

天雀報

何事も苦にせず生きるええみたい

ひとりでも行ける小さな喫茶店

花一杯咲かせ一人の誕生日

五月晴れ少し自信を取り戻す

三連休孫かき回しありがたう

遺言を聞いて息子が遠くなる

合飲の木に休んで風の子守歌

相応の暮しと顔で生きている

本箱に凜としている布表紙

安心をして三方の言葉聞く

散る日まで光らせよう母の海

報復じゃないよと肩を濡らす雨

一粋

春名

益子

幸子

無限

はつ江

金祥

圭一郎

宗明

のり代

康夫

穀

良子

孝男

清人

杏

ゆき

春枝

天雀

寿々子

瑞枝

初枝

八重子

やえ

玲子

てい子

新型の病氣信号無視でゆく

失敗のなみだ出发点とする

断るに勇氣とエネルギーがいる

ボケ老人前後の語つながらぬ

オリエントの宝にわかに神隠し

人垣をくぐつてのぞく好奇心

黙々と映像をみる曾つて兵

縁あつて一期一会の共白髪

山登りもう無理だよと膝わらう

海よりも優しくしようと思う湖

雨の庭もすこし花を植えようか

この秋に向けてマスクを買いだめる

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

この日本どう生き抜くか下り坂

慧眼の社長が見抜く下心

登山道リボンを付けて下調べ

ぶら下げたブライド少し重すぎる

意気込んだ日記の白いページ数

過ぎし日のページ還暦おめでとう

好きな詩のページに葉はさんどく

目はつむりページはめくる昼下り

この頁読むとおねむになる赤子

バラバラとめくるページの泣き笑い

自分史のページに疼くものがある

わが心わたしが暴く夜の日記

暴かれたへそくり問われ四苦八苦

孝子白学 天下御免で暮る

暴かれた過去 魅力のある男

スミエ

千絵

ふみ

晶子

なみ

千春

蘭

富美子

弘子

日枝子

千代

田鶴

ばあちゃんの昔の恋をあばかれる

ナースキャブろうそくの灯が美しい

キャンドルに映えてスタートした二人

お灯明うなずくように揺らいでる

ロウソクをともし喜び悲しみも

一日が無事に終った仏間の灯

百目ろうそく世代をつなぐ小京都

三姉妹つぎつぎ父へ宅急便

儲かぬ仕事で埋まるカレンダー

回り道しながら明日を考える

川柳塔まつえ吟社

津川 紫見報

うつの日はローマの休日抱いていた

時すでに遅かったのか抱き損ね

湖を抱いて華やぐ夕茜

抱き抱え小さい命重たいな

よそのひと抱いたこの手が憎らしい

瘦せた肩抱けばホロホロ鳥が啼く

迂闊にも切手忘れて侘び電話

ラブレター切手の柄も気にかける

見返りの美人切手にはれてる

願ひ込め大事な切手貼って出す

いい返事期待しながら貼る切手

私の心の奥に貼る切手

雑草に心くられ野仏昼寝中

除草機の死角にあって生き延びる

割れ目から雑草グーと伸びてくる

朝露も束ね農婦は草を刈る

雑草の夢をもぎ取る罪な指

寿美子

博子

正坊

郁子

タミ

メ女

萬的

春

石舟

則彦

日出子

義良

すみこ

注湖

茂美

きみえ

政子

俊一

芳山

知恵子

静恵

畔

薫

節子

多喜

房子

浜丘

雑草で終わる覚悟の出来た葦

騒音を避けてみどりの風に会う

波の音一足早い夏の風

明日と言う大きな二字の音を聞く

音のする方へと鬼が動きたす

雀の子ねらつて蛇は音させぬ

お隣は何か不思議な音がする

一人だけ無口の人が居る恐さ

戦いが終わった日から喋らない

黙々と髪は仏を彫りつづけ

無口ですくいえ私は失語症

伝統を守る無口な太い指

無口だが吐いた言葉は胸を刺す

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

ニトロ携帯この世に未練たんとある

携帯の切り忘れがあるコンサート

携帯に読経のリズム崩される

所かまわず携帯電話鳴り続け

満願へ歩幅も広くなるわらじ

埋み火を抱いてる雑兵の野心

仏門に帰依した歩先から光る

歩の悪い話だけれど義理で受け

紫陽花のオーラはるばる花紀行

島を発つ少年が湿る春

涙腺の奥に女の城がある

空白のページが湿る遠い過去

湿っぽい話へ明日が笑つてる

湿っぽい男にたとえ注いでやる

桂子

邦代

ちえこ

幸子

昭二

螢

町紅

きみ子

蘭

玲子

多賀子

ちかし

紫見

シマ子

幸生

巳代一

弘直

とみを

浩子

弥生

庸佑

柳伸

欣之

度

民

一風

ダン吉

峡谷の底に流れがある境界

境界を越えて他人の来る恐さ

鯨舌が境界線を見失う

拉致の子等境界越せず春を待つ

なわばりをめぐり動物殺しあう

五十年境界線を持つ夫婦

境界の杭で笑っているカラス

人間のエゴ神の領域越えたがる

いやなことすぐに忘れてしまふ癖

新緑の雨も緑に染めて降る

紫陽花の彩深みゆく雨の詩

一呼吸間を置き言葉丸くする

石蹴ってけられて丸くなつていく

優しさにいのち重ねてみたくなる

一本のネジにわたしがぶら下がる

南大阪川柳会

吉川

寿美報

上欄が五臓六腑に染みる夜

森林浴五臓六腑に染みるまで

CTでおなかの白さ確かめる

腎臓の一部提供子を救う

内臓をいたわるための粗食です

一言が煮え湯に水をさす如く

年一度安全確かめあうき煮

ゴツ煮のような地球で生き残る

深刻な話へ鍋は煮えつまる

煮つめればかならず答え出るだろう

天声人語煮ても焼いても今日は今日

煮え返る腹を押さえている度量

半蔵門

きらり

ひさ乃

欣子

和夫

菜月

洋

酔虎

ミツ子

加津子

春蘭

宏至

ますみ

千里

森子

弘泰

シマ子

ひさ乃

雅文

朝代

宏

なぎさ

叡子

たもつ

千里

柳弘

庸佑

五十年妻と綻び縫い合わせ

綻びを何度縫うても洩れる金

溺愛が縫代浅い子を育て

糸尻がしつかり結べた時勝てる

妻の口縫えたら静かなる余生

極楽へ帰る着物縫うてある

熱愛でなくても夫婦五十年

火も水も君のためならくぐります

熱愛の核に嫌われているヒト科

熱愛のはかなさ知ってる遠火火

またの世もきつと夫婦に比翼塚

熱愛の甲斐ある今のタイガース

ハードルを越えたい愛が過熱する

助っ人は宅急便の誠実さ

尻に火がついた作家の猛ダツシュ

嫁にやる納期へ父の酒の量

煮えさらぬ二人をおいて行く時計

外見はどうあれ内臓見てほしい

倉吉川柳会

竹信

照彦報

田畑が御殿に変わりをびえてた

病根が青葉に負けて枯れて行け

隙間風防く錠打つてある

天国へ届く切手がありますか

かまきりはちゃんな鎌でも身構える

螢はキラキラ蓮華はまつ赤なり

浮気する記念切手を買いました

リサイクル子供を救う古切手

石礫やんわり防く笑い顔

萬の

章久

遠野

度

明正

洞庵

東雲

重人

ダン吉

志華子

寿美

三男

珠美

初太郎

柳伸

朝子

頂留子

民代

龍枝

和子

節子

幸子

玲子

和歌子

修

悠子

芳光

日焼け止めUVカット使用する

総理大臣の月給とわたしの年金

停年がないんだ主婦も大臣も

汗流す防衛庁の石破さん

変わり身の早さに親も匙を投げ

五十円切手キミも旅人か

大臣も銀座のママに歯が立たぬ

総入歯虫歯予防と縁を切る

総理さまこの痛みいつまでですか

気休めのようなマスクで口にフタ

大臣にしたくは無いと子を想う

いらいらを防ぐ好物食べている

指を折り惚け防止にと五七五

汗かいて相も変わらず駄句の山

年金をねだる孫の手防げない

紫陽花に負けず私も変えてみる

招待状打算も入れた切手貼る

防ぐのに尻尾を切つてまた逃げた

一本の杭で防いだ田のママシ

一円が足りぬ封書が出戻りに

喜びも悲しい知らせも知る切手

川柳さんだ

北野

哲男報

独り言ニヤーと返事をしてくれる

アバタ面それでも月は見飽きない

露天湯で今宵癒しの流れ星

見栄はらず心も軽く衣更え

螢舞う震災後居る町が好き

燃えている夕日が明日を保障する

泰輔

螢

(前)喜美子

賀寿恵

ゆり子

石花菜

重忠

和枝

勝誉

秋草

よしえ

康子

日出子

玲坊

(西)喜美子

京子

雄々

睦々

次男

照彦

真由子

二英

雅司

千恵子

章子

婦美子

二三つ悔いを重ねる嘘一つ
陽の目みた日傘に亡母の匂いあり
核廃止叫ぶ頭に核の傘

デパートへ忘れた傘を買いに行く
退屈な日は川柳も出来ません
梅雨晴れに退屈そうなる雨蛙

退屈が雨のリズムでジャズになる
リハビリの一步に妻の拍手付き
ゆつくりとルーツをたどる道の駅

一合をゆつくり飲んで足りる箸
思い出をゆつくりかむと母の味
ゆつくりのリズムで暮す老夫婦

暇つぶし男のヨコリぴんと立て
する事がないから妻と喧嘩する
ゆつくりとして下さいと茶も出さぬ

ごゆつくり宿と弔辞で聞くセリフ
極楽へ時間をかけていくつもり
もう逢わぬ覚悟の傘がたためない

くろぼこ川柳会

前坂なお美報

いざという時にはベツト盾になる
細い道まっすぐ前をみて歩く
砂利道を歩いた足たへこたれぬ

喝采を浴びたテープが擦り切れる
後や先切ったテープが丁度良い
鐘が鳴る三つ合格のど自慢

春祭鳴物囃し子等騒ぐ
高齡時代うは捨て山は要りますか
時代物取っておいたら金にばけ

時代物取っておいたら金にばけ

房江
真美

藤修
朗

正行
康子

ちあき
サクラ

開子
千代子

一之
歳子

たもつ
忠

正和
哲男

朋月
千代

遊子
なお美

和代
菜美

禁酒する人のとなりで飲んでいる
酒止める煙草止めろと死んだらか
勲章のない我が道をまっしぐら

妥協して結ぶテープに情が湧く
七五三お宮参りに鈴鳴らす
海鳴りも山鳴りも聞き喜寿となる

不景気な時代辛抱強くなる
なんでだろう変な時代だ平成は
人のこころ土足は固く禁じます

禁じ手を使う影から動き出す
ケトケトと鳴く鳥春は修行中
冬の時代を生き続けても夢捨てず

脱水機のような時代を生き延びる
立入禁止の札たてて秘密会
裏道を歩く背中が泣いている

川柳塔みちのく

小寺

産声にむくむく夢の花が咲く
子がボツリ言った言葉が胸をつく
病み臥して花一輪に癒される

幾山河越えた夫婦にある安堵
津軽富士恵みを受けた赤リンゴ
今までも恵まれて来た有難し

エベレスト古希を掲げた日の恵み
バリケード越えて番の蝶がとぶ
六月の花嫁が呼ぶ青春譜

太陽の恵みトマトを赤く染め
父を越えた子から挑戦状がくる
紫陽花の顔がはこる雨の音

一揆
静生

帆雀
常子

ふみ子
重忠

あらた
はるお

小や子
みち子

公弘
螢

あすなろ
きよし

大吾
ヒサ子

てる
隼人

順風
慕情

恵まれたお尻も母ゆずり
父さんがぐつと引き立つ子の版画
潮満ちて倅せそうなる呱呱の声

いずも川柳会

佐藤

釣つてから良い悪いの言われても
お見合いに釣書きれいな女の子
釣り上げたつてもまんまと釣られてる

名人は餌がなくても釣つてくる
釣りに内緒のものを買ってくる
釣りのきらめき答釣り上げる

一瞬のきらめき答釣り上げる
がっかりの迷路で見えた突破口
長い行列わたしの前で売り切れる

がっかりとしていて鍋の悲鳴さく
がっかりとしていて梯子はずされる
肩パッドはずしがっかり座り込む

雲走る風のいたずら帽子飛ぶ
蛍飛び蚊帳で過した日と思う
飛ばぬよう糸がついてる千羽鶴

真実の前を噂が飛び回る
飛びながら哀しみ一つずつ捨てる
ボケつつ入れた内緒が飛びたがり

飛び散った火花にいとど鍛冶の技
百千の海を迷わず飛び続け
一服もせず自転車を繰り返す

あじさいと一服してる雨蛙
一服の裕に溶けて輪がはずむ
電池切れ一服させてから動く

電池切れ一服させてから動く

一花
五葉庵

治代報
美佐子

邦子
多喜

蘭水
きみえ

芳枝
多輝子

昌枝
ミツエ

桂子
満江

久子
和歌子

英子
茂美

文子
美子

一服の側にタンボボ凜と咲く
俺に似た水馬とうまいお茶
蹟いた石の情けを買ひ被る
私の希望が転ぶ風もある
右脳が乾いて転げそうになる
一センチ段差に転びそうになる

川柳クラブわたの花 吉村

一風報

啓三
玲子
多賀子
すみこ
章峰
れいじ

過去の罪一部あけたら全開に
新聞を湿らせて掃く母の背な
りハビリの歩行は厳し恢復期
身を削る思いで保証印を押す
人情のいちばん奥にある温度
日向ぼこ犬にもうつる大欠伸
定年後充電なしのボランテア
襟元に八十八夜の別れ霜
家計簿の赤字に削るものがない
散歩道トイレあるとこ確かめる
言い勝って空しさばかり外は雨
簾椅子に隠れるほどの母になる
追伸に蜜狩りにと誘われる
朝歩き旧友会えど名を忘れ
幼女から少女に巣立つ孫まぶし
晩学に燃える友から氣をもらう
境界を引けば絆もやせて来る
三寒四温煮込みうどんと対話する
紙一重阿呆と利口の境界線
拳骨を見舞う親父にある氣骨
帳尻を合わす師走の風寒し

(彌)道子

日が沈む歩きたりない二人連れ
やる気まだ冬眠中の三回忌
みてみたい頑固おやじの脳の中
鉛と鞭小さな掟叩きこむ
桜トンネル夢ふくらますランドセル
斜めから見ると人間よく見える
爺が逝き掟も風と共に去り
つまりは小さな掟破るかも
春の星亡夫の合図の星一つ

川柳藤井寺

高田美代子報

宏至
ミツ子
キク子
君江
宏
一風
きらり
欣子
幸枝
ヨシ枝
武義
栄一
桂子
瑠美子
喜代子
シマ子
雅枝
敦子
庸佑
昌子
史郎
昭子
耕策
六点
志洋
惠勇

二作目のヒットはゆつくりと燃える
ゆつくりとまぜる千円のコーヒー
ゆつくりと座りなおしている自信
補聴器は引き出しにある頑固者
頑なに心に映る海の碧
雨垂れの頑固石にも穴あける
リタイア後頑固なぜに何もせぬ
夫婦とも頑固空氣が流れない
思われているのかニキビなおらない
逆流を泳ぎ続けている頑固
絵は売れぬけど離さないベレー帽
風に紛れてゴメンナサイが聞こえない
自分史をゆつくり読むと悔いがある

長柳会

加島由一報

元紀
扶美代
重人
春蘭
絹歌
鐘造
登志子
花梢
みつこ
アキ
一筒
美代子
悦子
武男
ひろし
淳司
由一
和代
一慧
芳野
英美
良男
史
正一
輝子

思い出が嵩張る胸の小引き出し
かたつむりあじさい寺のお弁当
あなたにはもうブレイキはかけません
ゆつくりとショパン聴いてる雨の午後
春雨と思えば楽し妻の愚痴
ブレイキを全部外して旅の宿
左遷地の思いに酔うワンカップ
青春の写真一枚捨てられぬ
あじさいの心変わりには責められぬ
思い出の中にいつでも母がいる

ふくべむら川柳

村上 信子報

ヨコ文字をペラペラしゃべる塾帰り
ペン持てど句は出来ぬまま頭掻く
大胆なラブレターだが誤字だらけ
ペラペラと英語であいさつ株あげる
大胆な経済改革実りなく
幸せなペンで結婚届書く
筆ペンでお祝いと書く義理包み
ペラペラの総理の平和軽く浮く

富柳会

池 森子報

横顔が素敵途中で降りないで
まぼろしに恋して蝶の自閉症
ふる里がテレビに写る蛍狩り
写したら嫌った母に瓜二つ
虚飾みな脱ぎ捨て風の中五月
百体の仏をうつす万華鏡

潤子 もこ 幸雄 けい子 直樹 和美 正子 マサ 正子 敬二

そよ風に疑問符落ちてメイストーム
新緑の風のおいも写生する
良く撮れた写真葬儀に取って置く
健康法問われ探している元氣
真実をうつして高し天の青

何時までも椅子に執着老議員
差し出口世間知らずが大火傷
教会の椅子でひとつの罪を干す
ブレイキも信号もない横車
夕日から明日をもらう父の舟
閃光が横切り落馬した武将
接点をゆつくり離れ霊柩車
人生も九合目あたり横を見る
水やりは平等だったかと花に
寒風に晒す歩行器車椅子
湯冷めするほどに廊下の長い宿
切手斜めに破った恋が胸を刺す
恋唄の二番を知ってから微熱
決断をしない男で生き延びる
真実と戦う覚悟ノーマイク
飛び立てる姿勢で君の横にいる
恋の真ん中でたましいを合わす
聞く耳を持つと横からぬくい風
助走から着地へ夢を継ぎ足して

堺川柳会

河内 月子報

青空を信じて生きたる車椅子
安物を一杯詰めた頭陀袋

和喜子 深雪 亮幹 誠 一夫 花梢 紅紫朗 洋介 鬼焼 帆雀 哲史 東雲 ひろこ 春蘭 宏至 信博 奈保美 初太郎 奏子 扶美代 欣之 キミエ 森子 春蘭 公誠

左遷地の空の碧さに癒される
シャワー全開涙と汗の消えるまで
いい汗と相性のいい古タオル
智恵子には生きていけない今日の空
流してきた汗か稲の穂で光る
山の神いっぱい飲んでずっこける
汗つきで恋人と手をつなげない
いい汗をかいて山頂風涼し
汗ばんだ野良着を夕日染めあげる
良い汗をかいて少年光り出す
思いっきり青春蹴った逆上り
あの世への仕度何にもしてません
優しさにいけずも混ぜる頭脳犯
握手した手に残された熱い汗
飛び起る汗びっしょりの白昼夢
汗の跡きつと太輪咲くだろう
帰省子の汗臭ささえうれしがり
梅雨したくてんでん虫もわたくしも
ネクタイを外してからの青い空
借金に嘘もまじった空涙
成し遂げた日は何処までも空青し
梅雨空がみごと変身させた花
やがてくるいけずのつげがずしりと
シナリオをころころ変えて老い支度
恋している何を言ってもうわの空
一人だけ扇子が忙し更年期
空財布妻の目に付くとこに置き
まだ悪夢残す空地に盆が来る

鐘造 美代子 みつこ りつこ 扶美代 深雪 (志) 十代 忠敬 惠勇 アキ 潤子 伽羅 日の出 篤子 舞夢 半銭 (矢) 五月 文 かりん 朋月 玄也 八千代 冬虹 梓 像山 さくら つつや

柳界展望

として、6月25日尾道行。
○川柳塔まつえ川柳大会に、
薫風名誉主幹、天笑主幹、
たもつ・楓楽副理事長他5
名本社から参加。

☆川柳塔まつえ誌齢二〇〇
号(四〇〇句会)記念大会
は、6月29日150名の参加を
得て松江テルサで開かれた。
当日の本社関係者天位

百歳の表紙に尻を叩かれ
る 前 たもつ

僕の町栄えるように町で
買う 新家 完司
はした金につながられ空を
見ている 新家 完司
強敵が現われ加走する歩
幅 河内 天笑
湖の中で金婚式がくると

小林 妻子
バランスをとると味方が
増えてくる 三島 淞丘

▼人事動向▲

○薫風名誉主幹は、第四回
文学ルート川柳第二次選者

○島根県川柳連盟役員(本
社関係者のみ) 会長・尼
れいじ 顧問・恒松町紅
▲木本朱夏さん(常任理事)
は、「川柳オホーツク」8月
号から6カ月「流水集」の
鑑賞文を担当する。

▲西村哲夫氏(理事・東大
阪市)が、祖父である路郎
師の著書「川柳とは何か」
を読売新聞社に送り、6月
6日付「編集手帳」に紹介
された。路郎師の紹介は5
月23日に引続き二度目。

▲5月27日付大阪日々新聞
21面に、城北川柳会が写真
入りで紹介された。句会の
雰囲気や吐田公一会長の川
柳に対する姿勢、上達のコ
ツなどを4段ぬきで掲載。

▽計 報△

■酒井輝氏(同人・国分寺
市)は、5月26日肺炎のた
め逝去。30日葬儀。85歳
(P106に追悼文を掲載)

■西沖彰雄氏(同人・鳥取
県)は、6月29日胃癌のた
め逝去。葬儀は7月1日自
宅で行われた。76歳

■川上良平氏(理事・川上
大輪氏御尊父) 6月19日急
逝。79歳

■松本ただし氏(同人・川
西市)は7月7日心不全の
ため急逝。7月9日飛翔殿
で葬儀。85歳

☆だるま川柳大賞募集Ⅱ題

「だるま」はがきに2句(未
発表) 住所・氏名・阻を明
記 波多野五楽庵他5名共
選 8月31日締切 千円千
036-0412黒石市袋字富山72-
1 津軽こけし館宛
▽訂正とお詫び△

5月号P66下段14行目、
叱られた孫を……を本人申
し出により削除 P115下段
28行目、ヨシ恵↓ヨシ枝
6月号P61上段4行目、
雨だけが↓雨だれが P108
下段27行目、ヨシ恵↓ヨシ
枝 P113上段10行目、邦彦
↓邦彦 P117中段10行目、
靴もふくらみ↓靴ふくらみ
7月号P90下段上田俊路
選↓刈田泰司選 P91上段
29行目、土器に耳貸せば……

ホームページ開設

7月1日から、本社句会、各地句会を
紹介していますのでご覧の上、川柳に
関心をお持ちの方にお勧め下さい。

アドレス

<http://www.senryutou.join-us.jp/>

を削除 P101中段7行目、
弱者吐く↓弱音吐く
常任理事会Ⅱ7月7日、出
席19名 ①合同句集発行と
80周年の持ち方について検
討 ②川柳塔まつり記念品
等再確認 ③賞選考委員
最終決定報告、集合日 ④
アンケート報告(同人部)
⑤その他
次回常任理事会Ⅱ8月7日
(木) 13時アウイナ

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 会 梨 花	16 日(土) まで 追憶・黄・汗・ゴッホ・雑詠	投句先 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4-268-205 坂田和歌子
川 柳 ねやがわ	17日(日)午後1時半から 温度・中毒・催促・自由吟	寝屋川市立総合センター 4 F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	17日(日)午後1時半から 無茶・番組・働く・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川 柳 会	18日(月)午後1時から メンバー・二階・演じる 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卵 の 花	21 日(木) 正 午 から 鋭い・出来心・ぴったり 坂・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
川柳クラブ わたの花	22日(金)午前10時から 親・生む・空白・雑詠	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
城 北 川 柳 会	23日(土)午後1時から ヒット・仏・貧乏・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏鏡典子
東大阪市 川 柳 同 好 会	23日(土)午後6時から 雑種・寝る・キャリア・神	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 川 柳 会	24日(日)午後1時から 癖・どきり・マーク・「さなり」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷺駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷺8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	24日(日)午後1時から 炎・ゲリラ・忘れんぞ	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京 都 塔 の 会	25日(月)午後1時から 大・苦い・気味	ハートピア京都 地下鉄九条駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川 柳 塔 みぞくち	25日(月)午後8時から 暑い・冷やす・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南 大 阪 川 柳 会	27日(水)午後6時から 夜具・油・よい・利害	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
八尾市民 川 柳 会	31日(日)正午から 第50回 八尾市民川柳大会	7月号 (P.78参照) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6629-6914) へご連絡ください。

8 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	1 日(金)午後 1 時から 泳ぐ・極楽・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘 5-25-17 春城年代
堺川柳会	2 日(土)午後 10 時から 第 21 回 夜市川柳大会	7 月号 (P.118 参照) 〒593-8305 堺市堀上緑町 2-16-3 河内天笑
富 柳 会	2 日(土)午後 1 時から 糸・途中・雑詠	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ 200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町 4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	2 日(土)午後 1 時から 同窓会・虫・凄	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿 2072-17 谷口次男
川 柳 塔 唐 津	4 日(月)午後 1 時半から つい・驚く・翼	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田 1517-13 宗 水笑
川 柳 塔 な ら	8 日(金)午後 1 時から 拝む・ツアー・裸足	奈良市立中央公民館 4 F (近鉄奈良④出口徒歩 5 分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾 62-6 渡辺富子
打 吹 川 柳 会	9 日(土)午後 1 時から 泡・びしびし・馴染む	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町 1879 高多博丈
川 柳 塔 ま つ え	9 日(土)午後 1 時半から 甘える・味方・夜明け	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木 9-23-22 三島崙丘
川 柳 塔 みちのく	9 日(土)午後 4 時から ちらちら・梅・とんとん	弘前市桶屋町 4-7 居酒屋とんぼ 2 階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町 50-5 波多野五楽庵
川 柳 塔 わかやま	10 日(日)午後 1 時から 生臭い・レシピ・うるさい 「へ(助動詞)」	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺 111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	11 日(月)午後 1 時から 認める・番・ほろり・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 3 分 プレラにしのみや 〒663-8202 西宮市高畑町 2-82-308 西口いわお
ほ たる 川 柳 同 好 会	12 日(火)午後 1 時から 炎・かすれる・ぼつぼつ	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル 5 F 〒561-0813 豊中市小曾根 2-4-1 水野黒鬼
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	12 日(火)午後 1 時半から 太陽・耐える・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス④番尾浜 2 丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江 5-2-47 田辺鹿太
岸 和 田 川 柳 会	16 日(土)午後 1 時半から 塗る・熱心・乗り気・励む	市立福祉総合センター 2 F 南海線岸和田駅東歩 3 分 〒596-0827 岸和田市上松町 610-85 芳地狸村

編集後記

ないような重い内容で、読んでいて圧倒された。

☆終戦後捕虜生活を送られた久峰氏は、80歳の今も鑒と商売をされている。また、枕元に青酸カリを置いて寝られたたず子さんは、「この経験があつたからこそ、私達夫婦には人より強い絆があります」と語っておられる。このような辛い経験をされた皆さんが、それをプラスに生かし、後の人生を力強く生きて川柳を楽しんでおられることを思うと、ふつと救いを感じる。

☆賞 路郎賞・川柳塔賞の応募月となった。本誌最終頁水色の応募用紙で、資格ある同人・誌友の皆さん全員の応募をお願いします。応募規定はP112・113に掲載しているのでご覧下さい。

☆第二次世界大戦が終わつてすでに58回の夏を迎えたが、本号に「戦争と私」特集を編んだ。3月に勃発したイラク戦争、宗教の違いに根づく内乱、頻発するテロ、近頃の北朝鮮の不穏な様子などから、あらためて往時を振り返り、平和への希求を述べていただいた。

☆実戦で命びろいをされた人・中国大陸での死を覚悟した日々・教育者としてのご苦労・戦後の困窮生活……17名の方のどれもが、制限字数ではとても収まり切れ

折るう。

(ふ)

★近ごろよく目にする耳に

するのが「癒し」である。

私はもっぱら癒される受けた。身で、人々の情けにつかまりながら生きてきました。

人間であるが、しかし、とつくづく思う。以前は癒されるのは大自然や家族愛であつたと解釈している。山行は自分の足で歩けると自己判断し、リーダーを信頼してついで行く。途中滝に、高山植物に、小動物などに出会い頂上に到達すると汗

のかいた分、身も心もすつかり癒される。また、以前は大抵の家で犬を飼っていた。家人と同じものを少し塩気を抜いて与えていた。家族の一員であるとともに向こうも一生懸命に家の番を分担していたと思う。

★ところがである。最近の旅行ブーム、交通網の発達などで手軽に登山できるようになった。また、核家族マンション住まいが増え小型犬ブームになる。さらに

★川柳を癒しの糧とするのにはまだまだ勉強不足だが皆様のご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

(よ)

大阪の初空襲について

本誌特集「戦争と私」に拙稿をご掲載いただきようこんでいる。ちよつとした裏話があるからだ。

大阪への初空襲について述べた。記述にあたり事実確認をした。府の大阪百年史、大阪市史、阿倍野区史、ピースおおさか、みな初空襲を昭和19年としている。二三の著作物も同じだ。違うんだ。昭和17年だと言うと、市史編集室の

人は「そのときB25は東京、名古屋、神戸へ行き、大阪には来ていません」という。「大阪の2か所に爆弾を落して行つたのだよ。両方とも私は実見しています」と史実の調査と市史の修正をお願いした。

このときの空襲は、あとのB29による大空襲に比べ被害は少ない。だが貴重な戦史のひとつとみだし、第一回の空襲となると、きちんと整理し、記録されねばならない。

(早川 棲世)

進んで「科学大」の登場と相成った。ン百万円のロボット犬から今は玩具の犬でふわふわ抱き心地よくお喋りするのでもできた。これまた癒しとなれば良きかな。

★レグリーベックの計報を聞く。青春時代の癒しであつた。

★川柳を癒しの糧とするのにはまだまだ勉強不足だが皆様のご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

(よ)

ひとこと

大阪の初空襲について

本誌特集「戦争と私」に拙稿をご掲載いただきようこんでいる。ちよつとした裏話があるからだ。

大阪への初空襲について述べた。記述にあたり事実確認をした。府の大阪百年史、大阪市史、阿倍野区史、ピースおおさか、みな初空襲を昭和19年としている。二三の著作物も同じだ。違うんだ。昭和17年だと言うと、市史編集室の

人は「そのときB25は東京、名古屋、神戸へ行き、大阪には来ていません」という。「大阪の2か所に爆弾を落して行つたのだよ。両方とも私は実見しています」と史実の調査と市史の修正をお願いした。

このときの空襲は、あとのB29による大空襲に比べ被害は少ない。だが貴重な戦史のひとつとみだし、第一回の空襲となると、きちんと整理し、記録されねばならない。

(早川 棲世)

進んで「科学大」の登場と相成った。ン百万円のロボット犬から今は玩具の犬でふわふわ抱き心地よくお喋りするのでもできた。これまた癒しとなれば良きかな。

★レグリーベックの計報を聞く。青春時代の癒しであつた。

★川柳を癒しの糧とするのにはまだまだ勉強不足だが皆様のご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

(よ)

大阪の初空襲について

本誌特集「戦争と私」に拙稿をご掲載いただきようこんでいる。ちよつとした裏話があるからだ。

大阪への初空襲について述べた。記述にあたり事実確認をした。府の大阪百年史、大阪市史、阿倍野区史、ピースおおさか、みな初空襲を昭和19年としている。二三の著作物も同じだ。違うんだ。昭和17年だと言うと、市史編集室の

人は「そのときB25は東京、名古屋、神戸へ行き、大阪には来ていません」という。「大阪の2か所に爆弾を落して行つたのだよ。両方とも私は実見しています」と史実の調査と市史の修正をお願いした。

このときの空襲は、あとのB29による大空襲に比べ被害は少ない。だが貴重な戦史のひとつとみだし、第一回の空襲となると、きちんと整理し、記録されねばならない。

(早川 棲世)

進んで「科学大」の登場と相成った。ン百万円のロボット犬から今は玩具の犬でふわふわ抱き心地よくお喋りするのでもできた。これまた癒しとなれば良きかな。

★レグリーベックの計報を聞く。青春時代の癒しであつた。

★川柳を癒しの糧とするのにはまだまだ勉強不足だが皆様のご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

(よ)

大阪の初空襲について

本誌特集「戦争と私」に拙稿をご掲載いただきようこんでいる。ちよつとした裏話があるからだ。

大阪への初空襲について述べた。記述にあたり事実確認をした。府の大阪百年史、大阪市史、阿倍野区史、ピースおおさか、みな初空襲を昭和19年としている。二三の著作物も同じだ。違うんだ。昭和17年だと言うと、市史編集室の

人は「そのときB25は東京、名古屋、神戸へ行き、大阪には来ていません」という。「大阪の2か所に爆弾を落して行つたのだよ。両方とも私は実見しています」と史実の調査と市史の修正をお願いした。

このときの空襲は、あとのB29による大空襲に比べ被害は少ない。だが貴重な戦史のひとつとみだし、第一回の空襲となると、きちんと整理し、記録されねばならない。

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（10月号）

地名

姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



○印を入れてください。

路郎賞（川柳塔欄・同人）	川柳塔賞（水煙抄欄・誌友）
--------------	---------------

きりとりせん

地名

姓 · 雅号

◎下段に掲載月と掲載頁を記載のこと。
◎裏ページの要項を読んで応募してください。

月	月	月	月	月
頁	頁	頁	頁	頁

応募要項

① 川柳塔欄・水煙抄欄に六カ月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成14年9月号から平成15年8月号までの自分の入選句から8句を選ぶ

路郎賞——同人は川柳塔欄から応募

川柳塔賞——誌友は水煙抄欄から応募

③ 5句と掲載月、掲載頁を楷書で書き、8月10日必着のこと

④ P 112・P 113を参照して下さい。

作品募集

10月号発表(8月15日締切)

川柳塔(8句)	河内天笑 選
水煙抄(8句)	板尾岳人 選
愛染帖(3句)	波多野五楽庵 選
茴香の花(3句)	藤田泰子 選
課題吟(3句)	「ラッシュ」
	「タクト」
	「ソフト」
播本充子 選	山本蛙城 選
平松かすみ 選	三宅保州担当

11月号
課題吟「主婦」「本人」
「いろいろ」
初歩教室「顔」

本社8月句会

とき 8月7日(木) 午後5時半開場・6時半締切
ところ アウィーナ大阪 4階
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題 「調子」

席題 1題 当日発表(各題2句以内)

会費 1000円 投句料 500円

「調子」	森 茜 選
「まるい」	長浜澄子 選
「ながなが」	福本英子 選
「飾る」	江口度 選
「疼く」	河内天笑 選

本社9月句会 9月8日(月)

兼題 「曲がる」「魔女」「ゆうゆう」
「あう」「売る」

第22年度 夜市川柳募集

第3回「雷」 山本希久子 選
ハガキに3句 8月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
(2)愛染帖・茴香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限り、ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)

二〇三年(平成十五年)八月一日発行

編集兼 発行人 河内 權治

印刷所 美研アト

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

振替 〇〇九八〇一五二三三六八番
電話 (〇六)六元一六九一四番

医療法人社団

湯川胃腸病院

健康保険取扱

消化器科 (内科・外科)

放射線科

ホスピス

診療時間 月～金 9:00～17:00

土 9:00～13:00

電話 大阪 (06) 6771-4861(代) 〒543-0033

大阪市天王寺区堂ヶ芝2丁目10-2

<http://www.yukawa.or.jp>

JR 大阪環状線桃谷駅徒歩3分

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。

あなたの思いをかたちにします

美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178